

言  
靈

島田正路

## はしがき

これから言霊（ことたま）の話をししましょう。皆さんが小学校で習ったア、イ、ウ、エ、オ五十音図が、なぜ右の行の母音が上からア、イ、ウ、エ、オの順で並び、横の上段がア、カ、サ、タ、ナ、ハ、マ、ヤ、ラ、ワの順で並んでいるかご存じでしょうか。これはある時代に単に偶然にこの順序で並べられたものが、そのまま慣習になったというのではありません。どうしてもこの順序で並べなければならない理由があるのです。この理由を、そして現代の日本人が使っている日本語の源泉である大和言葉の一言一音の持つ意味を、深く探って行くと、究極においてこれからお話ししようとする言霊に行き着くのです。

ある言語学者は、「古代の日本人はことたまの存在を信じていました。人間が発した言葉には、その内容を実現する働きがこもっていると思っていました」と言っています。この場合のことたまとは言葉の魂という意味でありましょう。私がお話する言霊とは、言語学者のいうことたまの意味を包含しながら、もっともっと深い意味内容をもったものです。

普通言葉とは、何らかの思考、意識、状況を他人に伝達する手段ぐらいにしか考えられていません。けれどもよく考えてみると、人間は口から発音する以前、頭で考えている時も、実は言葉で考えているのです。心の動きとは言葉の動きと言ってもよいでしょう。その心の動きを深く深く探っていきますと五十音の言霊に行く着くことになります。端的に言って、言霊とは、人間の精神を構成している根本要素ということができましよう。

「これは何だろう」という思考が始まった瞬間、人間の意識は必ず考える側の主体と考えられる方の側の客体とに分れます。この時考える方の側の主体が捨象され、考えられる方の側の客体的内容が抽象化、法則化されますと一般に科学が成立します。物質科学は長い間かかって、*物*とは何であるかの疑問に取組み、今世紀に入ってその全貌をほとんど解明するところまで進歩しました。物質の究極単子である諸元素の発見と、それら元素の先験構造の内容である電子、原子核、またその核内構造の解明です。そして核内エネルギーの解放に成功したのです。

この科学への態度とは全く逆に、考えられる側の客体を捨象し、考える方の側の主体すなわち、人間とは、人間の心とは何であるか、を追求して行って、その人間精神生命の先天、後天の究極の構造を明らかにした時、その最終的な構成要素が言霊と呼ばれるものなんです。

心の根源要素が五十個あります。その五十の要素のそれぞれにアイウエオ五十音を当てはめました。そしてそれを「アイウエオ五十音言霊」と申します。

元素とか原子核内素粒子（核子）が物質宇宙の究極存在だとするならば、五十音言葉はわれわれ人間の精神宇宙の究極存在であると言うことができましょう。言葉とは言語学者のいうような、「言葉の魂」の意味ではなく、人間の言葉と心を構成している根本の言葉であり同時に「たましい」であるものということです。すべての大和言葉の物の名前はこの言葉の法則から命名されたものなのです。

話を變えて現在世界の人類が直面している物心両面の状況を考えてみましょう。物質科学の進歩は人類に驚異の繁栄と利便さをもたらしました。と同時にもしその使用運用をひとつ誤れば、世界人類全体の破滅といういまだかつてない危険の可能性も現出しました。

第二次大戦以後国際緊張はやむ時なく、繁栄の裏にひそむ破綻が常に人類をおびやかしています。このような世界の危機状況に対処するには従来の哲学、道徳、宗教はあまりにも無力です。物質文明の急速な進歩向上に反比例するように、人類の精神文化の水平線は明らかに低下しています。高度に発達した物質文化の巨大な機械のハンドルを握っているのは、いまだ精神的には錬金術の水準にしか達していない、道徳的には幼稚な人間なのです。物質文明と精神文化の完全な跛行状態といえます。

ある精神主義者は物質科学の進歩追求をこの段階でストップさせるべきだと主張します。しかしそれは歴史を逆行させることで、不可能でしょう。要は現代のごとく高度に発達した物

質科学を人類の眞の福祉に役立つようにコントロールすることが可能となるよう、人間精神の高揚自覚ができるかどうかが問題なのです。現代の科学文明を完全に包摂してコントロールできる人間精神とは、現代科学と少くとも同じ程度の精密な詳細な内容を備えた精神の先驗、後天の構造原理でなければなりません。と同時に現代の「科学する心」をその構造図の中に合理的に組入れることのできる精神原理であることが要求されるでしょう。このことが可能となった時初めて人間社会の営みである物と心の文化の両輪が調和の廻転運行を開始できることとなります。

言霊の話は日本語の成立の起源と深い関係を持っています。言葉がどのようにしてできたかはつきりしてきませんが、日本の歴史の発見に明るい光を投げかけることにもなりましょう。これからお話する言霊の原理が、以上の日本と世界の課題に明快な解決策を提供することができるものと思っています。

この本を読んで言霊の意味に興味を持たれた方は、是非ご自分の心の内容に立入り言霊の存在を確認して頂きたいものです。そのことによって我々日本人の話す日本語の持つ素晴らしい内容と、人間の心の靈妙としか言いようのない構造に気付かれることでしょう。と同時に、人間とは何であるか、日本人とは、という問題に明確な解答を手にとりましょう。

目  
次

言 靈

言靈の発見と変遷

言靈とは

五十音の区分

母音

半母音

父韻

親音

子音

再び父韻について

次元の相違と父韻

四つの五十音図

38

37

34

32

29

26

22

18

17

15

10

事物に名を付けること	42
言霊による宇宙とは	45
言霊原理の発見、隠没、復活	48
言霊と古事記	50
言霊と仏教典	65
言霊と聖書	71
言霊を自覚確認する方法について	79
言霊子音の自覚について	102
言霊原理による創造について	114
古事記と日本書紀	124
濁音と半濁音	126
神代文字	129

言靈学随想

日<sup>ひ</sup>文<sup>ぶみ</sup>

俳句と和歌

宗教について

仏教へ

キリスト者へ

漢方医学者と自然農法者へ

ピタゴラスの定理

あとがき

207

201

190

176

160

157

144

135

言  
靈

## 言霊の発見と変遷

今をさかのぼること少くとも五千年以前、おそらくアジアのどこかの高原地帯において賢人のグループが集り、人間の心とはいったい何であるかの研究が続けられました。そして長い研究の結果、人間の心の全構造とそれを構成している最小単元を解明することに成功したのです。それは言霊という人間精神の究極の構造原理であり同時に言葉の原理でもありました。

人間が人間という種を保持している限り決して変ることのない永久不滅の原理法則です。

時がきてこれらの賢人（これを聖<sub>ひ</sub>霊<sub>し</sub>知<sub>り</sub>という）の中から選ばれた一団が住み心地のよい気候温暖な低地に下りて来て、この精神と言葉の原理に基いて人間の文明社会を造り出そうと活動が始まりました。そのグループが最終的に定住地とした場所ははっきりと言うことができます。

この日本列島です。

この島に居を定めた聖の一団はまずその持っている言霊の原理に則って物事の名前をつけました。と同時に原理の図形化を基礎として各種の文字を作りました。いわゆる神代文字です。これ

が文明の初めです。次にその命名した名前のごとく事物を操作伝達する社会の建設に取りかかりました。政治の始まりです。人間精神の真理そのものである言葉がそのまま通用し誤らない社会、人間の理想社会が建設され永く続きました。この真理の言葉、言霊の原理とその運用法は次第に世界中に伝えられていきました。この人間社会の理想精神文明の創造の時代を各民族の神話は“神代”として今に伝えていきます。中国における堯・舜帝の鼓腹撃壤の善政、儒教で伝える白法・結繩の政治の時代、ギリシャ神話の中のタイタン族の支配の時代等々の伝説は、単なる伝説ではなく、実際に精神の究極の原理である言霊の法則に基いて政治が行われ、精神文化が栄えていた時代のあったことを伝えているのです。時代が下って言霊の原理が一時隠没する時がきた時、人はこの原理を神として祀りました。人が人であることの根本理法でありますから、言霊を神と祀ることは当然といえるかも知れません。それゆえ、言霊の原理による理想社会の続いていた時代を神話では神代と呼ぶのです。

易に河図・洛書と呼ぶ数の理法があります(図表参照)。これについて中国の古書に「河は黄

図 1

河図



洛書

四	九	二
三	五	七
八	一	六

河、洛は洛水、古昔伏羲は黄河より出でたる神馬の文に則り八卦を畫し、禹は洛水を治めて神龜を獲、その背文に因りて洪範を作れりとの伝説あるを謂う。然れども此の事実の真否は今之を詳にする能はず」とあります。

言靈の原理を理解しますと、河図といひ洛書と呼ばれるものが明らかに言靈の法則の一部を數の理でもって表わしたのであることが分ります。そこで言靈の原理の隱没の時代のために、神馬とか神龜などと謎めいた言葉で神話として美化したのだということが了解されるのです。言靈の原理が世界中に通用していた期間、世界は精神文化の華咲く理想の時代であつたのです。

この精神の根本である言靈の原理が、その時の為政者らの明らかなる意図によつて、ある期間、隱滅される時がきました。今から三千年ほど前のことです。爾來世界は次第に弱肉強食、權力至上の時代に入ります。その意図とは何であつたのでしょうか、精神と反對の、人間のもう一つの面である物質文明の急速な進歩を促すための方策であつたのでしょうか、精神的に満足している鼓腹擊壤の社会には物質科学の研究は急速には進歩しません。他よりも強く豊かで權力を持ちたいと思ふ競争が物質文明を促進します。この状態は三千年を経た今日まで続き、物質の研究は頂点に達した感があります。この期間人類の精神的荒廢に一定の齒止めとなるよう、隱没する言靈の原理に代えて、人間精神の拠り所として、言靈原理を比喩的に型どつた種々の宗教が創始されました。

日本の伊勢神宮を中心とする神道、中国の儒教、印度の仏教、イエスのキリスト教、その他マホメットの教え等々であります。

「大道類れて仁義あり」とは中国の言葉です。これは左記の消息をよく伝えていきます。仁義とは儒教が教える人間として守るべき最も尊い道徳です。人間精神の究極の原理である言霊の大道が隠没し、頽れたために、儒教の仁義が興ったのです。孔子は堯・舜の治世を渴仰した人でした。霸道権力の政治の期間が三千年続いた現代に至って、その仁義の道徳も見えなくなるほど人類社会の精神的荒廃はひどくなりました。人類の存続すら危惧される時代です。この問題に処していくに現在の宗教や道徳は螻蛄の斧ほどの力しかないでしょう。

この時三千年の暗黒を破って、まさに不死鳥のごとく言霊の原理が甦ってきたのです。確乎とした方策として三千年の権力闘争を基調とした物質文明を産み、各宗教を創成した「言霊」が、神というベールを脱いで私達の手の届く所に顕れてきました。西暦二千年を控えた一九八六年とはこういう時代なのです。

以上言霊の発見から現代までの変遷の歴史をごく大ざっぱに書いてみました。たぶん大部分の識者は荒唐無稽の空想事と笑い飛ばすことでしよう。無理ありません。この世の中のことに処して一本の筋を通すことほど難しいものはないと覚るのが物知りの常識となった、この三千年来の暗闇に浸り切ってしまった現代人なのですから。しかしこれから説明する「言霊」の原理

を、一点の妥協も許さずご自分の心の中に分け入って探究して頂くならば、その空想と笑ったこととがただちにいとも厳肅な「事実」となって一つひとつ心の底から焼きつくごとく認識されることでしょう。

さあ、これから言霊の紹介と説明に入ることになりました。

## 言霊とは

人間が考えたたり、しゃべったり、やったりする時、すべて言葉によつています。言葉に出さずただ考えている時でさえ、実は頭の中を無言の言葉がかけめぐつています。言葉がない時、人間の精神活動は全く無為です。言葉なくして人間の文化も文明もありません。言葉はそれぞれ究極的には五十個の単音の組合せで成り立っています。とすると、その五十個の単音の一つひとつは何なのでしようか。一見その一音一音には何の意味もなくただ人間の口が偶然に出し得る発音でしかないように思われます。そしてその個々の組合せでできている種々の言葉、事物の名前等も偶然と習慣で決定された社会の約束事ぐらいにしか思われないかも知れません。

しかし、事實はどうなのでしようか。

科学者は長い年月をかけて物質世界の謎の解明に挑み、物とは何であるのか、を解明してきました。そして私達が手に触れ、目で見得る物質の、これ以上分割できない究極要素として水素とか酸素とかの元素を発見し、それぞれに名をつけました。さらに近代の原子物理学はそれら元素

の内容に踏み入り、その先天的構造内容である電子、原子核またその内容である陽子、中性子等々の諸核子を発見しました。物質の根本構造が完全に解明される日もそう遠いことではないでしょう。

今、人間が、以上の物質科学とは正反対の方向、すなわち考える人間の精神の主体の方向にどこまでもどこまでも顧りみ踏み入って、もうこれ以上分析することができない根底のところまで進んだらどうでしょうか。その時人間はその究極点に至ってちようど五十個の人間精神の根源構成要素に逢着します。人間が人間である限りその生命現象はこの五十個の根本要素の範疇領域をのみ出すこともなく、またこの五十個以下であることも決してありません。

遠い昔、日本人の祖先はこのことを発見し、この五十個の根本要素に五十の清音の単音を当てはめて命名しました。それぞれの根元要素は人間生命活動そのものであり、力動であり、靈（タマ）であります。それに言葉としての単音を名付けましたので、これを言靈コトタマと申します。現代の言語学者がいう言靈が、言葉の魂、すなわち言の靈であるのに対して、ここで取りあげる言靈はあくまで言と靈の一体となったもの、すなわちコトタマであります。

日本の昔からある言葉すなわち大和言葉は、一つひとつの事物の真相をこの生命の本源の言靈を結合し表現することによって制定されたのでした。例えば科学において、水が水素二原子と酸素一原子の化合によって成り立っているため $H_2O$ の記号で示されるのと同じように、一つひと

つの事物の実相を、言霊の結び合せによって名をつけました。

言霊の一つひとつが精神生命現象の確定した明白な部分部分でありますので、その結合である事物の名前は、何らの議論の余地なくその事物の実相そのままを表現します。すべての事物の名前を名付ける基本の言葉でありますゆえ、言霊のことを「言葉の言葉」ということができます。

また人間精神とは五十個の言霊の総合でありますので、その五十個の言霊を順序よく並べることによって人間精神の全構造を表示することができます。アイウエオ五十音図とは五十個の言霊の配列によって示された人間精神の構造図なのであります。

## 五十音の区分

五十音言霊はどのような構造で精神生命を構成しているのでしょうか。まず生命を構成している根源の内容によって五十音を区別します。母音・半母音・父韻・(親音)・子音ならびにン音です。母音はア、イ、ウ、エ、オの五母音、半母音はワ、ヰ、ウ、エ、ヲ、父韻はキ、シ、チ、ニ、ヒ、ミ、イ、リの八音、その他に子音二十二が加わります。(ン)音については後の項で半母音の中のウとの関連とあわせて説明す

ることになります。)

このうち母音、半母音、父韻の計十七音が生命の先天部分です。すなわち頭脳の中で確かに何かの発想が動いてはいるが、まだ精神的实际現象としては現われていない間の構造と機能です。それに対して、初めて現実相として現象した後天の最小要素が三十二個の子音であります。

以下それぞれの音の生命の内容を簡単に説明しましょう。

## 母音

晴れた日の夜空をじっと見上げていると沢山の星が瞬いているのが見えます。さらに見上げていきますと、それらの星が浮かんでいる広い広い考えも及ばないほど広い宇宙が眼にせまってきて畏怖の念に打たれることでしよう。これが物質的な外界の宇宙です。今度はその場で眼を閉じて思いを自分の心の中に向けて見ましょう。ここにもいろいろな思い、意識、欲望、記憶、感歎、道德観等々が、ちよつと夜空に星が浮かんでいるように現われては消えて行く心の内面の広い広い宇宙が存在していることに気付かれることでしよう。これが精神的宇宙です。さらにこの心の宇宙に起こる自分の精神現象を見つめていきますと、この精神的宇宙というのは単純な唯一つの領域の構造ではなく、五つの別個の拡がりの積み重なりであることと、そしてその重なり方が単に

五つの段階の並列というのではなく、一つの段階が完結した時、その点から次の段階が始まり、またその段階が完結した時点で次の段階が始まる、というように各次元段階の五層の重畳という構造を持っていることが分ってきます。このような心の宇宙を母音で表わし、また五つのそれぞれの次元空間をウ、オ、ア、エ、イ五母音で表わします。

五母音を実際に発音してみて下さい。どの音も息の続く限り同じ音が続き、変ることがありません。もちろんこの五つの宇宙は、そこからそれぞれの空間特有の精神現象が現われてきますが、その宇宙自体は決して現象とはならない先天性の永劫不変の実存です。

しからば五つの母音で表わされる宇宙とはそれぞれどんな空間なのでしょうか。

### 言靈ウ

人間が母親の胎内から生れ出て産声を上げ次にはお乳を飲むことです。赤ちゃんは教えられることなく乳房を吸います。これは生来人間に備わった欲望本能です。これは人間の最も幼稚な機能であると同時に最も初発的な働きでもあります。この欲望の根柢となっている根元の宇宙を言靈ウ、といいます。眼耳鼻舌身と仏教でいう五官認識も結局この次元に入りましょう。赤ん坊が次第に成長して大人となり、美味なものがほしい、肩書がほしい、大臣になりたいと思うその欲望も言靈ウ、次元のものです。この次元の内容をよく表現する漢字を挙げますと、生、有、

産等が考えられます。産業活動はこの次元に属します。

言霊オ、

赤ん坊から次第に生長し、物心がついてくると、人間は自分のしたこと、見たことを振り返って考えて、それはどんなものをどんな順序で繰返せば同じような結果を手にすることができるのかを記憶するようになります。この記憶とその整理の働きの根本宇宙を言霊オ、というのです。この機能の高度に発達したものが一般に学問科学といわれているものです。抽象的概念による経験事項の把握表現の世界です。この言霊オ、の意味を漢字で拾うと尾、緒等が挙げられましょう。

「余韻が尾を引く」、とか「生命の玉の緒」などの言葉があります。過ぎ去ったものの記憶の働きとか、関連とかいう意味の言葉です。

言霊ア、

人間は喜怒哀楽の感情を繊細に表現します。

この感情の世界は、欲望の世界とも記憶の世界とも様相を異にした世界です。この根元の宇宙を言霊ア、といいます。

「ああ」は感歎の言葉であり、阿弥陀、アーメン、アラー等のアは国際的にも共通した感情音

です。

この言靈ア、の次元から宗教、芸術活動が出てくるのです。

### 言靈エ、

以上の三つの宇宙から現われる心の現象は、それぞれ勝手に自己主張をします。欲望、記憶、感情は時には相克し、時には協調します。心の葛藤が起こります。この時、この葛藤しているものをどのようにならした行動にするかの選択に迫られます。感情の赴くままにするか、純粋に過去の記憶の通りに動くか、欲望を先にするか、その按配をどうするか、その選択の機能の根源宇宙が言靈エ、であります。

「エ」らぶ現象が出てくる根元の世界です。

ともするとこの機能は言靈オ、である記憶・整理の世界と混同し勝ちでありますのでご注意下さい。

言靈エ、の世界は社会的に見れば道徳とか政治の根本機能が発現する宇宙であります。

### 言靈イ、

この次元は他の四つの次元（言靈ウ、オ、ア、エ）に根底において力動を与え、統合し、その

現象を言葉にして表現する人間意志の根本宇宙です。人間生命の根源である創造意志の実体となる世界です。この言霊イ次元は最も理解がむずかしいところではありますがのちほどもっと詳しく説明されるでしょう。人間に生きる根本意志があつて初めて他の四次元が現象を生むのであります。この言霊イに漢字を当てはめると、生、胃、立、居、意等が適当でしょう。

以上で母音の五つの次元を最も幼稚な次元から高位な次元へとその内容を簡単に説明しました。この五つの宇宙がそれぞれに特有の無言、無音の力動で充滿し、しかもそれ自体は決して現象として現われることのない実在です。人間の精神機能はこの五つの世界において働き、この五つ以外の世界は存在しません。人間の心はこのウ、オ、ア、エ、イ五次元の重疊を住家とします。それゆえ人の住む所を大和言葉で五重、すなわち、家、というわけです。

### 半母音

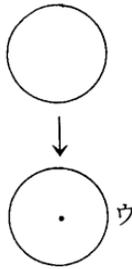
ウ、オ、ア、エ、イ五母音が精神宇宙の主観方面の局限に自覚される純粹の主体であるのに対し、ウ、ヲ、ワ、エ、キの半母音は同じく精神宇宙において客観の方面に局限された純粹の客体ということが出来ます。母音も半母音も精神の先天的なもので、現象を現象たらしめながら自体は決して現象界に現われることはありません。母音と半母音とは自と他、主体と客体、出发点と目的点、吾と汝という関係です。例えばアとワとは吾と我（古代大和言葉では吾をア、我をワと呼びました）、

そして二者の交渉で種々の現象を産み出しますが、吾も汝も共に純粹の主体と純粹の客体として自らは決して現象として現われないのです。

あまり概念的説明に傾くと理解がむずかしくなります。例を引きましょう。朝が来て目が覚めた時を想像して下さい。初めは目が覚めて明るさを感じるものの、眠りの気分が半分残っている状態です。意識の内部でぼーっとしながらも何かが目覚め出したといった状態、何かがある、または何か動くといった状態、これが言霊ウであるといったらよいでしょう。

目が覚めた瞬間は何もない状態、その次に何か心の奥で動き出した状態、この流れを図で示しますと左のように書くことができます。それゆえ、ウの字に漢字を当てはめるとすると、有生、産、動などが適当でしょう。

図2 心の宇宙

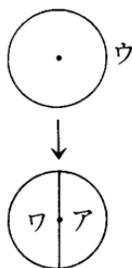


京都の大徳寺の一角に「梅花破雪香」（梅花雪を破って香し）の軸が掛かっているのを感じて見たことがあります。冬の白雪一面何も見えないところに春の息吹きの初発の気であるウの芽ま

たは目として咲く花、その花を大和言葉ではウメと名付けました。

心の奥に何かが動き出したという状態から意識がさらに目覚めてきます。すると前に何やらあるなあ、と感じてきます。前に何かあると感じると同時にそれを見ている自分の存在に気がつきます。前にあるものがまだ何であるかは分からない。けれど何かがある。と同時にそれを見ている自分の存在におぼろげに気が付く状態となります。心の中に何やら動くものが、ここで主と客に分裂するのです。この間の消息は次のように図に画くことができましょう。

図 3



はつきりとしたわけではないけれど、一つのウという心の宇宙が見るものと見られるものに分かれた時、見る方が言霊アであり、見られる方が言霊ワであります。このようにそこに何かあると思う時、事物は必ず主体と客体に分かれます。これが人間の宿命です。このことは全くあたりまえのように思われるかも知れませんが、実は人間生命の創造活動の最初の重要な法則であるのです。事物が主と客とに「わかれる」ということは、それが何であるかが「わかる」すなわち人

間が理解することと同じ意味であるからです。

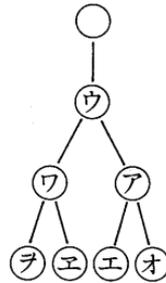
中国の老子の言葉はこの消息を「一二を生じ、二三を生じ、三萬物を生ず」と数理で示しています。

再び大徳寺の話に戻りましょう。「梅花破雪香」の軸の掛かった部屋の隣の部屋にそれと同じ書体で「余坐聴松風」の軸が掛けてありました。また感心しました。「余坐に松風を聴く」とは何を表徴した詩なのでしょうか。「余坐」とは次の座ということです。何に対して次ということかという、心の宇宙に何かあると感じる初め、すなわち言靈ウの次ということ、それは主と客に分れる時のことです。松の葉は根元から二つに分かれています。ノの形です。「松風を聴く」とはこの主と客に分れるということ極めて詩的に表現したのです。いつの時代にか大徳寺に偉い坊さんが居て、座禅によって人間生命が創造を始める最初の精神構造を悟って、それを詩の文章（偈頌）に表現したのでしょう。

意識の目覚めがさらに進んだとしましょう。はて前にあるものはいったい何であろう、と考えます。この時記憶が呼び覚まされるのです。この記憶を呼ぶ主体が言靈オであり、その結果「ああ、あれであったのか」と呼び覚まされた対象が言靈ウであります。次にきょう起きてから何をしようかなと考えてきます。いろいろなことが実行可能です。そのうち、きょうは、よし、これをするにすることを、の選択的決定をします。

この選択の主体が言霊エであり、選択される純粹客体が言霊エであります。以上で母音ウ、オ、エと半母音ワ、エが出揃いました。これまでのことを図で示しますと次のようになります。人間の意識の目覚めはこの順で行われます。

図 4



## 父 韻

母音・半音のうち残ったのは言霊イと、ヰです。前にも言霊イ・ヰの理解はなかなか難しいと申しました。なぜなら、これが、「現象が起こる」ということが実際にはどういふことなのか、という事物認識の根本に係っているからです。誇張でも何でもなく、過去数千年の間、各宗教、哲学その他種々の精神探究が真理の究極の目標とし、しかもいまだ解明することができないでいる、人間精神の最終の命題であるからなのです。いまその課題を言霊イ・ヰの立場から説明していきましよう。

ここに一本の木が立っています。この立っている、ということはどういふことなのでしょう。立っていると見ている人がいなければ立っているか否かが分かりません。また木が物として存在しなければ見ることができません。現象があるということはこのように見る主体と見られる客体双方に関係します。現象の認識は単に物があることを見る、という五感認識言霊ウばかりとは限りません。体験認識の体系化である言霊オの次元、感情界のアの次元、事物の選択に関する道徳、政治等々の高度の次元にも起こります。

これらすべての現象において純粹の主体であるア、オ、ウ、エと純粹の客体であるワ、ヲ、ウ、エはどういう経緯で現象を生むのでしょうか。

例えばここに鐘があります。棒で突きます。鐘が振動して空気を震わせます。空気中に波動が起こります。しかしこの波動自体がゴーンという音を立てているわけではありません。その波動が人間の耳に入った時、初めてゴーンという音に聞こえるわけです。鐘自体は無言の波動を出しているだけです。客体である鐘の発する波動と、主体である人間の認識知性の波動とがぶつかつて、双方の波動の波長がある調和を得た時、すなわち同交感応した時、初めて人間は鐘がゴーンと鳴ったのだと認識するのです。同じように大空の虹はそれ自体七色を発しているわけではなく、七種の光の波動を出しているだけです。その波動が人間の知性の主体波動とシンクロナイズする時、七つの色の虹として主体の側において認識されるのです。

このように、アとワ、オとヲ、ウとウ、エとエ、イとヰがシンクロナイズしてそれぞれに現象を産むためには、それぞれを結びつける懸け橋となるものが必要です。この役目をするのが、キシチニヒミイリの八つの父韻なのです。純粋な主体と客体とを結びつける人間知性の根本韻律はこの八つより他にありません。客体から発する波動は科学的に計測される波長を持った波動エネルギーです。それとシンクロナイズして、あらゆる現象を産み、認識する人間の主体側の原律が八つの父韻です。

先に五母音の説明のところ、言霊ウの世界から次第に次元の重畳を登りつめて最後は言霊イに至る時この世界が生命創造意志であることをお話しました。ここで自分の心の中を考えて見ますと、この生命創造意志の世界が他の四つの次元ウ、オ、ア、エの世界の現象を産む原動力であることが理解されてきます。欲望の世界である言霊ウも、経験知の世界の言霊オも、言霊アの人間感情も、言霊エの選択や道徳の世界も、生命の創造意志が働かない限り、何の現象も萌すことはないでしょう。欲望が起こるのも生きる意志があつてです。経験を成り立たせる好奇心も、哀しいうれしいの感情も、いまここでいかなる道に進むかの選択も、すべて創造意志が縁の下の力持ちとして働いて初めて出てくるものです。

言霊イは他の四つの次元の基礎であり、原動力です。このすべての現象を起こす原動力である創造意志言霊イの実際の働きである八つの父韻が、それぞれどんな韻律で働くかは後程説明され

るでしょう。それにまた「現象が生れた」ということは実際にどういふことなのでしょう。「赤い花が咲いた」というのは現象です。この時そのことを認識する人間が存在しなかったら、それは現象であつたかどうか分かりません。また見る主体としての人間がいてもそのことに「赤い」「花」「咲いた」というそれぞれの事物に名前がつけられないならば、ただ「ア—ア—」というばかりで現象にはなり得ません。創造とは名を付けることです。

## 親音

以上の三つのこと、すなわち、

一、現象としては現われない純粹主観と純粹客観との間の懸け橋として、母音ウ、オ、エ、半母音ウ、ヲ、ワ、エを結ぶ父韻キ、シ、チ、ニ、ヒ、ミ、イ、リと展相して現象である子音を産み、

二、五つの母音の長として他の四音を統轄する働きをし、

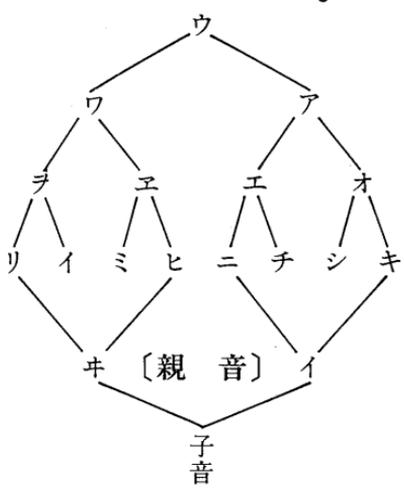
三、同時に、それに名前を付ける根本の名（名の名）としての役目を果たす、

それが言霊イと言霊オであり、この三つの作用こそ人類文明創造の根本原動意志であります。であるからこそ、母音・半母音であり、また、父韻キ、シ、チ、ニ、ヒ、ミ、イ、リとして展相する実体でもある言霊イ・オを、五母音のなかで特に親音と呼ぶのです。人類文明の創造主なのであります。

以上で母音・半母音・父韻・親音と出揃っていいよ言霊子音の誕生となるのですが、今まで

に人間の意識がだんだん目覚めて行く過程で説明した音の図形は次のようになるであります。

図 5



人間が眠りから目覚めて、何だか分からないが、何かが発生し動き出したなという漠然とした意識から始まって、頭の中で形にはならない先天部分の各段階の経緯を経て、人間知性の原律である八父韻の働きかけがあり、最後に人間生命の創造意志が最底部で発動して、初めて心の現実の現象の最小要素である言霊子音が誕生する経過は以上のようなものであります。

この図形の原理が、大昔、中国に興った易经によって数理に置き換えられ、人生における現象

の子知とそれに対する心構えが説かれました。それを左に示します。原理の交流の経緯やその歴史的意義などについてはのちほど詳しく説くことにいたします。

図6

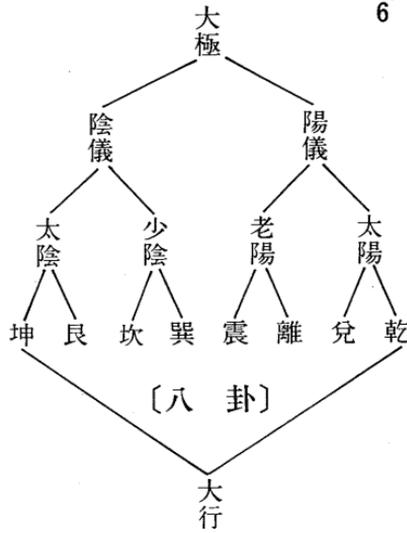
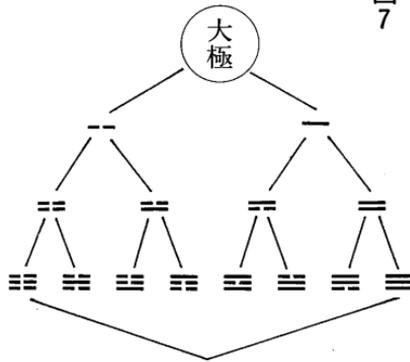


図7



ついで大和言葉命名の面白い例を申し上げましょう。先の意識の目覚めの図形で、言霊ウからア、ワ……と始まり、十六番目の言霊イに至って初めて、人間創造の意志が働き現象を産みます。「イザ」と意思が加わります。十六番目でイザです。それゆえ十六夜をイザヨイと呼ぶのであります。

## 子音

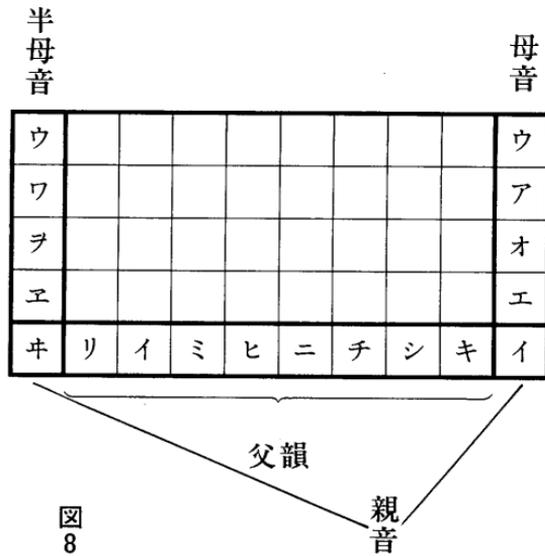
朝、目が覚めてまだ夢うつつの状態から、次第に意識がはつきりしてくるけれどまだ現実には何々と行動が起こらない期間、すなわち頭の奥で目覚めの活動が何やら活発に始まろうとする先天的部分、それが言霊ウ、からア・ワ、オ・ヲ、エ・エ、キ・シ、チ・ニ・ヒ、ミ・イ、リ、イ、中、という十七の言霊で示されました。そこで十六番目と十七番目のイ、中の親音の協同作業によってイ、ザと現象創造意志が具体化されてきます。親は子を産む事となります。現実には、父である八つの父韻と、母である母音のうち言霊イを除いたウ、オ、ア、エ、四母音の相乗で、 $\infty \times \text{ア} \parallel \text{ウ}$ の子音が生れ出ることとなります。

例えば父韻チ、母音アは、チアですが、父韻はあくまで実在ではなく知性の律韻でありますから英語アルファベットのIで現わすとよく理解できます。すなわちI  $\times$  V  $\parallel$  I  $\text{a}$ となります。

同様に父韻ミ、母音オは、ミオで子音モ、が生まれます。こうして生まれた三十二の子音はそのひとつ一つの子音が父と母の性質を共に受け継ぎながら、しかも父とも母とも違った独立した実相を備えています。父母の先天から子として後天が生まれたわけです。この子音は生まれただばかりで無垢な赤ん坊のようなものです。後天現象の最小要素または元素です。これが複雑に

結合して実際の心的現象すなわち言葉が作られていくわけです。言葉の元の単元の言葉を言霊と呼ぶのです。

意識が目覚めて行く自然の様子を母音で順に記しますと、ウ、ア、オ、エ、イとなります。これを縦に書き、父韻キ、シ、チ、ニ、ヒ、ミ、イ、リを横にとつて五十音図を書いてみると、母音、半母音、父韻、親音、子音の意義が比較的容易に理解できますので、見なれないかも知れませんが下に一つの五十音図を掲げます。



## 再び父韻について

主体と客体とを結びつけて現象を生む人間知性の原律である父韻には八つの種類キ、シ、チ、ニ、ヒ、ミ、イ、リがあることを先にお話しました。この知性の原律とはどのようなものなのでしょうか。八父韻は二つずつ組み合わさって陰陽または正反をなし、それが四組あります。チ、イ、キ、ミ、シ、リ、ヒ、ニであります。しからはそれぞれはどんな動きをするのでしょうか。実はこれを表現し理解して頂くことは非常に困難なことなのです。なぜなら父韻の原律とは人間の心の最も深い所で創造意志が四つの母音に働きかける一瞬の力動なのですから。本当に理解し体得するには、自分自身の心の中で、実体験で、確認するより方法はないわけです。そうはいっても何も参考になることがなくてただ把握せよといっても無理ですから、参考例を次に掲げて置きましょう。

図 9

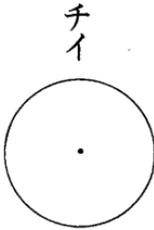


図 10

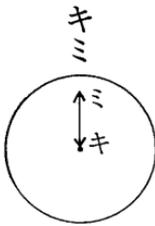
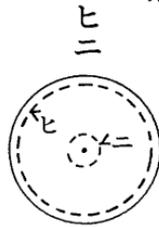


図 11



図 12



チ 精神宇宙全体がそのまま現象発現に向かって動き出す端緒の力動韻

イ 動き出した力動が持続する韻

ミ 精神宇宙の中に已にある自己の体験内容に思いが結びつこうとする力動韻

キ 反対に体験内容を自我の方向に掻きよせようとする力動韻

シ 精神宇宙にある精神内容が螺旋形の中心に静まり収まる力動韻

リ シとは反対に、ある精神内容が宇宙の拡がりに向かって螺旋状に発展拡大して行く力動韻

ヒ 精神内容表現が精神宇宙球の表面に完成する韻

ニ その反対に物事の現象の種が精神宇宙の中核に煮つまり成る韻

さらにこの八つの父韻について参考にして頂くために、私の言霊学の師であった小笠原孝次氏ならびにそのまた師であった山腰明將氏（共に故人）の八父韻説明を付け加えておきましょう。

(図 13)

図 13

ニ	ヒ	リ	シ	ミ	キ	イ	チ	
成熟	開顯	滲透	調和	整理	收納	繁榮	創造	小笠原氏
吸引力	開發力	螺婁力	透刺力	旋回力	陰搔力	飛至力	陽出力	山腰氏

以上八父韻それぞれについて説明を加えましたが、どれをとつてもやはり概念的説明に留まつてしまいます。これ以上の立ち入った説明は、どうしたら言靈の理解を深め、体得することができ、その方法を申し上げるところで詳しくお話することにしめよう。

## 次元の相違と父韻

商人と学者が、または学者と芸術家が、社会的な事件などについて口角泡をとばして議論をしている光景を時々見かけます。いつまで経っても意見はすれ違ってしまう、まとまることはありません。これはどちらかが正しくて一方が間違っているためというよりか、双方の意見のよつてたつ次元が異なるための場合が多いようです。商人はウ言霊の次元に、学者はオ次元に、芸術家はア次元に、立っていて、お互いに相手の立つ次元を理解しかねているのです。このように、住む母音の次元を異にしますと、考え方がそして使用する言葉自体が、違ってきます。この相違を言霊から見るとどういうことになるのでしょうか。住む母音の世界が異なりますと同時にその意見の発想目的ばかりでなく議論の進め方まで違ってきます。この場合発想の根源は母音に、目的は半母音に、あたります。そして発想から目的に至る経過が懸け橋である八父韻で現わされます。母音に働きかけて現象を生む人間創造意志がどのような韻律の順序で発動されるかによって現わされるのです。そして母音の各次元にはそれぞれ特有の父韻の配列をもって表わされる目的追求の方法のリズムが備わっています。その内容の詳しい説明は後に譲ることとして、その次元特有のリズムである父韻の配列を書きますと、次のようになります。

ウ	欲望の次元	キシチニヒミイリ
オ	経験知次元	キチミヒシニイリ
ア	感情の次元	チキリヒシニイミ
エ	選択の次元	チキミヒリニイシ

#### 四つの五十音図

五十音図といいますが一般には小学校の時から教えられたアイウエオ五十音図が唯一のものと  
思われてきました。なぜ縦にア、イ、ウ、エ、オと並び、横にア、カ、サ、タ、ナ、ハ、マ、ヤ、ラ、ワと並べるのか、ただ  
教えられたからそう覚えて使っているだけです。そもそも音図とは何なのか。巻頭序の  
書き出しの答えは次の通りです。先にお話してきましたように人間の精神は全部で五十個の最小  
単位の要素から成立しています。

五母音、五半母音、八父韻、三十二子音です。これで全部ですし、これ以上でもこれ以下でも  
ありません。大昔、日本人の祖先はこのことを探求解明し、同時に、この五十音をどう配列した  
ら、言い換えますと、人間がどのような心の持ち方、どのような精神構造であつたら、理想なの  
であろうかということを解明したのが五十音図なのです。この場合、心の住む次元、すなわち母

音を右側に配列します。そして人間の最も行動の眼目となる次元を五母音の中心に位置させます。例えば、商売行為の眼目には欲望であり言霊ウです。しかし商人の世界が欲望、言霊ウであるとはいっても、商人に経験知、感情、道徳心等々がないわけではありません。ただ、商人は商売をする時、言霊ウ以外の次元はウ、次元の目的を達成するための道具に使うこととなります。その道具に使う他の四次元の中で大切な道具ほど中側から配列して行きます。そうしますとウ、言霊中心に生きる人の心の母音体系は、上より、アイウエオと並びます。そしてウ、次元の欲望を達成するための意志の運び方、すなわち母音と半母音とを結ぶ懸け橋である八つの父韻の配列は、先に述べましたようにキシチニヒミイリであります。以上のことを総合して五十音図を作製しますと下図のごとく私達が常に使っている五十音図を得ることとなります。(図14)

図14

ワ	ラ	ヤ	マ	ハ	ナ	タ	サ	カ	ア
キ	リ	イ	ミ	ヒ	ニ	チ	シ	キ	イ
ウ	ル	ユ	ム	フ	ヌ	ツ	ス	ク	ウ
エ	レ	エ	メ	ヘ	ネ	テ	セ	ケ	エ
ヲ	ロ	ヨ	モ	ホ	ノ	ト	ソ	コ	オ

ワ	ラ	ヤ	ナ	サ	ハ	マ	タ	カ	ア
ヰ	リ	イ	ニ	シ	ヒ	ミ	チ	キ	イ
ヲ	ロ	ヨ	ノ	ソ	ホ	モ	ト	コ	オ
ウ	ル	ユ	ヌ	ス	フ	ム	ツ	ク	ウ
エ	レ	エ	ネ	セ	ヘ	メ	テ	ケ	エ

図 15

言靈オ

ヰ	ミ	イ	ニ	シ	ヒ	リ	キ	チ	イ
エ	メ	エ	ネ	セ	ヘ	レ	ケ	テ	エ
ワ	マ	ヤ	ナ	サ	ハ	ラ	カ	タ	ア
ヲ	モ	ヨ	ノ	ソ	ホ	ロ	コ	ト	オ
ウ	ム	ユ	ヌ	ス	フ	ル	ク	ツ	ウ

図 16

言靈ア

ワ	サ	ヤ	ナ	ラ	ハ	マ	カ	タ	ア
ヰ	シ	イ	ニ	リ	ヒ	ミ	キ	チ	イ
エ	セ	エ	ネ	レ	ヘ	メ	ケ	テ	エ
ヲ	ソ	ヨ	ノ	ロ	ホ	モ	コ	ト	オ
ウ	ス	ユ	ヌ	ル	フ	ム	ク	ツ	ウ

図 17

言靈エ

ワ									ア
ヲ									オ
ウ									ウ
エ									エ
ヰ				八	父	韻			イ

図 18

言靈イ

しかしながら右の道理をそのまま進展させますと、この音図の他にさらに四つの音図がある勘定になりましょう。すなわち言靈オ、ア、エ、イを主眼目にした心構えを表わす精神構造の音図です。詳しく云えば、言靈オである経験知、一般に科学的探究に必要な心構えの音図、言靈アである芸術宗教に備わった感情構造の音図、言靈ウ、オアの次元の事象をどのように選択して行くかという、一般に道徳、政治に必要な言靈エである心構えの音図、さらに言靈イである、精神の深奥にあつて他の四つの次元の原動力となる人間意志そのものの音図、これらの四種があるはずで、現在では見馴れないけれど事実存在するのです。この四種類の音図を簡単に書くと40頁の図15、図18のようになります。

昔の日本人は右に図示した音図のうち、言靈オを中心としたものを赤球音図（ア段が横にア、カ、タ、マと続くため）、言靈アを中心としたものを宝音図（ア段の二番目からタ、カ、ラと配列されるため）、言靈エを中心眼目としたものを天津太祝詞音図（アマツフトノリトオンズ）、言靈イのものを天津菅麻音図（アマツスガソオンズ）、と呼んでいました。また先に掲げた言靈ウが中心となつた音図を天津金木音図（アマツカナギオンズ）と申します。現代はなぜ言靈ウを中心とした天津金木音図のみが一般に伝わり教えられているのでしょうか。それはここ二千年ほどの間、世界の歴史は人間が持つ五つの性能の内第一番に言靈ウが独走する時代であつたからです。

言靈ウが他の次元の人間性能と調和が保たれない時、招来する社会国家の世相は弱肉強食の権

力思想に塗りつぶされてしまうこととなります。言霊ウを眼目とする音図こそ現代社会にとって最もぴったりした音図ということができるとしよう。

なお言霊イ中心の天津菅麻音図のみは、縦の母音、横の父韻とも、その配列が先に述べた配列法則と異なります。それは言霊イ、すなわち人間の根本意志は他の性能の底に働いて現象を生起させますが、意志自体は現象としては現れないからです。そのため母音配列と八父韻の順序は定まりません。

生まれたばかりの素朴な状態の意味で、スガ、シイ、マまたは衣と名付けられたわけです。

### 事物に名を付けること

五つの母音、五つの半母音、八つの父韻（以上先天）、ならびに三十二の子音（後天要素）が確定しました。ということは人間の精神生命宇宙の構造が解明され、さらにその宇宙のそれ以上分解することのできない最小要素それぞれに一音一音名が付けられたということです。この最小要素とその名前が一体となって宇宙のすべての事象が文明として創造されるわけです。その要素と

は名であり、名とは存在それ自体です。霊である言、言である霊であります。この五十音を言霊というわけです。精神宇宙は究極的にこの五十個の言霊によって成立していてそれ以上のものは存在せず、それ以下であることもないわけです。そしてこの五十個の存在要素の意味を駆使して宇宙全体の事物に名を付けました。古代大和言葉の創造です。

命名の基本である五十音は、宇宙の構成要素としてその一音一音に意義と機能が確定されたものでありますから、その五十音それぞれを組み合わせて付けられた名前は完全純粹にその事物の真実の姿を表現しています。名前がすべてでその他に註釈を加えたり、その意義に議論をする必要がないものです。この間の消息を昔の人は「この日本は惟神言挙げせぬ国」などと称えました。それは、この大和言葉は惟神(カミナガラ)、すなわち人間思惟の先天ならびに後天の最小要素によって名付けられた言葉であって、その言葉自体が事物の真相を表わしているから、その上のでどくどしい概念的説明は必要としないのだという意味です。それを言霊の意義を忘却した為政者が、「お上の命令にはただハイハイと黙従していれば決して誤りなく正義が行われる国なのだ」などと暴言を吐く仕儀にまでなってしまったのでした。

例えば次のようなことを挙げることができます。聖徳太子の十七条の憲法に、「和を以て貴しとなす」とあります。なにげなく読めば、仲よしは大切だ、ぐらいにしか考えられません。しかしこれが言霊の立場から捉えますと決定的完結的な意味が出てきます。和はワ、です。また輪○で

す。ある点から二つの反対方向に別れてやがて究極にまた一致することです。また、ワは純粹客観であり結論です。ここに二人の仲のよい友達がいました。ある時二人の間に利害の対立する問題が起こりました。二人はとことん議論をしました。意見はどうしても噛み合いません。もう絶望です。その時友情が甦ったのです。二人の見つめ合った目と目に笑いがこぼれたのです。それからの話し合いはスムーズでした。どうしたらお互いによいかの結論はすぐ出ました。友情の輪は以前にもましてかたく結ばれたのです。始まりからいったん別れて結果として結ばれる輪の完成です。この意味の輪が真の「和」であります。この意味で言霊ワを知った人は常に和でいられるわけです。ある主義者が主張する「我々は平和を闘いとうろ」などという言葉がいかに空虚で平和の心からかけ離れたものであるか、お分かり頂けると思います。和を知っている人は、心は出発から和で始まるのです。常に和なのです。それが言霊ワの、一音の意義であります。

以上のように一音が決定的な意味を持ち、それぞれの音が物事の真実の姿に合うように組み合わせられて名が付けられていきます。事物の名付けの限らない発展とその伝承が文明に他なりません。

以上言霊五十音を順に母、半母、父、親、子にわけてそれぞれが人間精神宇宙の中で占める構造位置とその生命上の意味について説明してきました。まことにおおざっぱではありましたが、日頃私達が無意識に使っているアイウエオ五十音図も、ただ何の深い意味もなく覚えやすいよう

に並べてあるのではなく、それぞれの一音一音が他とは替えることのできない決定的な意味を持ち、また五十音の集合によってそれぞれ次元の相違する心の構造を表現するものであることを了解して頂けたものと思います。

## 言霊による宇宙とは

最初にお話ししましたように、眼を開けて見る物質的客観宇宙は、眼の前のミクロの宇宙から、遠い、遠い、膨脹し続けるといわれる宇宙すなわちマクロの宇宙まで続いています。そしていま私達が地上から真上に真直ぐに飛び出して超高速に限りなく飛び続ければ、ちょうど飛び出す時と反対の方向から元の場所に帰って来てしまふということがよくいわれます。宇宙は無限ということの概念的奥秘がここに考えられるでしょう。

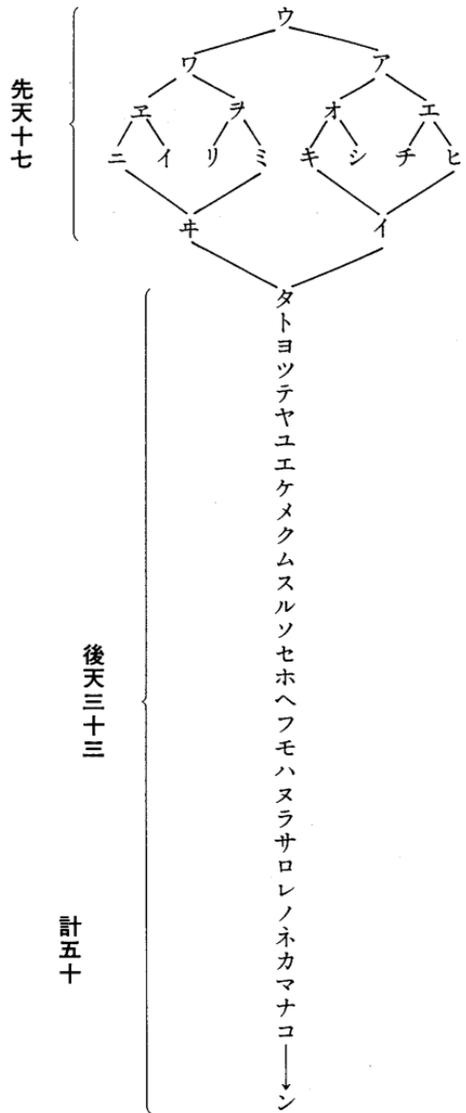
それとは全く逆の方向に、眼を閉じて内なる主観的精神宇宙についていえばどうでしょうか、この広大な主観的精神宇宙も極めて具体的に要約して考えてみれば、人間の意識が何も起こらない時、すなわち空なる宇宙そのものの中に、初めて現われる意識の萌芽であるウに始まり、ア、ワ、

オエヲエ、ヒチシキミリイニ、イキの先天部分が頭脳の中で働き、それが後天として具体的形となり言葉として発音され、その音が空中を飛んで自分または他人の耳に入り、また頭脳の中に入して再検討され了解されて先天の宇宙に帰り、記憶として頭脳内に印画されます。精神宇宙を言葉の立場から最小限に要約すると上記以外のものではないことが明らかに理解されます。

大昔の日本人は言葉の原理に到達して、この最小限要約の宇宙に起こる精神現象の機能順序を言葉によって表現することに成功しています。詳しい説明は後に譲りますが、今はその作用を現わす言葉の順序を示すことにしましょう。(次頁図19)

この時最初の混沌たる意識の始まりであるウが、一循環した後で元の宇宙に帰り記憶となつて残ります。最初のウは言葉ン(漢字云)に転化します。ンは意識の運びを意味し、実際にンとは言葉を運ぶものすなわち文字のことであります。

図 19



## 言霊原理の発見、隠没、復活

人間精神の究極の原理としての言霊の学問はいつ頃発見確立されたのでしょうか。

詳しい事は今後の研究、立証を俟つより他はありません。けれども少くとも現在の歴史学者や言語学者が日本の歴史について主張しているよりは遙か以前の出来事であったことは間違いないように思われます。なぜなら現在私達が日常使っている日本語のうちの大和言葉というのはすべて五十音言霊の原理によって決定され命名された言葉であることが、その明らかな証明でありましょう。言霊の原理を理解し、その原理の観点に立って現行の歴史学や考古学を再検討するならば、日本の歴史の起源は現在の常識より遙か遠い昔に遡ることが明瞭となります。と同時に日本のみならず、世界各地の神話、宗教書等に示され、いまの学者にはどうしても説明することができるきない多くの事柄が、この言霊の原理から考えられると、いともすらすらと解釈することができるという事実にもよります。これよりその大略をお話ししましょう。

先に「言霊の発見と変遷」のところでお話しましたごとく、紀元前数千年の昔、言霊の原理が

発見され、その後この日本列島においてその原理に基いて人間社会の文化の創造、政治国家が建設され繁栄した時代が続きました。言霊原理は遠く全世界に流布施行されるようになりました。いわゆる神話の時代です。ところがこの精神原理が、人間のもう一つの性能面である物質文明の発展促進のために隠没される時が来しました。約三千年前の出来事です。

原理の隠没とは消滅ではありません。一定期間を経て物質文化がある程度に進展した時、再び人間の脳裏から甦り、物質文明と車の両輪をなす精神文化の原理とならねばなりません。そのために原理を隠滅する事業と併行して、その甦りの時の用意に、種々の方策がとられてたのでした。その第一は言霊の原理を明らかにせずにはなく謎として呪示する神話の制定です。各民族の神話の原型はすべて言霊原理を表徴しています。第二に世界的宗教の創成です。その目的は、言霊原理の隠没に続いて当然招来される人類の精神暗黒時代に生きる人類の心の拠り所とし、また、言霊原理が甦る時に備えて、その原理を受け入れ易くするための人間精神の修練とするためです。と同時に、言霊を各宗教書の中に表徴的に暗示するためでもあります。

第三は、言霊の原理を形の上で表徴する各種の建造物を遺しました。例えば日本では伊勢の内宮の本殿の造り方、仏教の多宝塔、五重塔、方丈等々がそれでありました。

以上のような歴史的な記述は、今までの常識の枠をはみ出していますので首肯しかねる方が多いことと思います。けれども、今後この本の説明する道筋に則ってご自分の心の構造に踏み入っ

て頂くならば、否定のしようのない真実としてなるほどとなすかされることとなりましょう。自己の心の中に踏み入ると申しましても別に特別な方法によるものではありません。数千年の歴史を持つ神道、儒教、仏教、キリスト教等の宗教に明示しているそれぞれの反省、修行をそのまま踏襲して、その上で各宗教が奥義としてきた内部にまで妥協することなく突き進んで頂ければこと足りるのです。

前置きはこのくらいにして、言霊の原理はその隠没の時代にどのように呪示として遺されたのかを数例を挙げて説明してみましよう。

## 言霊と古事記

古事記が、特にその神代の巻が、言霊の原理の手引書であるといったらどなたも驚かれることでしょう。

現にいまの歴史学者の中には「奈良時代に到って日本の中央集権化に成功したその時の権力者が、その統治に権威あらしめる目的ででっち上げたのが古事記、日本書紀である」として両書は架空の創作書と称える人が多いようです。そしてその主張の根拠の第一が古事記の神代の巻です。古事記をただ漫然と歴史書として読む人にとってはそのように思うことも無理からぬことであり

ましよう。しかしそれは全くの見当違いなのです。

古事記と日本書紀の神代の巻は、言霊原理の隠没した時代の末に、再び日本人が潜在意識の底からその原理を甦らすために用意された神話の形をとつた言霊の教科書なのです。

古事記神代の巻の最初に登場する神名天之御中主神より建速須佐男命までちょうど百個の神名が挙げられています。古事記は神話の形をとつて書かれた人間精神の根本構造を明示し呪示した言霊原理の指導書なのです。百神のうち前半の五十神は五十音言霊をそれぞれ示し、後半の五十神はその五十音言霊をどのように操作したら人間行動の理想の規範ができるかを説いています。簡単に説明してみましよう。

「天地の初発はしめの時、高天の原に成りませる神の名は、天の御中主の神、次に高御産巢日の神、次に神産巢日の神、この三柱の神は、みな独神に成りまして、身を隠したまひき」

以上は神代の巻の冒頭の文です。天地の初発の時などと言われると誰でもこの宇宙の始まった天文学的、地球物理学的な始まりのことと想像するでしょう。しかしここでは違います。古事記神代巻はすべて人間精神の内面について語っているのであって、客観的なその話ではありませぬ。すなわちこの本の始めの頃お話ししたように、内に省みた広大な精神的宇宙から初めて人間意識が目覚めて、現象以前の先天的機構を経過して眼に見える現象が現われる細部の精神的消息を解説しているのです。天地の初発の時は常に「いま・ここ」に人間の意識が何もないところ

からふと生まれてくるその「初発の時」のことです。その何も無い澄んだ宇宙が高天の原です。

前に「言霊とは」の章で人間の意識が眠りから目覚めていく順序に従って言霊の発現を説明しました。実はその記述の順序は古事記に現われ出て来る神々の名が示す言霊の順序に従ったのです。天御中主の神言霊ウ、高御産巢日神言霊ア、神産巢日神言霊ワ、まではすでに説明しました、神名は次に宇摩志阿斯訶備比古遲の神言霊ヲ、天の常立の神言霊オ、国の常立の神言霊エ、豊雲野の神言霊エ……と続いています。そして天御中主神より建速須佐の男命までちょうど百の神名が出てくることとなります。それぞれの神名がどうしてそれに相当する言霊と結びつくのかの説明はあまりに煩雑になりますので後の機会に譲ることにしまして今は言霊五十音とそれを呪示する古事記の神名をそれぞれ列記しておくことに留めます。

言 霊	神 名
ウ	天御中主神 (アメノミナカヌシノカミ)
ア	高御産巢日神 (タカミムスビノカミ)
ワ	神産巢日神 (カミムスビノカミ)
ヲ	宇摩志阿斯訶備比古遲神 (ウマシアシカビヒコジノカミ)
オ	天之常立神 (アメノトコタチノカミ)

エ エ  
エ チ  
イ キ  
ミ シ  
リ ヒ  
ニ イ  
中 夕  
ト タ

國之常立神 (クニノトコタチノカミ)

豐雲野神 (トヨクモノノカミ)

宇比地邇神 (ウヒヂニノカミ)

須比智邇神 (スヒヂニノカミ)

角杙神 (ツノグイノカミ)

生杙神 (イクグイノカミ)

大斗能地神 (オホトノヂノカミ)

大戸乃弁神 (オホトノベノカミ)

於母陀琉神 (オモダルノカミ)

阿夜訶志古泥神 (アヤカシコネノカミ)

伊耶那岐神 (イザナギノカミ)

伊耶那美神 (イザナミノカミ)

(以上先天十七神)

大事忍男神 (オホコトオシヲノカミ)

石土毘古神 (イハツチヒコノカミ)

ヨ ツ テ ヤ ユ エ ケ メ ク ム ス ル ソ セ ホ ヘ

石巢比売神 (イハスヒメノカミ)

大戸日別神 (オホトヒワケノカミ)

天之吹男神 (アメノフキヲノカミ)

大屋毘古神 (オホヤヒコノカミ)

風木津別之忍男神 (カザモツワケノオシヲノカミ)

大綿津見神 (オホワタツミノカミ)

速秋津日子神 (ハヤアキツヒコノカミ)

速秋津比売神 (ハヤアキツヒメノカミ)

沫那芸神 (アワナギノカミ)

沫那美神 (アワナミノカミ)

頼那芸神 (ツラナギノカミ)

頼那美神 (ツラナミノカミ)

天之水分神 (アメノミクマリノカミ)

國之水分神 (クニノミクマリノカミ)

天之久比奢母智神 (アメノクヒザモチノカミ)

國之久比奢母智神 (クニノクヒザモチノカミ)

フ モ ハ ヌ ラ サ ロ レ ノ ネ カ マ ナ コ ン

志那都比古神（シナツヒコノカミ）

久久能智神（ククノチノカミ）

大山津見神（オホヤマツミノカミ）

鹿屋野比売神（カヤノヒメノカミ）

天之狭土神（アメノサツチノカミ）

國之狭土神（クニノサツチノカミ）

天之狭霧神（アメノサギリノカミ）

國之狭霧神（クニノサギリノカミ）

天之闇戸神（アメノクラドノカミ）

國之闇戸神（クニノクラドノカミ）

大戸惑子神（オホトマドヒゴノカミ）

大戸惑女神（オホトマドヒメノカミ）

鳥之石楠船神（トリノイハクスフネノカミ）

大宜都比売神（オホゲツヒメノカミ）

火之夜芸速男神（火之迦具土神）（ホノヤギハヤヲノカミ）（ホノカグツチノカミ）

（以上後天三十三神）

以上の五十神に続く五十神の神名は、先にお話ししましたごとく前出の五十音言霊をいかように運用操作したら人間の理想的行為の規範を実現し得るかの操作法であります。また伊耶那美神の後に十数個の鳥の名が出て来ますが、これは言霊のそれぞれが、またその操作法が、精神宇宙のどの位置にあり、どのような意義を持っているかの呪示であります。

「成りませる神の名は天の御中主の神」。成りませるとは生まれてくることであり同時に「鳴りませる」として言葉として現われてくることでもあります。生まれてくることとそれが名を持つこととは不可分の人間文明創造の根元です。言と霊と同一であること、すなわち言霊です。何もない宇宙に初めてポァーと生れる根源の意識、それは「我在り」の起源となる意識です。○●の図の真中の一点です。宇宙は広いものです。だから、その中の一点といえどもとつても中心です。漫然としながらもこの中心に在りとする意識の始まり——この存在を天の御中主の神という神の名前で呪示したわけです。そしてその存在は言霊ウです。

「次に高御産巢日神、次に神産巢日神……」とは全純粹主観である言霊アと全純粹客観である言霊ワです。○●である言霊ウから、○ワアの主観・客観が割れたことを示します。「独り神に成りまして身を隠したまいき」。ウ・ア・ワと呼ばれる世界は、示された時、他の何ものにもよることなくそれ自体独立した一つの宇宙でありますので、それを「独り神」というのです。またそれぞれの実在は決して現象とはならず、先天の宇宙でありますゆえに「身を隠したまいき」と申しま

す。

このようにして次々に宇宙が剖判して生れてくる神々すなわち意識のそれぞれの根源要素に五十音を当てはめてゆき、母音・半母音・父韻・親音・子音と言霊を、確認しました。全部で五十音です。

高御産巢日と神産巢日とは高御産巢日の方の頭に夕の一字がある以外は同一です。夕とは田んぼのことで、人は田を耕やして米をつくります。精神的には言葉の田である五十音言霊図を耕やして、結合した物事の名前を作っていくことすなわち文明創造の主体行動を意味します。アである吾の側に創造の主体性があり、ワである汝の側はあくまで主体の呼びかけに応えるだけで受身の立場です。ですからタカミムスビに対して夕がないカミムスビなのです。

三十一文字の和歌の道のことを、昔、言の葉の誠の道、または敷島の道と申しました。敷島とはもと五十城島と書きました。五十音が住む城の意味で、少くとも古今集までの時代には、言霊の原理は伝統として世に知られており、和歌の道とは情感を三十一文字に表現しながら、同時に言霊の原理をその中に織り込むことによって実際に言霊を体得する修行の方法の一つであったのです。

奈良時代にはまだ社会的に完全には埋れてはいなかった言霊五十音の意義を後世に残そうとして制定された書が古事記です。言霊の一つひとつの生命全体に占める位置・意味・機能等々を、後世、それを指月の指として自己の内面を顧慮するならば、明らかに言霊五十音に到達できるよ

うに、その時代、人口に膾炙されていた神名、人名を抜き出して神話の形で構成して書き残したのが古事記神代の巻なのです。

言靈ウの意味を把握した時、古事記の天の御中主の神という神名はその実体を何とよく示していることかと驚かされます。古事記を書いた太安萬侶という人は確かに言靈の原理を知っていたのだなあとつくづく思われるのです。その他、時がくれば言靈の音の一つひとつが明らかに解けるように、古事記の神名と言靈の五十音とを照合し易いように、和歌の道の奥義書となるものが皇室の中に秘蔵されたのです。その場所を賢所と申します。文字通り世界中で最も賢い所であつたわけです。

昭和二十年の第二次世界大戦の敗戦まで、日本天皇の皇統の証明物として三種の神器が尊ばれていました。八咫やたの鏡・八尺やぶの勾まが珠・草薙の剣です。この三種の神器を持っている人が正統の天皇であるということ、ある時代にはこの神器の帰属をめぐって戦いがありました。またその神器の真偽の論争が起こったこともありました。けれども言靈の原理の立場から考えますと、三種の神器についての争いなどまことに笑止のことに思われます。なぜなら神器とは物質的器物です。器物とは精神的原理の表徴物に他なりません。大昔には哲学的概念の言葉がありませんでしたので精神的なものは器物で表徴しました。鏡とは言靈エを主眼とした理想的精神構造の図すなわち先に述べた天津太祝詞音図のことです。この音図に照らし合わせれば、すべての人間行為の善悪・

可否は正確に判断されます。

勾珠とは言靈五十音をひとつ一つ粘土板に書いて焼いたの形を連ねたネックレスのこと。

この五十の要素以外に精神宇宙には何も無いことを示しています。剣とは縦に空間をアイウエオの五次元に、横に時間をカサタナハマヤラと八つの展相に断ち切って判断する精神的判断力のことに他なりません。縦に五つの次元を切ると、この人はどの次元にたつて行動を起こしているかが判ります。五つに分けるから、分かるのです。横に八父韻の相を判別すると、その人は目的に向つて正しい手順を踏んで物事を進めているかどうか明瞭に分かります。この精神的審判の理想構造と、それを構成している五十音の認識と、それによる精神の明確な判断力を持つていることが為政者の、大昔にあつては天皇としての、資格であつたわけです。日本書紀に「是の時に天照大神手に宝鏡を持ちたまひて、……『吾が児、此宝鏡を視まさむこと、当に吾を見るがごとくすべし。与に床を同くし殿を共にして、齋鏡とすべし』とのたまふ」とあります。このことから推察して日本の大昔に言靈の原理に則り政治が行われ平和な精神文化の花が咲いていた時代があつたことが推察されます。

「床を同くし殿を共にして齋鏡とする」ことを鏡と天皇との同床共殿の政治といつて、言靈原理が実際に政治に生きていたことを物語っています。

現代人の大きな迷信の一つをご存じでしょうか。それは現在の物質文明の繁栄に酔うのあまり、

その物質文明の未発達であった大昔が野蠻時代であったと思ひ込んでゐることです。確かに数千年以前には今のごとき物質機械文明は存在しなかつたでありましょう。けれども精神の分野においては、現代人が夢にも見ることできぬほどに立派な文化の華が咲いてゐたことは確かであつたようです。その何よりの証拠は大和言葉の存在と、その言葉を創造する根本原理である言霊の原理の存在が、ここに明らかにされたことであります。日本における古事記・日本書紀の神話ばかりでなく、世界の神話すなわちギリシャ・エジプト・北欧等々の神話はすべて過去に真善美の精神文明の華咲いた時代があつたことを明記してゐます。これらは決しておとぎ話ではなく実話であることを、この書を手にした読者ご自身が言霊の原理に深く踏み入つて大和言葉の内容を明らかにされるなら、さもありなるとうなずかれることでしよう。と同時にこれらの神話はすべて隆盛を極めた精神文明が、ある時代を画して隠没し姿を消してしまつたことをも記してゐます。日本においても日本書紀に神倭朝十代崇神天皇の時代のごとき事件について報じた一文が載つてゐます。「是より先に、天照大神、倭大国魂二の神を、天皇の大殿の内に並祀る。然して其の神の勢を畏りて、共に住みたまふに安からず。故、天照大神を以ては、豊鍬入姫命に託けまつりて、倭の笠縫邑に祀る……」

右の事件は神倭朝の同床共殿の制度の廃止という、それまで天皇が言霊の表徴である三種の神器と共に居り、その原理に則つて政治を行なつていた事を廃止して、この人間の究極原理を人間

が拝む対象としての神と祀ってしまったことを意味します。すなわち人間最高の精神文明の隠没となるわけです。

ちなみに言霊の原理からみて人間が神に対する態度も二種類あることを説明しておきましょう。第一は神を齋く立場であり、第二は神を拝む態度です。

齋くとは五作を意味し、神である宇宙の五つの次元ア、イ、ウ、エ、オの順を心に確認し、神と一体となることであり、拝むとは神である次元宇宙の内容を自覚せず自ら傀儡に成り下がり、ひたすら神を畏怖する態度であります。拝むおろがと愚かおろとは同じ語源より発します。

以上のようにその昔、日本の天皇として政治の任にある人が必ず体得しそれによって政治を運営すべき言霊の原理が、人間の自覚から離れ、伊勢神宮の内宮に天照大御神として祭祀され、原理そのものは日本人の意識から隠没したのですが、数千年の後、言霊の原理が再び日本人の脳裏に甦る時に備えて巧妙な仕掛が行なわれたのでした。それは言霊の理想構造図すなわち天照大御神を祀る伊勢神宮の内宮の本殿を、一度言霊という意識の下に見るならば、まさに一見してその言霊の構造が明らかになるような構造に建造したことです。その造り方を今に『唯一神明造り』と伝えています。唯一つの神が明らかになる造りということです。

伊勢神宮本殿の構造と言霊図とのみごとな照合のことについては後に譲ることにしまして、ここではただひとつ構造上最も重要なこととお話するに留めます。それは伊勢神宮におきまして、

「秘中の秘」といわれます本殿中央の床下に祀られる忌柱または真柱のことであります。それは大きき縦横約五寸の四角形、長さ五尺の白木の柱で、下二尺は地表より下に埋められた形で建てられています。これは何を意味しているのでしょうか。言霊を知り、この変遷の意味を了解するならば一見して天照大御神という神の言霊の意味が明らかにされます。真柱の五尺の長さは明らかに神道で天之御柱と称える言霊ア、オウ、エイ、五母音を表徴します。この五母音の重畳こそ神の本体です。しかも下二尺が地表下にあるということは、言霊原理が隠没し神と祀られている期間は、社会にア、オウ、である宗教・芸術・学問・産業は栄えても、下二段のエイ、すなわち言霊原理イとその原理に則る道徳・政治、エはこの世に実際に行なわれることはない、と言う呪示であります。

隠された言霊の原理を他の建造物や宮中での諸々の儀式の形式(例えば立太子の時の壺切の儀)等で呪示したものは多数存在しますが、その説明は他の機会に譲ることといたします。

以上言霊原理の隠没の時の状況についてお話ししました。そこでついでに二千年間完全に埋没していたその原理がどのようにしてこの社会に再び甦ってきたかを付け加えておきましょう。宮中において三種の神器の同床共殿の制度の廃止以来、日本の国家は言霊エではなく言霊ウの権力による支配の下で、決して平和至福の社会とは言えない状態が続いたのでした。それはまた全世界についても同じことが言えるでしょう。けれども三千年以前に決定された方策のごとく近代になって隠没していた言霊五十音の原理がようやく社会の表面意識の上に甦ることとなります。その

隠没の二千年の間にも言霊の原理の存在に気付いた日本人はいました。平安時代以降では菅原道実・最澄・空海・日蓮等々の人々がそれです。遺されたそれらの人々の著書を言霊の立場から読めば一目瞭然です。しかしこれらの人々はその存在に気付いても決して明らかに言霊を説いてはいません。存在を呪示しただけでした。その時代々々が言霊を世に出す時ではないことを察知したからでありましょう。そして言霊研究の先鞭をつけられたのは明治天皇でありました。天皇に一条家より興入れされた皇后のお道具の中に、三十一文字の敷島の道・言の葉の誠の道である和歌の道の奥義書として言霊の手引書があったと聞いています。天皇は皇后と共に言霊原理研究の手探りを始められたのです。そしてその勉強のお相手をしたのが天皇の書道の先生であった山腰家当主であり、その子の山腰明将氏は著者の言霊の師である小笠原孝次氏の先生でありました。明治天皇のお詠みになった言霊・言の葉の誠の道すなわち五十城島（敷島）の道に関する御製が多数ありますが、ここにそのうちの二、三首を挙げます。この御製によっても、天皇が、日本が日本であることの真実の道である和歌の奥義をどれほど熱望されたか、よく推察されます。

聞き知るはいつの世ならむ敷島の大和言葉の高き調べを

しるべする人をうれしく見出てけり我が言の葉の道の行手に

天地を動かすはかり言の葉の誠の道をきはめてしかな

こうして言霊の研究は次第に進み、著者の師であった小笠原孝次氏の時になって、それまでは抽象的概念の研究のみに終始していた研究から抜け出し、実際にこの世の中に呼吸している生きた人間の精神の究極構造を示す原理として言霊の学問体系を確立したのです。昔の神話が現実の歴史創造の原理として徐々に甦り始めたのです。

言霊の研究が二千年の闇を破って始められた明治時代は、ちょうど物質科学において人類が初めて物質の先験構造である原子核内へ一歩研究を踏み込んだ時でもあるということは、私達にとって一つの重大な歴史的示唆を与えるではありませんか。

この著に接して言霊の意義に感銘を受けられた方は、もし手に入れられるならば私の言霊の師である故小笠原孝次氏の数種の言霊に関する書物をお読み頂き、言霊の理解をさらに深められることをお奨めします。

## 言霊と仏教典

言霊の原理を呪示表徴する言葉・内容を仏教典の中に求めますと、あまりに多数あつてまるで仏教典全体が言霊原理の解説書のごとき観があります。いまはただそのうちの特に一目瞭然たる類似表徴を挙げることに留めます。

お寺へ行きますとすぐ眼に映るのは五重塔です。言霊を知る方なら直ぐに了解するア、オウ、エイ、五母音を表徴したものです。この五層の建物が本来仏である人間の心の住家であることを呪示しています。日本語では家（五重）です。五重塔の次に多宝塔をよく見かけます。壁面のところが丸型の建物です。ここに多宝仏という仏様を安置します。多宝仏とは法華経の中に釈迦牟尼仏が法華経について説法をしてそれが合理的だと思つと「善哉善哉」といつて釈迦仏の説法を承認する仏様だと説かれています。ところで説示された論説が真理であるか否かを判断する究極の根拠とは何でしょう。それは物であれ心であれその先験的構造に照合して判断するのが最も適確です。物ならばその原子核内構造を調べれば正確に分かります。同様に「善哉」と承認する多宝仏とは人間精神の先天構造のことを指していることは間違ひありません。先に説明しました通りその言霊図は次頁図20のように示されます。仏典法華経の多宝仏とはこの図最下段に出てくる言霊イすなわ



の法蔵菩薩の四十八願についてもいえます。「たとい、われ仏となるをえんとき、国に地獄、餓鬼、畜生あらば、われ正覚を取らじ」(第一願)に始まる法蔵菩薩の四十八願とは、法蔵比丘が大願をおこして仏となった時の仏の功德について説いたものでありますけれど、その真実の意味はア、オ、ウ、エイ、五十音、いろは四十八音を比喻・呪示したものです。なぜなら仏位を成就した時、すなわち人間のすべてを知りつくした時、その人間のすべてとはア、オ、ウ、エイ、言霊五十音にほかならないからです。

同じ内容というだけでなく言霊原理の表徴である神道と仏教それにキリスト教をも加えて、教義の中に全く同じ内容が同じ言葉で表現される場合があります。その一つに日本神道で麻邇という言葉があります。言霊またはその原理法則の意味です。仏教では摩尼といっています。

世の実相音である三十三相を備えた観世音菩薩が手に持つ円満玲瓏な摩尼宝珠とはまじりけない純粹な事物の実相の最小単位を形どった珠玉です。キリスト教の聖書には Manna という「神の口より出づる言葉なり」と書かれています。言霊の内容を了解した上で、仏教典並びに聖書のこの摩尼・Manna の意味を検討してゆきますと、どれもが人間精神を構成する最小単位の実体を表示している言葉の言葉であることに容易に気付くことができるのです。

日本神道に言霊の原理を器物をもって表徴した三種の神器があります。八咫の鏡、八尺の勾璽、草薙の剣です。剣とは人間本具の判断力のことで、これをもって事物の姿を断ち切ると実相が現

われます。究極の実相は五十個の言霊です。これを勾璣で表徴しました。この五十個の言霊を理想形に組み立てた精神の規範が八咫の鏡です。ところが仏典にも同じ内容を説いた箇所がありません。観普賢菩薩行法経です。「化仏の眉間より亦金色の光を出して……象の耳の中に入り、象の耳より出でて象の頂上を照らして化して金台となる、象の頭の上に当って三化人あり、一人は金輪を捉り、一人は摩尼珠を持ち、一人は金剛杵を把れり……」と書かれています。金輪は鏡に、摩尼珠は勾璣に、金剛杵は剣に、相当して意を盡しているではありませんか。しかも「化仏の眉間より金色の光を出して……」と始まる金色光発現の循環は、先にお話しました言霊発現の順序である頭脳内に先天のアイデアが浮び、次いで無言の言葉が組み合わされ、発音されて空中を飛び、耳より入り確認されて再び先天の脳に帰る言葉としての宇宙の循環をそっくりそのまま現わしています。三種の神器の操作の実体が言葉・金色光である言霊であることを同じように示しているのです。

また仏教には神道の八咫の鏡と同義のものに閻魔大王の浄玻璃の鏡が挙げられます。人間が死んだらいったん閻魔大王のところに行き、生前の悪事は大王の側に置いてある浄玻璃の鏡に映し出され嘘をつくことはできないという教えです。八咫の鏡は人間精神の理想構造を形どったものですから、生きている時と死んだ後との違いはあれ、全く同様なものの表徴物ということができましょう。鏡の実体は言霊五十音でもって構成された人間の道徳・政治規範である天津太祝詞音

図のことです。

人間の経験知ではない天与の判断力のことを、宗教では器物化して一般に剣または杖と言います。その剣を振るい、杖に頼ることによって物事の実相を究め、行動の判断を誤ることなくする心の上すがです。不動明王の智剣、禪の拄杖等が挙げられます。(キリスト教旧約にはアロンの杖があります。)その他「両頭を截断すれば一剣天に倚つて寒し」などの名文句も出てきます。両頭とは主と客、私とあなたという分別的概念知をズバリと否定してしまうと、疑う余地なく明察する天与の判断力が宇宙を貫いて樹っていることが自覚されるという意味です。その他「大明三尺の剣」とか「三十年來剣を求むるの客」などの禪語も同様の意味でありましょう。坐禅の目的が天与の判断力の体得にあることは明瞭です。そして天与の判断力の実体とは、言霊十七音をもって表わされた天津磐境の構造のことなのであります。

以上書きましたことその他に、仏教において端的に言霊を表示している教えに真言密教の「阿字本不生」があります。欲望ウ、や経験知オ等の心的現象が拠ってそこから出て来る元の宇宙すなわち空なる宇宙である阿字(言霊ア)は宇宙開闢以来存在していて、いま生れるごときものではない、という意味であります。

言霊を呪示表徴する仏典の言葉を求めて神道と仏教の同義の物事を数種挙げてきました。仏教の創始者である釈迦は長い年月の説法の末に「我真実に於て一字不説」と申したとあります。こ

の言葉は一般には仏教の空の悟りの境地か、経験知の言葉では説明することが困難だから「一字不説」（一字も説くことがなかった）と言ったというように解釈されています。しかしその解釈は見当違いです。法華経化城喩品で釈迦牟尼仏は「空の悟りの境地とは、民衆が発心を諦めることを防ぐために一時的に仮に見せた化城（幻のオアシス）なのであり、空を悟った人はさらに心を新たに第一義である最高の悟りに向って発願せよ」と説いています。その最高の悟りとは「諸仏の語は異なることなし」といわれ、「仏と仏とのみいまして諸法の実相を究盡し給う」と説かれる「教菩薩法、仏所護念」（菩薩を教導する法、仏が常に念うもの）と称せられ、しかも「一字不説」とその実態を釈迦が明らかにしなかった五十音言霊そのものなのです。仏典の中には、言霊の比喻表徴する言葉はこの他無数に出てきます。言霊の原理を学んだ上であらためて仏典を読んでみますと、仏教自体ではなかなか理解できない經典の内容も容易に解読することができます。よくなることに驚かされるのです。言霊と仏典との関連は一応この辺にとどめておきます。

## 言霊と聖書

言霊の原理がキリスト教の聖書の中にはどのように表徴比喻として現わされているでしょうか、いくつかの例を挙げてみましょう。

言霊を知った人がまず聖書の中で眼に入るのは新約ヨハネ伝第一章冒頭の言葉でしょう。「太初はじめに言ことばあり、言は神と偕ともにあり、言は神なりき、この言は太初に神とともに在り、萬の物これに由りて成り、成りたる物に一つとして之によらで成りたるはなし、之に生命あり、この生命は人の光なりき」太初に言ありとは明らかに言霊のことであります。神とは生命の根源であり、名であり言霊です。生命の創造意志そのものである言葉即ち言霊です。その言葉とは一般に使われる言葉ではなく、その日常の言葉を言葉として成立させている言葉の言葉、言霊のことを言っています。この消息を聖書は別の表現で次のようにも説いています。

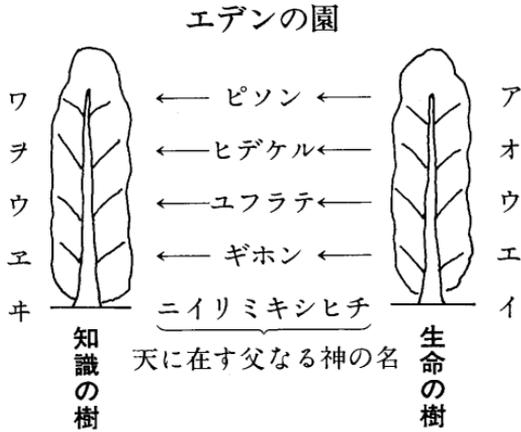
「元始に神天地を創造つくたまへり。地は定形なく眩空くして黑暗淵の面にあり。神の霊水の面を覆たりき、神光あれと言たまひければ光ありき、神光を善と観たまへり……」(創世記第一章一―四)

元始とは先にお話しましたように宇宙の天文学的、地球物理学的な初めのことではありません。常なるいま・この、何もないところから人間の意識が産まれて来る消息についての記述です。神が光あれと言わなければ光はありません。創造意志が事物を生みます。「太初に言あり」も「元始に神天地を創造たまへり」と全く同様の事実内容の表現なのです。現象が起こり、それを認識し、言葉で表現することが生命の創造活動です。この活動を人間の創造意志直接の言葉である言葉の立場で考える時、ヨハネ伝の言葉も創世記のそれも同様の記述として理解することができます。ようになりませぬ。

次に聖書のエデンの園について考えてみましょう。

創世記第二章には「エホバ神エデンの東の方に園を設け其造りし人を其処に置きたまへり、エホバ神觀にうるはしく食うに善き各種の樹を土地より生ぜしめ又園の中に生命の樹および善悪を知るの樹を生ぜしめ給へり。河エデンより出て園を潤し彼処より分れて四つの源となれり……」とあります。

右の創世記の文章だけでは何のことだか意味がとり難いのですが、これが人間の精神構造の図としての言霊図を呪示するものと考えますと、その意味が極めて明瞭となります。図を参照して下さい。(図 21)



言霊五十音図で見ますと、五つの次元宇宙である母音より発現して、それぞれの次元に現象を現わし、最後に結果である半母音に終わります。経験知はこの現象をふりかえることから得られます。その結果に到る筋道は生命活動の流れすなわち川です。

欲望の川はウ——ウ、知識の川はオ——ヲ、感情の川はア——ワ、道德の川はエ——エ、創造意志の川はイ——キとそれぞれ流れます。これら五つの川の流れの全体が人間生命の活動です。この言靈図を参照してエデンの園を作図して見ると図のようになり、エデンの園の意義が明瞭に示されます。この内言靈五十音図と違ふところは、創造意志である言靈そのものすなわちイ——キの流れを明示せず、代りに新約における祈りの言葉「天に在す父なる神よ、御名をあげめさせ給え」としてキリスト教信仰の究極の目標として呪示するに留めたことであります。それゆえキリスト教で予言され待望されるキリストの再臨とは、この父なる神の名、言靈、特にその内の父韻の自覚のことに他なりません。

人間精神の究極構造としてのエデンの園の実体である言靈図の知識がないと聖書の意味が極めて曖昧になってしまう一例をお話しましょう。旧約出エジプト記三章十三節「モーセ神にいひけるは我イスラエルの子孫の所にゆきて汝らの先祖等の神我をなんぢらに遣わし給うと言んに彼等もし其名は何と我に云ば何とかれらに言うべきや。神モーセにいひたまひけるは我は有て在る者なり。又いひたまひけるは汝かくイスラエルの子孫にいふべし我有といふ者我をなんぢらに遣したまふと」(~~~~線筆者) 右の文中の「我は有て在る者なり」または「我有りといふ者」、それが神の名だといわれても何のことだか明瞭には理解しかねます。「我は有て在るものなり」を英語の聖書で見ますと I am that I am. とあります。これに言靈図すなわちエデンの園の意味を総合し

まずと意味がはつきりしてきます。最初の I am は「神は是々である」です。次の that I am の I はモーセすなわち人間です。人間が人間であるべきもの、言い換えれば人間を人間たらしめている者ということです。ですから「神は人間を人間たらしめている者なり」という意味となります。人間精神の究極構造を探求することなしに外国語から聖書を翻訳した人の曖昧さが「ありてあるものなり」という不明瞭な訳をなさしめた間違いいえましよう。人間を人間たらしめている究極実在が神です。それ以外に神はなく神とは五十音言靈図です。

黙示録二十一章をみましょう。

我また聖なる都、新しきエルサレムの、夫のために飾りたる新婦のごとく準備して、神の許をいで、天より降るを見たり。……日く『視よ、神の幕屋、人と偕にあり、神、人と偕に住み、人の民となり、神みづから人と偕に在して……』

上記の聖なる都、新しきエルサレムとは何のことでしょう。もちろん、神である人間生命の根本構造の原理のことではなければなりません。エルサレムの町は日本の京都の市街のごとく、町筋が縦横に碁盤の目のごとくなっていて、ちょうど古事記における天照大御神の造田と同じく五十音言靈図を呪示しているのです。この精神の根本構造が、時刻して人々に新しく理解され運用されるならば、神の幕屋は人と偕にあり、人は神の民であることを真に自覚することになります。神の幕屋が人と偕にあるとは、古事記流に言えば神鏡の同床共殿ということであります。さらに、

二十一章を見ましょう。「われ都の内にて宮を見ざりき、主なる全能の神および羔羊はその宮なり。都は日月の照すを要せず、神の栄光これを照し、羔羊はその燈火なり……」キリスト教でいわゆる生命の樹とは言霊五母音のことであり、知識の樹は言霊半母音で、また創世記にある「我が虹を雲の中に起さん是我と世との間の契約の徴なるべし……」(第九章)の契約の徴とは、また「天に在す父なる神」とは、言霊父韻のことを呪示しています。この母音、半母音、父韻の自覚された精神原理によつて社会を見るならば、すべて世界の出来事の時間的、空間的意味内容が明瞭に把握され、その知恵の光に照らし出されて余すところがありません。日月の照らすを要せずというわけです。禅ではこのことを「扶かつては断橋の水を過ぎ、伴つては無月の村に帰る」などと表現します。この人間本来備わつた知恵が自覚されてあるならば、橋の落ちた川も渡るこゝろができ、月のない真暗な村にもちゃんと帰りつくことができる、というわけです。そして地球規模の公害増大で風前の灯にある世界も、この知恵の光によつて見る時、初めて人類の新しい生命をどこに見い出すことができるかが明らかにされるでしょう。各宗教を信じる人々にいまはつきりお伝えすることができます。「予言された弥勒下生とは、羔羊の再臨とは、その時はまさに、いまであり、そしてその実体が言霊五十音の原理である」ことを。

以上、日本神道、仏教、キリスト教の教義と言霊原理の密接な関係を種々お話ししてきました。しかしこれらはそれらの関連のごく一部を挙げたに過ぎません。このように世界の各地に発生し

伝播したこれらの教義がどうしてこれほどまでに類似しており、同じ真理を指向しているのか、またそれぞれの宗教の予言がどうして同一の期待を将来に託するのか、以上の意義は読者の皆さんがご自身で言霊の原理に深く立ち入って研究を進められる時、おのずから明らかになっていくことでありましょう。このことの詳細はさらに後の章に譲ります。

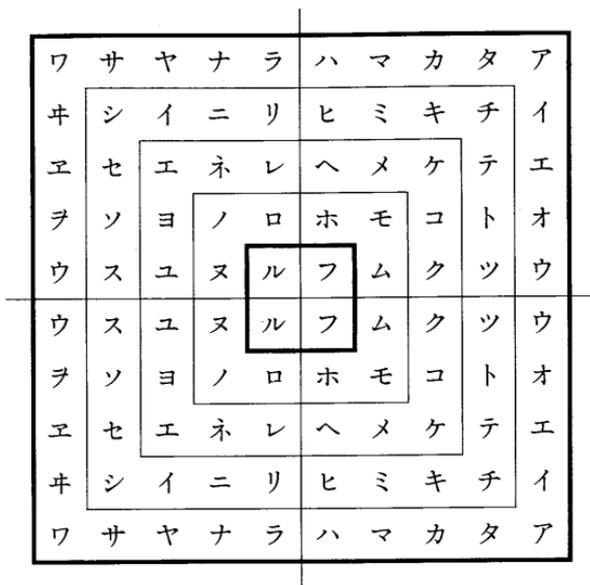
言霊と諸宗教との関連の最後に、言霊とピラミッドを挙げることにします。

言霊の道である日本古神道という天津太祝詞音図を陰陽にとった図形を78頁に挙げます。これは人間の心の持ち方として最終的理想の言霊配置図です。(78頁図22)

図形の中心にフルフルと四字が入ります。この四字を把んで上に引き上げますと、五段階のピラミッド型の立体形が得られます。この図形のことを古神道では高千穂の奇振獄くしふるだけと名付けます。

高千穂の峰に降臨した天孫が霊的に(奇)振るう(フル、運用する)山型の(ダケ)言霊図ということです。この図形で示される原理を象った大きな墓を造り大王の亡骸を収め永遠の生命を祝福したのがエジプトのピラミッドです。ギゼーの大ピラミッドの前に座っているスフィンクスは尋ねて来るエディプス(ギリシャ神話)に「人間とはそも何か」と質問をします。その決定的な解答は後方に立っているピラミッド、すなわち人間霊性の構造図型だというわけです。

メソポタミア地方に発見されている古代のジグラートも同様に言霊の立体構造を建造物として象徴したものであることに間違いありません。



ピラミッド(高千穂の奇振獄)

## 言霊を自覚確認する方法について

いままで言霊について母音・半母音・父韻・親音・子音と説明をしてきました。言霊とはいかなるものかについて大方の御理解を頂けたものと思います。さてそこでこれから言霊を自覚し確認するにはどのような方法があるかについてお話を進めてみたいと思います。人間が日常食べたり、議論したり、映画を観賞したり、道徳について考えたりする生活自体が、実は五十音言霊の働きそのものであります。自覚すると否とにかかわらず、人間は生きていかれることに変わりはありません。それなら言霊を自覚するとはどういうことなのか。人はスイッチ一つでテレビの番組を楽しむことができます。けれど大部分の人がテレビの受像機はどんな構造でできているか、放送局から受像機までどんな仕組みで連なっているか知りません。知らなくてもテレビはスイッチを入れれば映ります。しかしテレビがどこか故障を起こしたらどうでしょう。また、何かの都合でチャンネルが混線することが起こったらどうするでしょう。否応なくテレビの専門家の世話にならざるを得ません。さもないければテレビの勉強を自身で始めねばなりません。その上

で構造を知った時、その人はテレビに關してはすべてを知り、自由に操作できます。言靈についても同様です。人間が日常の生活から始まって、社会の情勢・国際間の問題・人類全体の将来等に何らかの危惧・疑問を持ち、既存の学問・宗教・道徳等を駆使して事態に対する意識を統一しようとしても、どうしても不可能となった時、人間生活の最も根本の要素である言靈の存在が初めて身近なものに感ぜられてくるのです。事態を解決するためには人間生命の構成要素である言靈の原理の立場から人生を再認識しなければならなくなるわけです。

言靈は生命の精神における究極単子です。人間をいま・ここで現に生かしている根本要素です。ですから言靈を確認する第一の道は、あくまで自分の働いている心に即して考えていくより他にはありません。言靈として説かれた要素を自己の心の働きの中に反省によって確認していくことです。そしてその確認ができたら、その確認された言靈の原理によって自己と他・社会・世界の動きを再構築・再認識していくことです。これが言靈確認の第二の道となります。この二つの道が完成されますと、その人は人生最奥の言靈の立場において人生を見、社会を観察し、世界を見透すこととなります。これ以上に人間世界を明らかにする方法はありません。

前置きはこれくらいにして言靈自覚の方法についての話を進めることにしましょう。

この本の初頭に人間の精神の五つの宇宙を説明しました。欲望・知識・感情・道徳・意志の五つの世界です。人間はそれを自覚すると否にかかわらず、この世に生まれてきた以上必ずこの

五つの宇宙の中で生きてゆきます。しかし人間は動物であると同時に神の子として自分の住んでいる宇宙実在を認識・自覚し、それに名を付け、他の人々に伝え文明を興し後世にまで遺し、人類として発展します。そして五つの宇宙をウ、オ、ア、エ、イと順を追って自覚認識してゆくことがとりも直さずその人の心の進化成長でもあるのです。そして五つのうちの最後の認識である人間意志の实在言霊イを見極める時、言霊の原理を理解し確認して活用運用することができるようになります。

昆虫は幼虫―蛹―成虫の三段階を経て大空に飛び立ちます。人間の精神は五段階の進化が可能です。ただし昆虫と違って誰もがこの進化段階を全うするわけではありません。年数だけは長く生きて、第一段、または第二段階の認識自覚で終る人も多いのです。欲望・知識・感情・道徳・意志等の五つの世界をそれぞれ一つずつ他との混同なしに自覚するにはどうしたらよいのでしょうか。

いま、この人間の精神進化の段階を順を追って説明してゆくことにしましょう。

## 第一 言霊ウの段階

欲望の段階です。オギャーと赤ん坊が呱呱の声をあげて何も教えられない時から乳房を吸いま

す。食物をほしがる欲望の始まりです。次第に大きくなり食物の他にもちやがほしい、本がほしいということからさらに長じて、旅行がしたい、金がほしい、名誉がほしい、地位がほしいと欲望に限りがありません。現にこの欲望の世界の他はほとんど知らずに一生を過ごす人がいかに多いことでしょうか。この進化段階にある人を仏教では衆生と呼びます。またこの世界にうずくまって他のことを知ることなしに大きな顔をしている人を禅坊主はウ、字虫、すなわち蛆虫と呼びます。この段階を基盤とした社会といえば広く産業経済の社会があります。もちろんこの世界しか知らない人でも他の四つの次元オ、ア、エ、イの宇宙にも生命を生かして暮らしていることに間違いありません。ただその四つの世界を自覚の対象として意識することが極めて少ないことなのです。

このウ、言霊の人間性能は、人間における最も幼稚な初発段階の性能であります。同時にまた人間が生きてゆくための土台となる働きでもあります。他の、さらに高次元の性能を開発しようとして、このウ、次元の、すなわち食べていくことの人間の営みを軽蔑する人をよく見かけますが、その態度が高次元の性能の自覚運用をも不可能にさせることになりかねません。注意すべきことのように思われます。

## 第二 言靈オの段階

この次元においての人間性能は、言靈ウ、次元で行なわれた諸現象相互の関連性を概念をもって知識として理解することです。現象の起こる原因・過程・結果をあらためて再構成して、その意味・法則を概念的にまとめる段階です。一般に学問することとはこの段階の性能のことではありません。

言靈の勉強におきましても、言靈についての話を聞き、本を読み、知識として理解していく段階です。言靈原理は人間生命の営む一切の現象を成立させている根底の実在法則でありますので、言靈を勉強する以前に人生一般に関する知識を広く身につけていなければいけません。言靈を理解するうえで有利であるということができません。商業や産業人の心理、学問をするうえでの思考方法、芸術や宗教の体験、道徳的实践への勇氣と挫折等の経験が多いほど言靈理解に役立つことでしよう。しかし、これらの体験が少いからといって言靈原理が縁遠いというわけでもありません。この世の中に横たわる矛盾の洞察と理想社会への渴望が言靈勉強の一番の糧であります。ここで言靈を理解し、自覚運用するうえで知っておきたい知識を得るために役立つ書物の名前を列記しておきます。

まず第一に古事記、日本書紀です。特にその中の神代巻は言靈原理の詳細な手引書であります

ゆえ、すぐには理解し難いことと思われるかも知れませんが、その相違の意義についてはこの本の後章において説明されます。記紀双方とも神話というものが言霊原理を表徴、呪示する典型であることを読者は理解されることでしよう。万葉集と古今集の歌本も一読の価値があります。和歌が敷島の道・言の葉の誠の道として、三十一文字をもって心情を吐露すると同時に、歌によってはその中に言霊原理を巧みに折り込んだものが見い出されます。

ギリシャ・北欧・ローマ・エジプト等の神話もお読みになっておけば言霊の理解に役立つことは間違いありません。

日本・中国・東洋・西欧・世界等の歴史を読まれて年代順に大ざっぱにでも頭に入れておけば、言霊原理を理解された時、その原理によって歴史を再構築するうえで役立ちます。特に日本の歴史に關しましては戦前と戦後の日本史の双方を読まれることを是非お勧めしておきます。(その意味は後章で明きらかにします)

宗教書も必読書です。神道では神道五部書、黒住、金光・天理・大本等の宗教々祖の遺稿やお筆先も興味のあるものです。キリスト教では旧・新約聖書があります。特に旧約ではモーゼの五書・ヨブ記・イザヤ記・ダニエル記、その他新約はマタイ伝・ヨハネ伝・黙示録等は必要です。

仏教では般若心経・金剛般若経・浄土三部経・華嚴経・維摩経・法華経等が有益です。その他の

仏典では禪宗無門関・碧巖録・正法眼蔵・歎異鈔等々、多数が挙げられましょう。

中国の書にも有益なもの多数です。老子・孟子・易経・論語等がさしあたって数えられます。インドのヨガ経典も役立ちます。その他各国の哲学書も有用なものでしょう。

以上列挙しました書物の中で手近なものから始められ、不明な点はそれぞれの導師に尋ねられて一応の理解を得、卒業されることが、言霊を自覚するための準備段階の知識として必要なことでもあります。

### 第三 言霊アの段階

「自分のものにする」という言葉があります。物であれば金を出して買って自己の所有物とすることです。知識でいえば、それを暗記しているだけでなく、概念・理論・法則をよく理解して、論理的思考を駆使することができるようになることです。

ところでこの第三段階の言霊アにおける言霊の勉強は、言霊を自己のものとするのではなく、言霊が自己の生命そのものであることを知る初めの段階、といったらよいでしょう。このことを知ることは「自覚」という言葉に最もふさわしい事実ということができましょう。「天上天下唯我独尊」と仏教で申します。宇宙において、我一人尊しとはなんと高慢な態度と思われれるかも知れ

ません。けれども、自分の心の中を深く見つめていって、ついに、自分の心の根元が宇宙そのものであり、その宇宙から現われた自分の構造内容を知ることによって、とりもなおさず、人間を、社会を、世界を、知ることができると知ったならば、天上天下唯我独尊とは真理なのであり、事実であり、決して高慢な自惚ではないこととなりましょう。自覚とはこういう種類の確認を言うのです。

第一の言霊ウと第二の言霊オの段階の学習態度は進歩をめざすことです。欲望を遂げるには一にも二にも前進することが基調となります。学問する言霊オの心構えも広く本を読み、多勢の人の話を聞き、質問するなど進取の態度が必要です。一つでも多くの経験を積みそれを少しでも広い理論体系に概念的に心の中で組み立てていくことであります。この二つの世界においては他人より強く大きい欲望を持ち、その経験を少しでも他より広い確かな理論体系にまとめた人が勝ちとなるはずで、*「進歩」*が学習の基本です。

ところが第三段階の言霊ア、の勉強になるとその心構えが逆転します。その態度の基調は*「退歩」*なのです。「天地の初発の時高天原に成りませる……」（古事記）。「元始に神天地を創造たまへり」（旧約）。「太初に言あり」（ヨハネ伝）。この「はじめ」すなわちいろいろな心の現象が起こっては消えていくその本源の宇宙の自覚の次元が言霊アです。とすると言霊ウの次元の経験と、言霊オである概念的把握という二つの個人的見解では、どうしても、その見解が出てくる元の世界は

捉えることはできません。経験と概念理解を無限に積み重ねれば起こってくる現象はそれだけ正確に捉えることはできません。けれどもその現象が起こる以前の、または、その現象が消えてしまった後の、何もない宇宙そのものを捉えることは決してできない道理です。ここでは進歩の追及態度は通用しないのです。それでは言霊ア、の把握の方法には何があるのでしょうか。そこに「退歩の学」が登場します。

人間がこの世に初めて呱呱の声をあげて生まれ出た時、その心は真白で汚れないものであります。まさに神の赤子です。その後、身につける経験や意見・希望・理想等々の個別の見解を持つていないためだといえることができます。これら種々の見解の基礎となる知識・経験は人間精神の成長にとって欠くことができません。またその知識・経験の獲得によって「自我」を形成していくのですけれど、同時に人間はその自分の持つ価値判断の基準となる経験・知識の体系を本来の自分自身だと思いきんでしまします。そして各自の経験・知識が触れ合うところに競争・議論・反発等の騒動も起こってくるのです。

いま、人間がこのような精神成長の過程で、経験・知識によって形成された人格の有限さ・狭さ・不自由に気が付き、何者・何事にも制約されない精神の自由の境地があることに気付く時、その探求の態度はそれまでの進歩をめざすことから百八十度の転回を余儀なくされるのです。それまで自我を成長させようとせよと集めて来た経験や知識が、実はすべて他人や社会からの借

りものであり、本来この世に生まれ落ちた自分自身とは別のものであることを心の中に確かめていく作業を始めねばなりません。いままで一生懸命集めて自分の着物として重ねて着込んできた経験・知識・信条等を、今度は一枚一枚脱ぎ去っていくのです。それ以外に精神的赤ん坊に帰る途はありません。

この精神内のUターンすなわち反省に、おおむね二つの方法が考えられます。宗教でいうところの自力と他力です。簡単に紹介しましょう。

## その一

いろいろな心的現象を生起させる本源の宇宙が、すなわち本然の自己が、必ず現前することを確信し期待しながら、いままで自己自身だと思いきみ生きるよすがとしてきており、判断の基準ともなっていた経験・知識・信条・理想等々を、反省のうちに否定していく道であります。「ひきし庇を貸して母屋を取られる」という諺があります。生まれ長じて知識・教養を<sup>〃</sup>身につけてきたはずであるのに、いつのまにかその知識・教養が自分という母屋を乗っ取ったのですから、それをこたとあるごとにひとつひとつ自分自身に言いきかせて再び母屋から庇に出て行ってもらう作業です。その知識・信条の内容がどんなに立派なもの、有益なものであろうとも、どんなに生命をかけて信じているものであっても、借りているもの・本来の真白な自分でないことに違いはありません。

それを庇にまで帰ってもらうのです。人間が一度経験したこと、手にした知識は、どんなに否定しても決して全く忘れ去り、関係のないものになることはできません。けれどもそれらの経験・知識に自分自身が翻弄されてきたままのことを反省し、実は自分が時所ときじょうに応じてそれらの経験・知識を反対に使いこなすのが自由の態度なのです。

反省し否定するといっても、その中心に本来本然の自己である宇宙の存在を確信しなければなりません。この確信のない単なる経験・知識・信条等の否定は、当然のことながらニヒリズムに陥ってしまう危険をはらんでいます。いまは現前していない本然の自己である宇宙の自覚を確信するのですから、この態度・心構えは信仰ということができましょう。仏教の一つの宗派である禅などはこの方法の典型的なものでありましよう。禅宗では借り物である知識・信条等を否定していく働きを無むといひ、最後に自覚する本然の宇宙を空くうと呼びます。心中にこの経験・知識を否定しても、その経験・知識はまるで生きもののように自己主張し反撃してきます。それでも遂に否定し否定し盡す時、忽然として、自己の本体が実は広い広い唯一つの宇宙そのものであることが自覚されます。それまで自分という個人が勝手に見ていると思っていたのが、実は宇宙そのものがこの眼を通して、この手に依って、この耳を通じて、見、触れ、聞いていたのであることが、はつきりと自覚されるのです。この、見られる光・宇宙に充滿している光、また、感じられる無限のあたたかき、その世界が言霊ことばアなのです。この宇宙が、溢れ出る感情の世界であり、芸術・

宗教のよつて興る世界であることも明らかに看取されます。この光と熱の充滿した宇宙が「天地の初発」なのであり、仏教で無礙光むげこうといわれ、キリスリ教で「光に歩めよ」と称えられる宇宙のことであることがおのずと了解されます。

## その二

第一の道が、自分の本然の姿の实在を信じて、その自覚を妨げている色眼鏡である自我の經驗・知識等を心中に否定していくのに対し、第二の道は、自己とはあくまで起こつては消え現われては去つて行く心的現象の自己であることを心に反省し、そのささやかではかない自分、しかもそれはかなさゆえにかえつて威張りちらして勝手に生きているあさはかな自分を、それにもかかわらず安穩に生かさしてくれる神または仏等の慈悲・愛に感謝しながら生きようとする努力の道であります。この方法の顕著な例は仏教では「南無阿彌陀仏」の道があり、もう一つはキリスト教のイエスへの帰依の信仰であります。浄土真宗の悪人正機、すなわち「善人なほもて往生をとぐまして悪人をや」（歎異鈔）とか聖書にある「幸福さいふくなるかな心貧こひしきもの、天国はその人のものなり」（マタイ伝）等の信条はこの道の要諦であり、これを他力の道といひます。これに反し先に挙げた禪宗等は自力の道といひことができます。ささやかで・さかしき心の自分を日々刻々生かし続けて下さる神仏に感謝し盡す時、自分を生かして下さる大きな力すなわち愛と慈悲に抱擁されて

いる自分を発見します。キリスト教でいわゆる「罪の子」がこの瞬間から「光の子」あるいは「神の子」に変わります。この、すべてを抱擁し生かしている愛と光の世界——これが言霊アの世界なのであります。自己の本然の姿が宇宙それ自体と信じてその自覚を求める自力の第一の道と、現象界の中にはかなく現われては消える罪と業の深い自己をみつめながら、それを生かして下さる愛と慈悲の神仏の大きな力の恩恵に感謝して神の子の自覚に導かれる他力の第二の道は、言霊アの自覚において同じ終着点に交わって一つ境地となります。言霊アの自覚は人間の魂を束縛している原因が除かれた状態に立つことであって、自由の境地に遊ぶことができます。ピカソの抽象画をご覧下さい。その中の人間は眼が横についていたり後ろについていたり頭の上に小鳥がとまっていたりして、まさに子供が樂書うたがきをしているようではありませんか、そうです。ピカソは実際に子供のごとく絵の中で遊んだのです。遊ぶことのできる数少ない画家の一人であったということができるでしょう。逆にピカソの具象画を見ましょう。彼はその絵の中で鋭きびしく美を追及しています。絵を通して魂の自由を追及したのです。追及の結果美本来の境地に到達することができます。真善美といわれるその美の世界に没入することのできたピカソは、その世界の中で遊んだ（「ア」そんだ）のです。それが彼の抽象画です。樂書に理屈をつけたら野暮というものです。

右のように魂の自由を得て、その広々とした境地に一生満足して遊んでいる人がいます。その

人は、この世の中の出来事に巻き込まれて、朝から晩まで齷齪と働いている人を見ると馬鹿馬鹿しく思われるでしょう。しかし言霊の自覚の道はこの段階がまさに第一歩であるに過ぎません。言霊の道はこれからが正念場なのです。伊勢神宮の本殿中央の真柱が五尺のうちの下二尺が地表下に隠されていることの真の意味は、これ以後の勉強によって解き明かされてくることになりま

#### 第四 言霊工の段階

庇を借りて母屋を乗った後天的な知識・信念・習性等を心の中で否定、整理して、母屋である本来の自己自身を再び取りもどした人は、魂の自由を得て潑刺と生きることが出来ます。自己本性が宇宙そのものであることを知り、自分のそれまでに身につけた知識・信条・習性等をその場、その場に應じて自由に駆使することが出来るからです。具象の極を究めたピカソが抽象の絵の中で遊んでいるのと同様です。この次元の境地にいる人を仏教では縁覚あるいは阿羅漢といひ、キリスト教ではアノインテッド Anointed と呼びます。芸術の表現し得る境地としてはこの次元が最高次元です。ですからこの境地を究めてしまったピカソはその後は時には遊んでもいられないのです。けれども人間全体の魂の進化という立場からは、この次元に留まって遊んでいるわけ

にはいきません。進化の第四段階目が次に控えています。それが言霊エの次元です。自己の本性が宇宙そのものであることを知った人は自分の知識・信条・習性等をその時その場にに応じて使い分け不自由はありません。その意味では「わが事足れり」です。しかし眼を他の社会に転じてみましよう。そこにはそれぞれの罪業に翻弄されて苦悩の底に沈んでいる人々が多勢いるのです。自分が生かされていることの有難さをつくづく知った人が、他人の苦しんでいるのを見て、いま自分が味わうことのできる自由をその人達にも手にしてもらいたいと思うのは人情でありましよう。否、自分の使命だと言えます。そう思い立った時からこの人の進化の第四段階の勉強が始まります。この世の現象界の出来事に悩んでいる人は、かつては自分もそうであった如く悩みながらその社会的欲望の執着を捨て切ってはいけません。相手を正当な手段で打ち負かすがなぜ悪い？ 信念を貫ぬこうとしてなぜ不都合なのだと言張しながら、泥沼の中でもがいている人に、どのような手段で、地獄から抜け出させることができるのか、の勉強が始まるわけです。進化の第三段階である言霊アを求める勉強が自利のためであったのに比べて第四の勉強は利他の道です。〃どのような手段で〃の勉強の道、仏教という方便と真理への道、それは選択を勉強する段階であり、言霊エは〃選〃らぶの言葉の基本の道ということが出来ます。この段階にある人を仏教では菩薩、キリスト教では使徒と呼びます。社会一般でいえば真の意味での政治・道德の道であります。

世の中にはいろいろな経歴・習性・知識・信条等を持った人がいます。それらの人達にどのようにならばそれぞれ対応したらよいかの勉強は無限ともいえる努力が必要です。そしてその努力を支えるものは人類の理想社会の建設という使命観でありましょう。

ところでこの次元における言霊の勉強はどうなるでしょうか。言霊エの意義を端的に表わす言葉は「選らぶ」です。何を選らぶのかといえば、言霊ウ・オ・アの中からその時々の場合に必要な次元を選ぶことです。いまこの人を導く最適の方法は言霊ウ・オ・アの中の何であるかを選ぶことです。この選択の勉強によって言霊ウ・オ・エのそれぞれの次元的相違が次第にはっきり了解されてくるようになります。この次元がはつきり自覚されてきますと、それまではっきり自覚できなかつた知識を求める言霊オの次元の心構えと知識を選択するこの次元の心構えとの相違が特に明瞭に自覚されます。言霊オの次元の心の構造が正反合の弁証法構造を持ち凶形△で表徴されるのに対して、言霊エの次元の心の構造が△という形で表徴されることも明確となります。(△は帰納であり、△は演繹です)と同時に人間生命の一瞬一瞬の活動の実体が言霊なのだという自覚がひしひしと感じられるのもこの次元においてであります。

## 第五 言霊イの段階

第五段階の言靈イの次元は第四の言靈エ、次元の勉強修業の完成の次元ということができません。すなわちいかなる事態に対処しても誤ることなく完璧に行動し得る人格完成の次元です。そしてこの次元に到って初めて人間の思考行動がはっきりと五十音言靈図に則って表現され決定されるようになります。第一段階から第二・三・四・五段階へ勉強が進むにつれて言靈母音ウ、オ、エイの実在が明らかに区別され自覚されてきます。そして第五段階の言靈イの次元に一歩足を踏み入れる時、母音に続いて言靈イすなわち人間意志の展開としての言靈父韻が心に焼き付くごとく自覚されてくることとなります。第五の段階はまさに言靈の領域なのです。その領域は人間創造意志の究極的構造を言靈五十音をもって総体的に捉えた人間精神の全貌です。この次元を仏教では仏陀といい、キリスト教ではキリストすなわち救世主と呼んでいます。

まず言靈イの展相である八つの父韻の捕捉の方法からお話を進めることにしましょう。いままでも何度もお話ししましたように、言靈父韻というのは言靈イすなわち人間生命の創造意志の展開する相であります。親音であるイ・ヰの実際の働きです。そして母音ウ、オ、エに働きかけて後天現象の最小単位である言靈子音三十二を生み出すきっかけとなる韻です。八父韻はキ、チ、ニ、ヒ、ミ、イ、リですから、例えば父韻キが母音アに働きかけて生まれる子音はキアで、詰まって力となります。この子音を生む行程から考えて母音ウ、オ、エである欲望・知識・感情・道徳の現象の基底には必ず人間創造意志が働いていることがわかります。根底に創造意志が働らかなか

れば現象は生まれてきません。この行程を心に留めておいて、人間精神の進化の第三段である言霊母音アを求めるとして退歩の学の場合を簡単に顧みてみましょう。

本然の自己を求めんとして心の中に次々に生まれて来る現象の判断の基準となるいわゆる自我を形成している経験・知識・習性・信条等をつつひとつ否定していきます。言霊アの自覚として広い広い本来の自己なる宇宙を求めるにはただこの否定だけで用が足りませんでした。否定に否定を重ね盡した時、仏教でいう空なる本然の宇宙は心に自知することができました。けれど人間創造意志そのもの（実はそれに五十音単音を結びつけますと言霊そのものとなる）の基礎である八つの父韻を自覚するためには、その否定行動そのものを更に見つめる必要があるのです。そしてその否定の行動の中に知性の原律である父韻の働きを捉えるチャンスがあるのです。

広い宇宙が実は自分の本性であり自我であると信じ、その自覚を疊らせている従来からの自我観念すなわちそれを構成している経験・信条・知識等を、それは借り物であって自我ではないと否定していきます。しかし一度や二度自分の心に「これは借り物だ、自分ではない」といいきかせたところで従来価値あるものとして許容し、信頼して生きてきた知識や習慣はなかなか母屋から庇へ立ち退こうとはしません。何かに感じるとそれらの知識や習慣はたちまち自分の心全体を占領してその判断の行動へおしやります。言霊アの自覚の修業は実はこの否定と失敗の連続であるわけです。それにもめげず否定の活動を心の中で続けていきついに否定し盡した時、豁然として宇

宙そのものが心の本性として自覚されます。母屋が戻ったのです。と同時に、それまで自分の否定に反抗して、希望に反して現れてきたと思われていた一つひとつの現象が、そのまま現実の真相として、焼き付くような真実として、容認、是認されます。迷は即真実なのです。仏教でいう諸法空相が理解されると、同時に諸法実相が是認されてきます。そのことを煩惱即菩提などといいます。この時さらにこの実相発現の一瞬を凝視してみましよう。ある時は期待に反して、またある時は期待通りに現れ出て来る現象の奥に、その現象を押し出して来るごとき原動力が存在することに気付きます。言霊ウ・オ・ア・エそれぞれの宇宙に働きかけ、刺激して、経験・知識・感情・道徳心等々の現象を惹起させる生命意志の根源存在を認識することができます。そしてその生命意志の動き方に八通りあることが分かってきます。八父韻の自覚です。言い換えて説明しますと、言霊アである自由な世界を得ようと努力した自利の行では全然意識することもできなかつた人間生命意志の存在とその働きの様子が、言霊エ以後の利他の行の中でははっきりと八つの韻として自覚されてくるのです。この八つの父韻が人間生命の創造意志の現われであり宇宙自体の創造力であります。

## 父韻キ・ミ

先に述べましたように自己の本性を見ようとしてそれまで自我だと思ひこんできたその構成要素の知識・習性・信条を否定し続けます。けれども小さい時から身につけた癖とか信念とかはなかなか強情で、「お前は後天的に仕入れた借り物なんだから呼ばない限り出てくるな」と幾度我が身に言いきかせても、ある状況では必ず姿を現わし否定の力を押し破ってしまいます。否定しても否定してもその癖が出る状態をもう一步踏み込んで反省する時、否定の力を押しつけて経験的に身につけた癖・信条等と結び着き、またはその知識・信条等を心の宇宙の中から自分の方へ掻き入れようとするいわばデモニーニッシュな力の存在に気付くのです。これが創造意志の力です。この掻き操ろうとする意志の働き、これが父韻キであります。八つの父韻は互いに夫婦の性質を持つ二つの韻四組の合計であることは先の父韻の項でお話しました。父韻キが心の宇宙からその中にあるものを掻き繰る韻であるのに対し、父韻ミは心の宇宙の中のあるものに真直ぐに結び着く働きの韻です。父韻キとミは互に作用と反作用の関係の二つの韻です。

## 父韻チ・イ

たびたび申し上げていることですが、父韻とは心の現象が起こる原動力である意志の働き方の

ことで、当然、心の現象の表面には現われることがありません。その現われないところのものの説明でありますので、いかに説明しようとも比喩であり、ヒントであることをご承知のうえお考之下さい。人はある重大な岐路に当面しますと、こうしようかそれともああしようかといろいろ迷います。この迷うということは、いままでに経験し勉強してきて知っているAの方法をとろうかそれともBの道を行こうかの選択の迷いです。迷いに迷った末に「どう考えてもうまくいきそうとも思えない。下手な考え休むに似たり、こうなったらこざかしい考えは止めて、その場になつたら全身全霊で当たってくだけよう」と決心します。この、自分の過去の経験や知識に頼るだけでなく、自分の全身全霊を投入してことを起こす、すなわち心の宇宙全体がその時その場で全体を現象化する瞬間の意志の韻——これが父韻チであります。剣道でいえば、大上段の構えから全身を相手にぶつつけるように振りおろす働きです。「とーッ」とか「たーッ」とかの掛け声が当然かかることでしよう。(タ、チ、ツ、テ、ト)

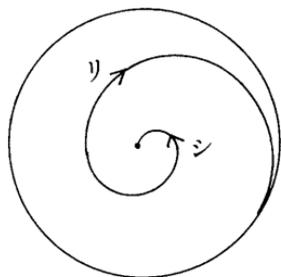
いま、ここに宇宙全体である全身全霊が現象化した次の瞬間、その働きは惰性的な持続的なものになります。この持続性の意志の働きの韻が父韻イであります。

父韻シ・リ、

本来の自己を求めて独り静かに坐っていますと心の中は静まるどころかかえっていろいろな雑

念が湧いてきます。これではいけないと気を取り直して精神を集中させようと努力するのですが、いつのまにか何かの記憶とか心配事などが現われ、次から次へとそれが発展し心中に拡がり、ついには心全体を占領してしまう——といったことがよく起こります。この、心の中をぐるぐる馳け廻りまさに螺旋状に心全体に発展して行く動きの原動力になる意志の韻、これが父韻リであり、螺旋状というと平面的に聞こえますので、むしろ段々に振幅を増していく螺旋階段状に心の立体宇宙全体に拡がって行く動きといった方が適当かも知れません。作用あれば反作用あり、反対に螺旋状に求心的に中心に向かって静まる意志の動きの韻が父韻シであります。(図23参照)

図 23



父韻ヒ・ニ

心の中に何かが起こり進展している。けれどそれが何事なのであるか、もやもやしていて分からない。こういうことはよくあることです。このもやもやの気持が起こるのは一つの事態が心の中で十分に進展し煮つまつていないためであります。この事態が心の中心に煮つまる根本意志の韻が父韻ニであります。煮つまつてくると表面意識的に「はっ」とその起こってきた事態が何であるかに気付きます。気付くとは言葉で表現することができたことでもあります。この言葉として意識表面に完成する原動力となる意志の動きが父韻ヒであります。

以上、チイキミシリヒニの八父韻を自己の心の中に確認する方法のヒントをお話しました。

もちろんこの八つの父韻は現象が生まれる以前の、その現象を生む原動力である先天的原律でありますのでそれ自体は決して姿を現わすことはありません。それゆえどのように説明を盡くし、ましても結局はそれぞれの人が自らの心の中で確認しようとせぬ限りお分かり頂けないものです。しかし自己の心で一度確認してしまえば全くの真理であって、この父韻の活動こそ宇宙万物を創造させる生命の根源であることがおのずから知られるのであります。中国では古来易経がこの八つの原律を概念的に捉えて易の八卦で示し、それはキリスト教において「天にまします父なる神よ、御名をあげさせ給え」と二千年渴仰されてきたものであり、仏教で「八正道」の根本義として表現されてきたものでもあるのです。

## 言靈子音の自覚について

今まで母音ならびに父韻を自分の心で確認するにはどうしたらよいかを私の体験を例に説明してきました。母音と父韻が出揃いました以上、父母の生む子音はどうして確認するのかの話に当然なるわけであります。

子音の自覚確認の方法を説明する前に、順序として、母音ウ・オ・ア・エ各次元に住んでいる人がそれぞれどんな手順を踏んで目的達成に進むか、それが八つの父韻の配列によって表わされることの説明を終えておきましょう。住んでいる次元が違いますと、考え言葉から、発想・手段・目的まで相違してきます。左に一つの図表を掲げましょう。(103頁図24)

前の章で示しましたように、八つの父韻の頭脳内の動きを理解したうえで言靈母音ウ、オ、ア、エの各次元に住む人の目的遂行の心の運び方すなわち八父韻の配列を見ますと、比較的容易に理解することができます。上図は言靈ウ、オ、ア、エ各次元に住む人がそれぞれのようない創造意志の配列のパターンを持っているかを横に並べて示したものです。古事記ではこの八つの父韻の配列を「時置師<sup>ときおかし</sup>」と呼んで、それぞれの次元に住む人が、目的遂行のために時の経過に順って変化させる意志発動の変遷を説明しています。図表を見ましょう。

〔父韻の配列と次元〕

エ	イ	チ	キ	ミ	ヒ	リ	ニ	イ	シ	中	
ア	イ	チ	キ	リ	ヒ	シ	ニ	イ	ミ	○	
オ	○	キ	チ	ミ	ヒ	シ	ニ	イ	リ	○	
ウ	○	キ	シ	チ	ニ	ヒ	ミ	イ	リ	○	

言靈ウの次元にうずくまって明け暮れ欲望の世界に没入して  
 いる人は、自己の本性が実は広い宇宙そのものなのだという自  
 覚がありません。それゆえその心の手順の初頭に立つべき母音  
 の自覚を欠きます。母音の立つべき第一行を空白で示した所以  
 です。次に八父韻配列の第一番目は父韻キで始まります。最初  
 に母音の自覚がありますと、その行為は宇宙全体の具体化活動  
 として父韻チから始まるはずですが、自己本来の面目（禪の言  
 葉）の自覚がありませんのでその心の手順は自分の心の中の欲  
 望の一つを掻き寄せること、すなわちキで始まります。

以下人間の行動の手順をその行為の底に働く純粹意志の力動  
 の状態によって捉えてのお話でありますので、八つの父韻を確  
 認して頂ければ自然に全体が理解することができるのであるこ  
 とを心にとめてお読み下さい。

掻き寄せられた欲望の目的が心の中心に静まり不動のものとなります（シ）。その次にチが続き  
 ます。自己本来の面目の自覚があれば、この父韻が示す現象は宇宙全体または全身全霊などに関  
 係したものとなるはずですが、いまの場合はこの自覚がありませんので、ここではチはその人間

の経験・知識・信条といったものの総体を示します。自我欲望が決まれば(シ)、その達成のために経験・知識・信条等の全部(チ)の中から選ばれた名分(ニ)が煮つめられ、その名分に都合のよい言葉(ヒ)が生み出され、その言葉が他の人または社会に向かつて(ミ)動く(イ)。しかしこの動きはとめどもない欲望の世界へ進展して(リ)極まることがない。父韻の配列がりて終ることは、欲望の目的と思われ追求されてきたものは次の欲望の発端なのであって、この世界が際限のない流転の相であることを示しています。心中のこれで完結という終りはあり得ません。そのために最初の母音イと共に最後の半母音半をも欠如することとなります。欲の世界がややもすると目的のために手段を選ばず、否、目的のために他のいかなる次元の人間の性能も踏みつけにする傾向は、この父韻の配列の内の、キシチニがよく示しているところであります。欲望の達成のためには知識も人の感情も道徳心もすべては手段にすぎないのです。

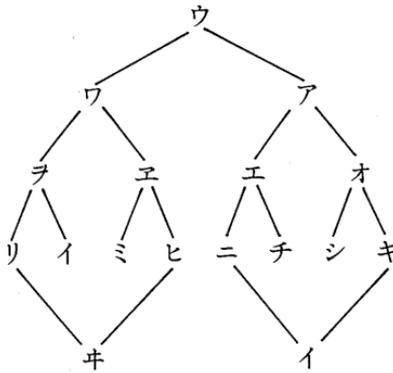
言霊才の段階に埋没している人も、その探求する学問の究極においてはいつの日か宇宙全般を解明することができるであろうという希望は持っているかも知れないけれど、自己の本性即宇宙なる自覚はない。凶表の第一列が母音の自覚を欠き空白となる所以です。

父韻の配列の初めはキです。何かの現象を見て疑問を感じる時、それを心の中心に掻き寄せ(キ)る韻です。その疑問をいまままで蓄積された経験・知識全体(チ)に照合して、いまままでの知識と

疑問とが統合され止揚されるであろう理論を志向し(ミ)て、言葉として組み立て(ヒ)、検討されて正しいと心に決まれば(シ)、その理論より行動の名目(ニ)を立て、行動し(イ)、次の事態へと発展して(リ)いきます。この心構えもいま・ここの一瞬の中にそれ自体で完結した体系でなく、結論が次の疑問の初まりとなり際限なく続くものです。ウ、段と同様最終列の半母音の自覚を欠如します。

右のキチミヒシと続く心構え・心の手順のことを正反合の弁証法と呼んでいます。概念的理論探求である限り必ずこの手順を踏むほかはありません。この弁証法を図示しますと△<sub>正</sub>の三角形がてはまります。△が形而上学的弁証法、▽が形而下学的弁証法です。二つ組み合わせた形△▽は大昔より「カゴメ」と呼ばれ、人間の考え方の一つのパターンを表わしてきました。それは現象の分析を推進してそのかなたに完全な真理を発見しようとする帰納的方法です。このカゴメの形にちなんで大昔から歌われている童謡「カゴメ、カゴメ、カゴの中の鳥はいついつ出やる、夜明けの晩に、鶴と亀が出会った。後ろの正面だーれ」の比喻している真の意味を紹介しておきましょう。カゴメはいま説明しました弁証法的思考法則のことです。またそれは西欧的な考え方のことでもあります。鳥とは十理<sup>と</sup>でア・タカマハラナヤサ・ワと整った人間精神の理想的な心の鏡のこと。すなわち、同床共殿の廃止以来世界の科学的弁証法的思考一色の籠の中に閉じこめられている言霊の原理はいつこの世の中に再び現われるのか。それは夜の闇すなわちこの末

図 25



天津磐境

図 26

五十音完成配列

ワ	サ	ヤ	ナ	ラ	ハ	マ	カ	タ	ア
									イ
									エ
									オ
									ウ

天津神籬

法の道徳的闇が一番濃くなる夜明け前の時に、鶴すなわち剣（天与の判断力の自覚体である天津磐境）と、亀すなわち鏡（人間精神の究極的理想構造を言霊の配列をもって示した五十音言霊・天津神籬・八咫の鏡）とが、一つの理論体系として人間の自覚の上に完成した（出会った）時である。あなたを実際にあなたたらしめているあなたの後の正面にるのは誰ですか。……これが

童謡の隠された意味であります。大昔、五十音言霊図は粘土板に刻まれて焼物にして保存されたため、これを甕かめと呼びました。亀は甕に通じます。(図25、26参照)

言霊アの次元とは宗教家や芸術家の心です。そのア段の父韻の配列はイ・チキリヒシニイミ〇です。アの次元に至って人は自己の本性即宇宙であることを自覚します。母音の自覚を得ます。それゆえ現象となる父韻の配列の第一には宇宙そのものが現象となる韻であるチとなります。ア次元でありますゆえ、その行動の最初は感情の宇宙がそのまま発露されることを示します。その次に、その時、そのところの一つの関心事あるいはテーマが、心の中から掻きよせられ(キ)、心の中いっばいに発展拡大されて(リ)、一つの表現を得(ヒ)、その表現が心の中に行動の目的となって固定され(シ)、そこから行動の名目が定まり(ニ)、それが行動となって動き(イ)、その方向のかなたに目標の実現があるであろうことを指し示し、訴えます(ミ)。八父韻の配列の最後がミで終ることは、その指示するものが基本要求であり未来の目標であるに留まり、いま・この一瞬において完結した思考体系でなく、結論は時の経過に委ねられます。半母音の自覚を欠くこととなります。

次に言霊エの次元にいる人の心の運び方について考えてみます。この段階はイ・

チ、キ、ミ、ヒリ、ニ、イ、シ、ホ、の十個の配列で示されます。第一列の母音イの存在は完全自由な宇宙意識が成り立っていることを示しています。第二列よりの父韻はチで始まります。父韻チは精神宇宙全体が直接現象として姿を現わす韻です。次に父韻キ・ミが続きます。キ・ミは宇宙の中にあるものを搔きよせ（キ）結びつく（ミ）韻です。ところがいまは言霊工次元にある人について考えているのですから「いま、ここでいかにすべき」の選択の心の構造のことです。とすると搔きよせ結びつく心の動きとは主体の状態と客体の状況を見定めることを意味します。宇宙意識の前にあって、言いかえますと、何ものにも捉われない精神全体の光に照らされて、主体と客体の実相がはっきり把握されるということです。次に父韻ヒがきます。ヒは表面に開く韻です。把握された主客の双方を満足させ創造に向かわせる言葉が生み出されることです。その言葉は心いっぱい推し拡がって（リ）いくと、心の底に行動の確固たる名目が定まり（ニ）、それが心を推進し（イ）、結論に向かって集約して行き（シ）ます。そしていまここににおける心に完成された結論・結果が確定されます。半母音ホで終結します。

以上言霊ウ・オ・ア・エ次元に住む人の心の運び方についてそれぞれ検討してきました。それぞれの精神運用の代表的な思想といえますと、言霊ウにおいては欲望に基いた産業人の心が挙げられ、言霊オでは広く学術科学に従事する人々の心が思い浮かびます。世の中の発展にとって双

方とも欠かすことのできない重要な分野ではありますが、それに従事する人々は競争場裡に埋もれて日夜心の休まる暇とありません。母音・半母音を欠くことがその精神的自由が完全には無いことを示しています。古事記ではこの思想のことをスサノオの命の八<sup>やつかのつるぎ</sup>拳<sup>ここのつかのつるぎ</sup>剣と呼び、母音・半母音を欠いた八父韻のみで表示される精神体系であり、日夜現象のみを追いかける次元であることを比喩で示しています。

次に言霊<sup>ことば</sup>、次元の心構えですが、母音の自覚はあるが、半母音を欠き、そのため、心の運びの最終結果は基本要求であるに留まり、結論は常に訴えられる先方に委ねられています。これは神道では九<sup>ここのつかのつるぎ</sup>拳<sup>ここのつかのつるぎ</sup>剣と呼ばれその代表的な思想としては東洋の哲学、宗教理論が考えられています。言霊<sup>ことば</sup>、次元に至って初めて母音、半母音の自覚が整い、神道で十<sup>とつかのつるぎ</sup>拳<sup>ここのつかのつるぎ</sup>剣と呼ぶように十音が横に揃って完全な五十音図そのままの思想体系の自覚が成立します。ここではい、ま、こ、この一念の内に発端も結果も見通された自由で円満無礙な精神の完成がめざされています。この心の持ち方の代表的なものといえば、仏教でいわゆる菩薩行が挙げられます。先にも説明しましたように、魂の自由の自覚を得た人が、さらに一念発起して自分以外の人にもこの自由を自覚してもらうために、どのように他人に対処していけばよいかの修業のことです。そしてこの修行の進展の末に人間の最高の精神図式の完成された人を仏教で仏陀と呼びました。過去の世界の聖者・高僧といわれる人々が、この人間精神の完成をめざしてどれほど修業渴仰してきたことでしょうか。

我聞く天台山 山中に琪樹きじゆ有り 永言して之を攀よちんと欲すれども 石橋しやうきやうの道を  
曉さとる莫なし 此に縁よつて悲歎を生じ 幸居して將に暮れんとす 今日鏡中を觀れば  
颯々として鬢びんぱつ髪垂れて素その如し

(註) 琪樹とは宝の実る樹、仏教で宝とは摩尼宝珠のこと、

石橋とは此岸より彼岸(仏の国)に渡る橋。素とは白糸。

右は中国の聖僧寒山の詩でありますが、彼が悟りの究極にある摩尼宝珠といわれるものの実体の自覚をいかに渴仰し、それに達し得ない自分を歎いていたかを示しています。「五十年一字不説」。釈尊は五十年間説教をしたのですが、実は仏の実体の真理の存在を説いたのであって、真理そのものは一言も説いたことがないといいました。皮肉にも仏教からは仏は現われることはありません。仏の護持する究極の真理それは五十音言靈の原理なのです。

そこで言靈工、次元にある仏教の菩薩位に二種類あることをお話しましょう。一つは因位の菩薩といい、もう一つは果位の菩薩と呼ばれます。因位の菩薩とは法華經に出てくる淨行・上行等の菩薩がそれで、先に説明しましたように自らは本性である宇宙意識の自覚をもち、さらに業苦に沈んでいる他の大勢の人を救わんと努力し、その努力の結果、究極において人間精神の完成体である仏をめざす人であります。その救済の行の心の運び方についてはすでに父韻の配列でお話しをしてみました。

次に果位の菩薩とは觀世音・普賢・勢至等の菩薩が有名で、因位の菩薩とは違ってすでに仏の位に住まわれたその仏が衆生済度のため下生してきた菩薩のことをいいます。この菩薩の救済の心の運び方であるイ・チ、キ、ミ、ヒ、リ、ニ、イ、シ、フの配列の実際は因位の菩薩のそれとは全く違ってきます。宇宙即我の自覚によつて母音イが確立していることは因位の菩薩と違いはありません。相違は次の第一の父韻チのところ做起ります。因位の菩薩においてチは単に宇宙自体が直接現象として現われる韻であり、全身全霊というほどの意味でありました。ところが果位の菩薩とは既に仏の位を得た人です。この菩薩は宇宙全体を既に五十音言霊として把握しています。それゆえ父韻チは単に宇宙全体とか全身全霊とかいうだけでなく五十音言霊特に菩薩の次元である言霊エの次元の規範である天津大祝音図として現われます。精神宇宙に起こるいかなる現象もこの精神の究極規範である五十音の鏡の前に偽りのない実相となつて写し出されます。それゆえに、次に続く主体客体の実相であるキ、ミは五十音の鏡に照らされてその時所位が決定的に見定められます。主客の実相が明らかにされれば、この二つを統合して新しい創造はどんな形をとるかはおのずと言霊図に基いて決定されます(ヒ)。言霊のうえで決定された言葉は一般の世間の言葉の世界に拡大され(リ)、行動の名分が定まり(ニ)、行動が起こり(イ)、結論として終結に向かい(シ)、結果が事実として確認されます。半母音フが成立します。

人間の精神進化の最終段階は言霊イ次元です。五十音言霊の世界です。その五十音言霊図を心

の鏡として言靈エ、次元の選択創造の心の運び方を会得しますと、人間社会・人類文明を運営してゆく最も確実な手段・方法をいつも明示することが可能となります。

そして重要なことは、この、仏教で比喩的にいうところの果位の菩薩の衆生救済の心の運び方の図式が、またとりも直さず、私達が言靈子音を自覚確認するための方法・手段でもあるのです。もちろん私達は仏陀ではなく、五十音図が心の中に確立成就しているわけではありません。けれども先に検討しましたごとく、父韻チ、キミ、ヒリ、ニイシ、のそれぞれの生命意志の活動のリズムについて知っています。また父韻がチ、キミ、ヒリ、ニイシ、と並ぶ心の運び方とは、いま、この一点における社会的創造に言靈ウ、である欲望と、言靈オ、である概念的探求と、言靈ア、である感情面とを、どのように選(エ)、らんで運営していけば理想的社会を実現し得るかの運用法を示しているのだということを知っています。ですからいま社会的に創造活動を起こそうとする時、心に自分が学び覚え知った限りの五十音図を行動の鏡として掲げることです。このことを古事記では「つきちるふなどのかみ衡立船戸神」と神様の名前で呪示しています。五十音図を神道では御船代といいます。五十音図を心の戸として齋立いっきたて(衡立)よとの意味です。そのうえで主体と客体の実相を明らかにし、キミ、双方を総合する言葉と言靈のうえで検討し(ヒ)、その言靈での言葉を拡大させて(リ)、行動の眼目(ニ)ができて上り、行動として動き、結論が確定(シ)する。このような、一般にいう

天津太祝詞音図

ワ	サ	ヤ	ナ	ラ	ハ	マ	カ	タ	ア
ヰ	シ	イ	ニ	リ	ヒ	ミ	キ	チ	イ
エ	セ	エ	ネ	レ	ヘ	メ	ケ	テ	エ
ヲ	ソ	ヨ	ノ	ロ	ホ	モ	コ	ト	オ
ウ	ス	ユ	ヌ	ル	フ	ム	ク	ツ	ウ

言靈工次元

道徳・政治または個人的な選択行為の実行の中に、言靈子音は一つ一つ内観自覚されていくのです。すなわち言靈ウ、次元にある欲望を主体とする人との対応行為の中にツ、ク、ム、フル、ヌ、ユ、スの八子音が、次に言靈オ、次元に住む概念的探求をこととする人に対する行為の中にト、コ、モ、ホ、ロ、ノ、ヨ、ソの八子音が、また言靈ア、次元にある感情を主体とする人に対する創造行為のうちにタ、カ、マ、ハ、ラ、ナ、ヤ、サの八子音が、それぞれ、言靈エ、段に立って救済行為をする主体の側の心の中に心に焼き付けられるがごとく自覚されてくるのです。と同時にこれら三種の対応行為の自己の内面の実相としてテ、ケ、メ、ヘ、レ、ネ、エ、セのエ、段の子音をも確認することができます。この合計三十二子音の自覚の成就が人間精神の理想体系の実現であり、仏教でいう仏陀、キリスト教の救世主、儒教の「心の欲する所に従って矩を踰えず」の出現を意味しています。

## 言霊原理による創造について

母音・半母音・父韻・親音・子音を心に自覚確認した創造行為とは、どんな効能を発揮することができのでしょうか。物質構造を究極的に明らかにする物理学で喩えてみましょう。物質宇宙を分析していったら、もうこれ以上分けたらその物質そのものでなくなってしまうところまで進みますと、物質の最小要素としての元素に到達します。それ以上に分析が進みますと、物質そのものを構成している先天構造である電子・原子核さらには陽子・中性子……等々、素粒子の世界に入ります。そこでいま原子核内の素粒子のすべての構造、性質、エネルギー等々が明らかにされ、物質とはいかなるものであるかが解明されたとなるとどういうことになるのでしょうか。この世に存在するすべての物質の合成、分解が可能となり、その物質間の化学反応は手に取るごとく予測されることになりましょう。手にとって見られる試験管の中の反応はもちろん、極微から全宇宙大にわたる物質現象はことごとく把握解明される可能性が開かれることになりました。

言霊母音・半母音・父韻・親音・子音という精神の先天・後天要素を把握・自覚することは、

右に物質的な比喩として述べたように人間精神内のすべての現象に対してその構造・性能の解明、経過、予測等々を可能にします。日常繰り上げられる目の前の生活から産業・経済・教育・芸術・宗教・道徳・政治等々社会のあらゆる現象について、また世界の混乱する国際情勢の適確な把握・予測・方策に到るまで、掌の上にあるものを操るごとく処理することを可能にするでしょう。

言霊の原理は一切の霊的現象に対しても真相を明らかにし真偽の判断の基礎となりましょう。さらに社会のあらゆる主義・主張・論説等についても人間精神の根本の立場からその長所・欠点の指摘、アドバイスとその見通しを明示することが可能です。そして最終的に人類歴史の進むべき方向・方策やその転換点の率直にして明細な実行可能の道を提示することも可能でありましょう。

三千年以前世界は言霊原理を中心に精神文化の華が咲いていました。これを人類の第一文明の時代と名付けることができます。次にこの精神文化の精髓である言霊の原理を故意に隠没する政策が執られました。物質文明を急速に発展させるためです。爾来三千年間、弱肉強食一色の世界となり、その中から物質文明は現在あるがごとく発達しました。これが人類の第二の文明時代であります。この物質文明の発達の末に人類は目も眩い物質的繁栄に恵まれると同時に、一步誤まれば人類絶滅の危機に直面せざるを得ない事態をも招来しました。この時第一の文明の根本原理であった言霊の原理が人間の潜在意識の奥の奥から不死鳥のごとく甦ってきたのです。人類は、

いまから、第一の精神文化と第二の物質文明を車の両輪としてそれを総合した第三の文明の創造時代に入ることになります。二十一世紀は人類の新紀元第一世紀でなければなりません。しかしながら第三文明時代に入るためには、どうしても現在の人類の危機を乗り越えねばなりません。そしてそれがための唯一の方法はやはり第一の文明の根柢である言霊原理の復活とその体得以外にはありません。

言霊母音・半母音・父韻・親音・子音の自覚による言霊工の運用者の出現が切に望まれます。それが各宗教が予言してきたキリストの復活、仏陀の下生の真の意義なのであります。私はいままで言霊とはどういうものか、またそれを理解し、その原理に則って行動するにはどのような勉強が必要なのか、いわば言霊の本論としてお話してきました。この本論の大筋をご理解頂いたこととして、これからは言霊の原理から見ると現在の世界・社会はどのように解釈されるのか、社会の混乱の解決はどの方向に求められるべきか等についてお話を進めていくことにいたします。いつてみれば言霊原理の応用問題といえます。先に昆虫の成長進化のことをお話しました。幼虫から蛹に、そして羽化して成虫となります。人間については羽化登仙という言葉があります。昆虫の幼虫・蛹の時代はいつてみれば人間の言霊ウ・オの次元段階です。羽化して初めて言霊アの宇宙へ自由に飛び出す段階に入ります。そして言霊エ・イの次元が「登仙」の言葉がびつたり当てはまる段階といえましょう。仙人とは実は隠遁者のことではなくて人間が人間を知っている人

という意味です。昔仙人のことを山人やまびとといいました。山とは古代八間やますなわち八つの間を意味しました。八父韻の意味です。人生を言霊で捉えることのできる人のことでした。事物を言霊ウ・オの次元で見るとよりは、言霊ア・エ・イとさらに観点を上げてまたは観点を深めて見る方が、ずっと大局的にそして正確詳細に解釈することができましよう。

まず言霊の観点から現在の世界の危機はいかに解釈され、どんな解決方法が提示されるでしょうか。この命題こそ実は言霊を社会に紹介しようとするこの本の主たる目的であるのですが、それを正確にご理解頂くためには言霊に関するすべてが理解の下敷きとならねばならず、さらに多くの説明をつけ加える必要がありますので、ここではその根本解決に到る大筋のみを記すことにします。

人間は現在の状況にいかに対処すべきかを決定するためには、現況が過去よりどのような経緯いきさつでかくなつたかを知らねばなりません。つまり人類が直面する危機を招来した世界歴史をあらためて調べることです。ところがここに問題があります。人間は事物を想定研究する場合、常に自分の経験・知識を拠りどころとします。歴史の研究についても同様です。歴史の著者の知識が人間の持つ性能の全部を盡していない場合、その人の書いた歴史書はまた偏頗へんぱなものとならざるを得ません。現代に流行する歴史書を読みますと、その論旨が人間の全性能である言霊ウ・オ・ア・エ・イ五段のうちのたかだか最初の言霊ウとオの二段階だけから全歴史事実を垣間かいま見ているに過

ぎないのです。そこには言靈<sup>ア</sup>である魂の自由飛翔もなく、いわんや言靈<sup>エ・イ</sup>である道德の自由選択も言葉の根源原理も見当りません。それゆえに過去の世界に関して、また日本民族に対して、歴史的に大変な見落しや誤りが生じました。

一、現代は物質科学文化の華咲く時代です。これに目を奪われて、古代は文化の發達のない野蛮時代だったと思いがちです。大変な錯覚です。確かに古代は物質科学的には貧弱であつたでしょう。しかし紀元前数千年以前に永年の研究を要したと思われる人間精神の根本構造を示す言靈の原理が発見確立され、その原理に基いて古代大和言葉の日本語が制定され、現代人の想像もできないほどの立派な精神文明の華が咲き、世界はその原理によって統一されていたのです。「世界は一つの言葉なりき」でありました。

一、世界数千年にわたる歴史は、各民族・各国民の恣意的活動の總合体に過ぎないように思われています。違います。表面テンデンバラバラの恣意的行動のごとく見えながら、実はその根底に極めて大局的な意志と合理的原理によって統轄された、一定の目的と綿密な計画をもって推進されつつある全人類の一大ドラマ、それが世界の歴史なのです。そして現在刻一刻進行している世界の歴史の根底に古代より連綿と続く意図が働いています。この歴史創造の意図を経緯と呼ぶのです。

右のことを指摘したうえで言靈原理に基いて人類数千年の歴史の概略を書いてみましょう。

一、数千年ないし一万年近い昔、たぶんヒマラヤ付近の標高の高い地方において、賢者のグループの永年の研究の結果人間精神の究極構造が解明され、その要素が言霊五十音と規定された。そしてこの原理を基礎として古代大和言葉の制定となった。その賢人グループの代表者がこの原理による理想社会を建設する目的で平地に下り、日本に到着した。日本の建国である。その国の責任者をスメラミコトという。言葉を統一する者、の意である。

二、スメラミコトは言霊の原理に則り、文字その他の文化を創造し世界各地に広めた。武力のみでなく、光と徳による世界の統一と文明の創造の時代が続いた。人類精神文明の華咲く時代である。古書はこの時代の王朝を、邇邇芸、日子穗穗出見、鵜葺草葺不合の各王朝時代だと伝えている。それは一人の人間の名ではなく、幾人もの天皇が続く王朝の名である。ちょうど神武天皇より現在の裕仁天皇まで百二十四代を神倭朝かんやまとというごとくである。なお鵜葺草葺不合とは、ウの家屋すなわち科学がまだできあがっていない、という意味である。

三、三千年ないし三千五百年ほど以前、代々のスメラミコトの政治の方針が変更された。人類の第一の文明である精神文明に次ぐ第二の文明としての物質文明特に科学文明の発達を促進するための方策の採用である。そのためにはまず第一の精神文明の根本原理である言霊の原理を隠没して、人類の言葉を乱し、人間の表面性能である言霊ウ・オ・ア・エの四性能が統一されることなくバラバラに働くことによって、弱肉強食の世界をつくり出すことが一番の早道である。それ

ゆえ世界は言霊ウとオの、すなわち欲望と経験知の、他の人間性能をおしのけた独走である権力闘争の時代が始まった。

精神原理の隠没の方策は、外国ではイスラエルのソロモン王の時の三種の神宝の喪失がそれを示し、日本においては神武天皇の神倭王朝の創立ならびに崇神天皇の時代の三種の神器と天皇との同床共殿の制度の廃止の事実が明瞭に示している。爾来三千年間、暗黒の闘争、戦争のくり返しの時代、その勝利者となるがための物質的優位を保つ目的の科学研究が促進されてきた。

四、この暗黒の三千年の期間、物質科学が一応の成果を挙げる（その責任者を古事記は須佐男命という）まで、またその成果があがつて再び第一の精神文明が人類に甦える時の用意のために種々の方策が決定された。

A、この時代の主要目的である物質科学の進歩の責任を担うものとして西欧民族特にユダヤ民族が選ばれた。

B、言霊原理の隠滅の代用として、また再びそれが世に現われる時の精神的用意として、各種の宗教・哲学が創設された。この担当地域は主として東洋である（言霊の太陽に対して、その光を反影するものとして古事記は月読命という）。

現存の世界の大宗教はみな右の目的のためのものである。

C、やがて甦えるべき言霊原理を比喩、呪物、型式等によって伝統として伝えるために、

わが日本において種々の方法が実行された。

イ、言霊原理によるスメラミコトとしてではなく、国民信仰の対象者としての日本皇室の存続が計られた。その内部特に賢所の儀式の数々の「型」に言霊の意義が表徴されている。

ロ、言霊原理の比喩、呪示としての古事記・日本書紀の神代巻の制定である。その内容である神話とは神の話ではなく、神の名の呪示による言霊原理の話である。

ハ、二十年ごとに遷宮の規定ある伊勢皇太神宮の建立。その内宮の本殿の建築様式を唯一神明造という。その社殿の構造自体がアイウエオ五十音言霊図の構造そのものである。

かくて、時到来り第二の物質科学文明があるところまで成果をあげ得た時、甦える第一の精神文明の原理である言霊原理の担当責任者は当然わが日本民族である。その責任者は少くとも日本語を話す人の中から現われることは明瞭である。

右が人類の八千年ないし一万年と推定される歴史の骨子であります。詳しい説明は多くの紙数が必要としますので他の機会に譲ることになりますが、このような歴史を背負った私達日本人は世界の現状にどう対処したらよいでしょうか。歴史創造の原理の伝統を受け継ぐ者として、言霊

の原理を完全に復活させ、自覚することが急務でありましょう。

この三千年の間、西洋は物質科学を中心とした帰納的学問の追求にひたすら従事してきました。古事記のいわゆる須佐男命の思想体系（八拳の剣）の実行者です。一方東洋は月読命としての体系（九拳の剣）である「言霊原理の投影」の宗教哲学を後生大事と護って永い貧困の生活を続けて来ました。この二者はどこまでも平行線を辿る互いに相容れないものとしての関係にあります。この三千年の統一のない闇の世に天照大神の十拳剣である言霊原理の世界への再登場が実現するならば、人間の持つことが可能なすべての思想体系が完全に出揃うこととなります。このことは人類史にまだかつてなかったことであり、人類史における新しい夜明けです。人類は初めてその具有する性能のすべてをみずからのもとし、自由にその未来の目的 大神神社鳥居 に向かって操作することができると迎えることとなります。科学の莫大な生産物を人類の真の福祉のためにコントロールできる人間精神の統一成就です。各宗教、神話が予言する新しい人類文明建設の始まりです。人類文明の第三期時代が始まります。

このことに因んだ話をしましょう。奈良の桜井市に大神神社おおかみがあります。大三輪とも書きます。この神社の鳥居は珍しいことに図のごとく三つの鳥居が横に連なっています。鳥居の鳥は先に説明がありましたように十理との意で、

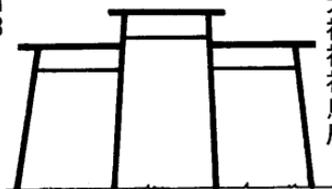


図 28

鳥居とは五十音言靈図を表わします。言靈ウの金木音図（建速須佐男の命）と言靈オの赤珠音図（月読の命）を左右に従えて、真中に言靈エの天津太祝詞音図（天照大神）が確立された第三文明時代の人類の繁栄の原理を予告表徴したお宮なのです。三つの輪とは第一・二・三文明時代発展の様相を呪示しています。

しからば言靈の原理から見て、今後の世界・日本はどう変っていくでしょうか。米ソ対立による世界の危機は回避されるのでしょうか。日本民族の将来の世界の中での役割如何。第三文明時代の出発点となる時如何。このような現実の問題に対する具体的な見通しとその対策については、ここでは書くことを差し控えます。その詳細な解説には優にこの本一冊分位の紙数を要しましうし、世界や日本の将来に関心と憂慮を懐く人が言靈の原理を体得し、それによって現代の歴史を詳しく見直すならば、おのずと把握理解することが可能なことでもありますから。言靈の勉学を抜きにして新文明創造への責任をみずからに課すことのない歴史の傍観者には、将来への具体的予言はまったく無用であることを、言靈原理自体が教えていることでもあります。

法華経は言靈を表徴する摩尼宝珠を「その価大千三千」と尊んでいます。その真理の価値は大千三千すなわち宇宙と同じだということです。魂の求道と模索の遍歴の末に、人類が直面する現在

の危機を解決する鍵がこの言霊原理より他に存在しないことを知った人は、速やかにこの言霊の門をご自身の心をもって叩かれんことを切望します。あいともに勉学と修練に励もうではありませんか。

## 古事記と日本書紀

これまで言霊の原理、運用法、その修得の方法等について極めて簡単に説明してきました。心を内面に省みてその内容を探ることに馴れない現代人にとって私の説明は詳細を盡したとは言いません。説明不足の点の補足は他の機会に譲ることとして、ここでは本論で説きかけてそのままになっている事項を補足附加することにいたします。その初めは古事記と日本書紀についてであります。

古事記と日本書紀はそれぞれ奈良時代のおおよそ同じ頃編纂されました。そのおのおのの神代の巻は共に神話の形を用いた言霊原理の手引書です。ところが古事記と書紀の冒頭には顕著な相違があります。いまその最も重要な相違点について説明しましょう。古事記に最初に現われる神名は天之御中主神であるのに対し、書紀では国常立命です。古事記では国常立神は六番目にでてくる神名です。また記紀では神と尊かみ(みこと命)の違いも眼につきます。天之御中主神は言霊ウ、国常

立神は言靈工でありました。古事記では、先に書きましたように人間の頭脳中の意識の自覚の順序に従って、心の先天から後天の現象が生まれるまでの消息を言靈を示す神の名前をもって呪示したのでした。国常立神言靈工とは、天之御中主神言靈ウが意識の中に生まれ、それが高御産巢日、神産巢日（ア・ワ）である主体と客体に分かれ、その分かれた対象を記憶である天之常立オの中からその中の何を規定すべきかを選ぶ働きであると説明されました。この古事記の叙述の場合、神の名前とは実体である言靈の説明概念に相当します。古事記は意識の実体である言靈が生まれでてくる内容の構造と法則の説明書です。

これに対し書紀の記述が神を使わず命を用いているのは何のためでしょうか。言靈工の選ぶと  
いうことの具体的な行為は、言靈ではどのように現われるかを考えてみましょう。まず行為の創造意志言靈イ（イ）が発動します、その意志の展相すなわち実際の姿はヒ、チ、キ、ミ、リ、イ、ニの八父韻です。父韻とは主体と客体とを結んで現象を創造する韻律リズムです。いかなる行動をするかを規定し選ぶということは、実際には主体が客体に対して結びつける八つの父韻の端緒から結論に至る順序をどのような配列にするかの選定であります。言靈ウの人の場合はツ、ク、ム、フル、ヌ、スを、言靈オの場合はト、コ、モ、ホ、ロ、ノ、ヨ、を、そして言靈アの人の場合はタ、カ、マ、ハ、ラ、ナ、ヤ、サを選ぶということになります。

大和言葉の命とは言靈を自覚した御言であり、それを自覚遂行する人間そのものをも表現しま

す。ゆえに古事記は言霊を意識の自然発生の順序と法則として説き起こし、日本書紀は、その言霊法則を知った人が、一人の人間として、同時に神道でいう命みこととして、仏教でいう仏の化身である果位の菩薩として、キリスト教のいわゆる降臨の羔羊として、創造する行為の内容を言霊をもって説き起こしているということが出来ます。古事記の神と書紀の命との相違は以上の通りであります。

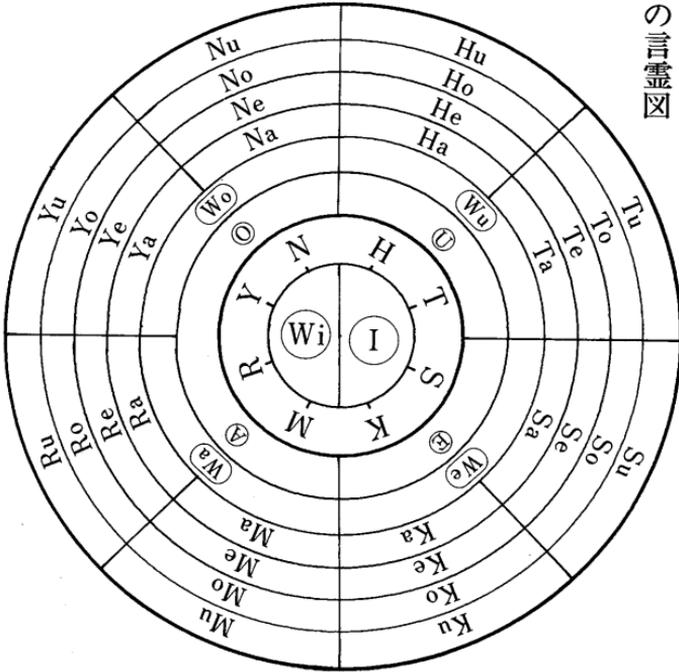
人類は休むことなく文明を創造しています。その創造の根源主体すなわち創造主は言霊イ・中（親音）であり、神道では伊耶那岐神・伊耶那美神と称します。この二神の創造意志が動き、その展相であるヒチシキミリイニ八父韻がウオアエの四母音に呼びかけることによって三十二の子音（現象）が現われます。次にこの創造意志が現象を生む人間精神の具体的構造を言霊をもって示す図を掲げておきましょう。いわば言霊講義の結論図ということが出来ます。（図29）

### 濁音と半濁音

人間の心は全体で言霊五十音であるというと、それでは濁音二十と半濁音五はどう理解すればよいかと質問されることがあります。簡単な説明を追加しておきましょう。

五十音言霊そのものとその法則のことを神道で布斗ふと麻邇まにといっています。太占うらなひと書くことがあり、占

八咫鏡の言靈図



小笠原孝次氏著『言靈開眼』より引用

の意味に用いるが、これは真の意を盡してはいません。言霊の原理が隠没した後、人間社会の運営をどうするかの原理がなくなつたため、それを象つて呪示の方法で吉凶禍福を占つたのがうらないです。布斗は二十の意味。麻邇は言霊のこと。五十音言霊からそれを代表する言霊を抜き出すと二十となる。カ、サ、タ、ハの各行の計二十音がそれです。なぜこの二十音が代表となるのかというと、言霊五十音から純粹主体の五母音と純粹客体の五半母音とを除くと四十音となります。この四十音は陽性音・陰性音に分けられる。カ、サ、タ、ハの行二十音が陽性音、ナ、マ、ヤ、ラの行二十音が陰性音です。陽性・陰性はどうして分かれるかは言霊父韻の説明を参照して頂きたい。カ、サ、タ、ハ四行二十音が理解できると五十音言霊はすべて自覚できる。そのためにこの二十音をもって五十音が代表されるのです。神道では神社参拝の折り、拍手は二回です。両手十本の指二回、拍手の音計二十。神である二十音言霊を表徴しているのであります。

この二十音は陽性積極音であつて、海の潮でいうと潮が満ちていく音ということができません。古事記では塩盈つ珠と形容しています。その満ちていく動きが完了した姿を表徴して陽性音に濁点が附くのです。それゆえこの二十音だけに濁点がつけられることにもなります。

では半濁音とは何なのでしょう。濁音が陽性の二十清音の表出が完了した時を表わす音であるのに対し、半濁音とは子音である清音が成立する以前の先天におけるキツカケを示すということができません。完了した姿に濁音を付すというならば、半濁音はむしろ反濁音または半清音と呼

ぶべきでありましょう。半濁点が付されるのはハ行だけです。ハ行は、それを生む父韻ヒが言葉として表面に完成させる韻でありますから、端的に言えば父韻の働きそのものを表わすので半濁音ということができません。だから電燈はパツと灯るし、ピアノはポンと鳴るのです。鳴る音はハ、ヒ、フ、ヘ、ホであり、鳴った音はバ、ビ、ブ、ベ、ボであります。

## 神代文字

いままで言葉のことばかりお話し、文字のことはなぞりにしてきました。しかし現代の言語学者が言うように「古代には文字は存在しなかった」というのではありません。立派な文字が存在しました。古事記の神代巻では言葉のことを大山津見神（言靈ハ）と神名をもって呪示しています。山津見の山は八間やまのことで八父韻の働きのことです。津は渡すことつの意。見は現みわれるの意です。山津見とは八父韻の働きが出て現れるもの、それは正しく言葉ということですから。八間の働きを図形化するととなりません。この図形ハの原則に基いて、図形の一部を取って作ったのが大八島文字またはあひる文字または対馬文字といわれる代表的な神代文字の一つです。石上神宮の十種とくさの神宝かんだからの中の蛇の比礼ひれ、百足むかでの比礼、蜂の比礼、種々物くさくさの比礼とあるうちの蜂の比礼とは右の大八島文字のことだと推定されています。比礼とは、霊が顯る、の意です。大八島文字の

# 大八島文字

(あひる文字・対島文字)

アイウエヲ

ワ	ラ	ヤ	マ	ハ	ナ	タ	サ	カ
㊦	㊧	㊨	㊩	㊪	㊫	㊬	㊭	㊮
								丨
								┘
								┘
								┘

イウエオ五十音図を上に表示しておきます。(図30)

神代といわれる古代におきましては、時代時代で種々の文字が種々の原理に則って考案されたことが古代の碑史に書かれています。古事記に「正鹿山津見神・淤騰山津見神・奥山津見神・閼山津見神・志芸山津見神・羽山津見神・原山津見神・戸山津見神」と書かれている八つの山津見神は、それぞれ制定原則・方法の異った文字のことを呪示したものであります。

龍形文字と呼ばれる神代文字もあります。蛇がのたくっているような形の文字で、五十音のそれぞれの単音が持つ心の波動形を感得して文字に現わしたものです。これは日文章文字と呼ばれ、古歌に「道奥みちのくのしのぶ文字刷り……」と詠まれていますから、道の奥すなわち言霊を靈的に感得する根拠となる文字という意味でありましょう。

以上古代神代文字のことを簡単に紹介しました。詳しい解説は今後の研究にまたねばなりません。しかし古代日本

には、中国からの文物の輸入があるまでは文字は存在せず、いわゆる神代文字なるものは後代の国粹主義者の捏造であるとする現代言語学者の説は全くの暴論です。古代において心の全構造の解明とその原理に基いた日本大和言葉の厳密な制定の事実来接するならば、その原理の図形化より作定した神代文字の存在も疑う余地のない事実として浮かびあがってくるであります。

〔「言霊」本論終了〕



言靈學隨想



私が言霊学の先師小笠原孝次氏と初めてお会いしたのは昭和三十八年のことであつた。爾来十数年間言霊学について教えを頂いた。師既にこの世にはない。當時を偲びつつ、時折教えて頂いたこと、またそれについて日頃考えていることなどを随筆の形でまとめて見た。

次にそのうちの数編を載せることにする。

## 日ひ文ぶん

誰でも知っているいろは四十七文字は、重複することなく五十音を使って、人間人事の現象からその現象の根元の宇宙へ帰る道を、仏教でいえば、実相から空相への悟りの道を、説いたものである。一般に弘法大師の作といわれるが実はもっと古くからあつたものようである。簡単に説明すると次のようになる。

いろはにほへとちりぬるを 諸行無常

この世にあるものはすべて変転極まりないものである。

わかよたれそつねならむ 是生滅法

これがこの世にあるもののあるべき姿なのである。

うるのおくやまけふこえて 生滅滅已

これはかかないものに執着する心をなくしてしまえば

あさきゆめみしゑひもせす 寂滅為樂

生死輪廻の起こらない悟りの境地に入り永遠の樂しみの世界に住することができる。

この「いろは」に対し、あまり人に知られていないが、大和石上神宮いそのかみに伝わるひふみ四十七文字というのがある。これも重複することなく五十音を使って人間生命の重要な働きを示している。

ヒフミヨイムナヤコトモチロラネシキルユキツワヌソヲタハクメカウオエニサリヘテノマスア  
セエホレケ

これを石上神宮の「布留ふるの言本こともと日文四十七文字」と呼んでいる。少なくとも三千年近く同神宮に伝えられていることが知られているが、幕末の平田篤胤による神靈的解釈一片があるほかはその意味がまだ不明であった。しかし解明された言靈の原理によるとき、その意味は余す所なく明らかとなる。いまよりその説明に入ることによろう。

ヒフミヨイムナヤコトモチ

一二三四五六七八九十のこと。ただしただの数字ではないことはもちろんである。言靈学的に十というときは、横に十の言靈が備わった音図すなわち母音である純粹自我の主体性が確立され、同時に一念のうちに半母音である結論も完備され、その双方の間に八父韻が揃っている音図すなわち「天津太祝詞音図」のことである。古神道では十拳劍とつかのつるぎと呼んでいる。モチとは、百千もぢを当てはめる人がいるが、この場合は「もつて」が正しい。「人間精神の最高の規範である天津太祝詞音図の横の十箇の配列すなわち自覚確立された主体と客体の双方を結んで現象を起こさせる八つの父韻原律をもつて」という意味となる。

ロラネシキル

ロラらの音を仕切るの意である。ロラらの音とは何なのであろうか。ここで古事記神代卷の伊耶那岐・美二神の子産みの章を引用することにしよう。岐・美二神とは人間生命の創造意志のことである（本論参照）。古事記でいう「天津神諸の命」あまつかみもろもろのみことすなわち人間精神の先天構造である五段階の天津磐境の活動が始まり、次々と現象の最小単位である後天三十二子音を生んでいく。その順序は、古事記の神名に五十音の単音を当てはめて書くと、大事忍男神おほことおしおのみかみ || 言靈夕かみに始まって大宜都比売神おほけつひめのみかみ

|| 言靈<sub>コ</sub>に至るまでタ、ト、ヨ、ツ、テ、ヤ、ユ、ケ、メ、ク、ム、ス、ル、ソ、セ、ホ、ヘ、フ、モ、ハ、ヌ、ラ、サ、ロ、レ、ノ、ネ、カ、マ、ナ、コ、の三十二子音である。これで天之御中主神 || 言靈<sub>ウ</sub>より伊耶那美神 || 言靈<sub>ホ</sub>までの先天十七音と後天の最小単位である三十二子音、それに字を表わす火<sub>ハ</sub>之<sub>ノ</sub>迦<sub>カ</sub>具<sub>ツチ</sub>土<sub>カミ</sub>神 || 言靈<sub>ン</sub>を合わせて五十音の全部が整ったこととなる。精神宇宙はこの五十箇の言靈ですべて完結する。実在として宇宙にはこれ以外の要素はない。

ここで熟考を要することがある。人間の精神活動というときわめて複雑多岐に涉っている。しかしこの精神活動を最も単純にコンパクトに縮少したら次のように言うことができるであろう。

まず人間の頭脳内に何かが起こる。先天構造の活動である。それが次第に具体化し、遂に現実の言葉としてまとまり、口より発音され、空中をその声が渡って再び人間の（自分でも他人でもよい）耳に入り、検討されて了解に達し、一つの事実を形成して人間の先天的部分におさまって終る。これだけで全部である。この、一瞬ともいえる短時間の精神活動の一循環の中に宇宙の全要素が備っていることができる。

古事記の子生みの章には大事忍男神以下神々の名が次々に出てくる。それだけでは全く何の意味があるのか分からないけれども、古事記神代の巻が言霊原理の教科書であり、子生みとは子音の理解のための章であることが判ると謎は次々に解けてくる。

古事記神代巻の子生みの章に出てくる三十二の神名に三十二の子音をそれぞれ当てはめること

は一個人の能力では不可能に近い難問である。一人の科学者が物質の元素を全部発見確認するの  
と等しい事業であろう。けれども長い間宮中賢所に秘藏されて、明治天皇の時以来次第に民間に  
流布されたといわれるこの古事記の神名と三十二子音との照合を實際に受け入れてみると、その  
合理性に驚嘆せざるを得ないこととなる。日本の大和言葉とは、その精神構造の最奥の原理によ  
って合理的につくり出された言葉であることがいまさらのごとく了解されるのである。この子生  
み三十二神の神名にそれぞれ子音を当てはめて精神宇宙の一循環を图示したのが図31である。人  
間が一つの言葉を発するのに精神の全宇宙の活動があることを確認することができよう。(140頁)  
本題に戻ろう。ロ、ラの音とは図31で見ると、一度発音され空中を飛んだ音が再び耳の中に入っ  
て来たところの音であることを示している。「ロ、ラ、ネ、仕切る」とは、耳に飛び込んで来た言葉を、  
天津太祝詞音図の父韻の配列の順「イ、チ、キ、ミ、ヒ、リ、ニ、イ、シ、キ」で仕切つて見よということである。

### ユ、キ、ツ、ワ、ヌ

ユ、キは結え。ツ、ワのツとは図31にあるごとく先天が活動を開始し次第に具体化し全身全霊の躍  
動で夕と姿を現わしたものが、ト(十すなわち人間性の全体)とヨ(漢字を当てはめると世すな  
わち社会通念)の二つの篩ふるいを通して「ツ」と出てくる音である。ワはもちろん結果を意味する(以  
上本論母音父韻の項参照)。ヌは貫ぬで横を意味する。以上で、言葉の意味を最初から結果を順に横



に結べ、ということである。かく並べて見ると耳に入ってきた言葉の真の実相がよく了解されることとなる。

ソヲタハクメ

タハとは田すなわち言靈図の言葉の意。それを言靈図に示される言靈をもって組めということ。

カウオエエサリヘテ

伝わってきた相手の言葉を言靈ではつきりと順序よく組んで実相が判明すると、それに対する答えが心の中に焼きつくごとくに「カ」と浮かび出て来る。その答えをウ、オ、エすなわちウ、(欲望)オ、(経験知)エ、(創造叡智)の三つの次元に區別しての意である。

ノマスアセエホレケ

エとは天津太祝詞音図で判断した創造選択智の結論。アセとは言靈ア段の瀬。言靈図の横の配列は生命の川の流れて瀬といわれる。無限宇宙の自覚に基いた愛情慈悲の心の流れ。ホレケに漢字を当てると秀列気、すぐれた列の気。そこでノマスアセエホレケとは愛と慈悲の心で創造のた

めの結論を言葉の筋道がすつきり通るように宣べよ、ということになる。

以上を全部まとめて見ると

「天津太祝詞音図を鏡として相手の言葉を審判・判断して、その内容を言霊にまで還元して実相を余す所なく把握し、そのうえで相手が新しい創造の生命を得られるように、ウ、オ、エの各次元を混同することなくはつきりとその行く道を宣べ指示せよ」ということである。

このように判明してみると、日文四十七文字は本論で述べた父韻の配列と人間の心の持ち方の項で説明したごとく天津太祝詞音図の横の配列ア・タ、カ、マ、ハラ、ナ、ヤ、サ・ワ（イ・チ、キ、ミ、ヒリ、ニ、イシ・ホ）と全く同様の意味であることに気付かれるであろう。日文四十七文字はア・タ、カ、マ、ハラ、ナ、ヤ、サ・ワの心の操作をさらに詳しく言霊をもって説いた文章であるということができる。言霊原理が隠没されなかった時代においては、日文四十七文字は呪文でも比喻でもなく立派な文章であつたわけである。

精神宇宙にはたつた五十の要素しかない。この五十の要素を理解し、人間の行為の一瞬をこの五十音の躍動として見るができるならば、言霊の運用並びに創造行為は自由無礙に行われる。いろは四十七文字が現象からその根源の宇宙の自覚に帰る道（諸法空相）を解いたのに対し、日

文四十七文字は一度宇宙即自身を悟った後で、いかにしたらその自覚そのままに（ア、セ、エ）再びこの現象の世界に戻って活動することができるかの方法（諸法実相）を、言霊そのものを使って述べた文章であるということができよう。またこの心の操作の反復練習が言霊子音を自覚する方法でもある（本論参照）。このような言霊運用の靈妙さを古代人は言霊の早振り、言の葉の幸倍さちばえと呼んだ。

三千年来いやしくも日本神道に関心を持つ者なら誰でもその存在を知っていた石上神宮の布留こととの言本・ヒフミ四十七文字の謎はこのように釈けた。崇神天皇の同床共殿の制度の廃止以来、政治の実際の原理の地位から信仰の対象の器物となり下った八咫やたの鏡が、いま再び、人間のそして人類の行動の規範となる鏡の地位を取り戻した。日文の布留の言本の布留とは「振る」の意味である。何を振るのか。伊勢神宮の五十鈴である言霊五十音を振るのである。伊勢神宮は言霊五十音を祀る宮、石上神宮はその五十音の操作の方法を秘蔵している宮である。五十音言霊を振って「世界は唯一つの言葉なりき」の世界を再びこの地球上に創造することが日本民族の使命である。以上述べた文四十七文字の解釈を説明を添えて天理市の石上神宮に送った。大分以前のことである。しかし同神宮からはいまだに何の応答も来てはいない。

## 俳句と和歌

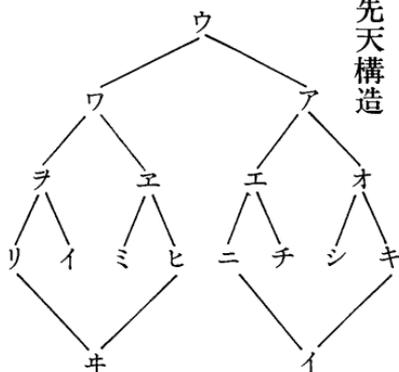
俳句と和歌を比べてみると、おのずとそこにニュアンスの違いがあるのに気付く。その相違の主点は何なのであろうか。字余りは別として俳句は十七文字であり、和歌は三十一文字ということになっている。この数字には何か意味があるに違いない。このような俳句や和歌の基本に関することを、日本大和言葉の原理である言霊学の立場から考えてみよう。

まず俳句であるが、俳句といえは大方の人の頭に浮かぶのは芭蕉の「古池や 蛙かむ跳びこむ 水の音」の句であろう。芭蕉はこの句によって俳句の精神を会得確立したといわれている。句を構成している事物といえは、古池・蛙・跳びこむ・水の音等日常何ら変哲もない言葉であり、意味は古い池に蛙が跳びこんでポチャンと音がした、というだけのことである。ところが「古池や 蛙跳びこむ 水の音」と十七文字にまとまると、不思議にも句に接した人をポチャンと蛙が跳びこんだその波紋の中心に引き入れて、広い広い宇宙空間から凝集して来た無限の波紋のごとく、あるいはその水音が長い長い永遠からの響のごとく、思わせ、感じさせます。この感じには神韻という形容が最もふさわしい。たった十七文字の句がどうしてかくも素晴らしい力を持つのか。俳句の十七文字表現が人間精神の根本構造と密接な関係があるように思われる。

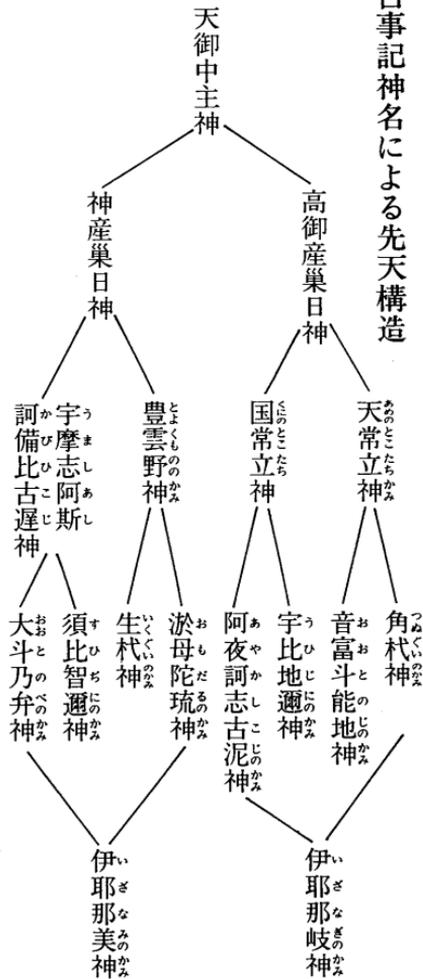
神韻とは、言外のまたは言葉の靈妙な韻のことである。「古池や……」と口を衝いて句が言葉にまとまって出てくる以前に、芭蕉の脳裏にはどんなことが起こっていたのか。もちろん本人以外の人の知る由もないことであり、本人自身さえ明確には解かっていたいなかったかも知れない。けれども句の靈妙な韻は、句としてまとまる以前の芭蕉の脳裏に起こったことが大いに関係していることは確かである。言葉として表出して来る以前の消息とは、人間精神の先天構造に関する。そこで心の先天構造についてあらためて考えてみることにしよう。(145頁図32、146頁図33参照)

図 32

言靈による先天構造



古事記神名による先天構造



古事記神代卷の冒頭の文を思い起して見る。「天地の初発の時、高天原に成りませる神の名は、天之御中主神。次に高御産巢日神。次に神産巢日神……」と続いている。この古事記の神代卷の文章は神の名の呪示による人間精神の先天構造を解いているものであることは前に書いた。「天地の初発の時」とは、精神宇宙の中にまだ何の意識も芽生えぬ、仏教のいわゆる空の世界のことである。この何もない宇宙に何かある存在の芽といったようなものが生まれてくる。古事記はこの存在を天御中主神と神名で示す。「宇宙の中心の主人公のごとき存在」といった意味であり、言霊

ウである。次にこの存在が純粹の主体と客体とに割れる。以下神名で示さず、直接言靈をもつて示そう。言靈アとワである。アは吾の意識の出てくる根源の世界であり、ワは汝の意識の出てくる元の世界のことである。アの世界は次に言靈オとエとに割れる。オは記憶能力の元の世界であり、エは記憶の中から言葉を選び出す能力の世界である。言靈アに対応する言靈ワはヲとエに割れる。ヲは記憶によつて連結される対象物の元の世界であり、エはその中から選択された事物が属する根源の世界のことである。以上のウ、ア、ワ、オ、エ、ヲ、エの七音言靈は先天構成の要素であつて、それ自体は決して現象として現出することはない。

次に割れ出てくるものは八つの父韻である。父韻とはウ、オ、ア、エの四母音宇宙に働きかけて後天の現象である子音を生むところの創造意志の原律である。母音に働きかけて現象を創造する「きっかけ」の韻またはスパークと言つたらよからう。この時創造のきっかけとなる八つのスパークがどんな順序で列ぶかによつて、その創造行為が欲望追及のものか、概念による学問行為か、芸術宗教活動か、それとも道德政治活動かが決定される(本論父韻の項参照)。俳諧活動は芸術行為であるから、八父韻はチ、キリ、ヒ、シ、ニ、イ、ミと列ぶ筈である。

父韻の次に親音イ・キが現出する。古事記神名では伊耶那岐・伊耶那美の二神である。頭の中で天御中主神から始まつて、現象としては現われない種々の経緯を経て、十六番目と十七番目の伊耶那岐・美一神に至つて「いざ」(去来)と人間の創造意志が働き、すべての現象が作り出され

ることとなる。十六夜と書いて「いざよい」と読むのはこのことが語源である。

人間精神の先天構造について本論のお復習さらいをしたが、人間のあらゆる行為・発言の以前に上述のごとく頭脳内に十七個の言霊の活動がある。言い換えるならば十七言霊をもって構成されている先天宇宙の全震動が起こって初めて人間の一举手一投足が実現する。そのことを自覚するか否かに関係なく現象出現のためには宇宙全体の活動が必要であることは真理である。しかし人間はその原則に盲目であることをやめ遂に自覚することによって最大限の力を発揮することができる。芭蕉は俳諧の道の幾多の模索遍歴の後に「古池や……」の句を得て、俳句を生む宇宙の芸術的振動の十七音のリズムの奥儀に到達したということができよう。古池やの五七五計十七音が先天七音言霊のリズムを美事に捉えることができたのである。俳句の精神の完成である。

もちろん芭蕉は言霊の原理の存在すら知ってはいなかったであろう。言霊隠没の時代が続いていたからである。にもかかわらず彼はその俳諧の道の探求によって宇宙先天十七音の震動と同様のリズムを把握することに成功したわけである。とすると芸術活動が先天十七音のリズムと合致するということはどんな状態であれば可能なのであろうか。一般的に言って二つの条件が考えられる。その一つは芸術的表現手巧の模索の末に、一旦はその手巧の壁を突破して、広い広い芸術の根源宇宙である表現に捉われることなき自由な境地に飛び出すことによってである。禪で、空と呼び悟りと称する純粹美の世界への透脱である。この世界においてははいわゆる色とは宇宙に漲みなぎ

る光の交錯であり、いわゆる音とは宇宙全体の震動が奏かなでる音楽なのである。芭蕉はこの世界を少くとも垣間見ることができた人であった。

あらたふと 青葉若葉の 日の光

この境地の感得が言霊アであり、母音言霊の自覚に連なる境地である。次に来る第二の条件は、その純粹美の自由な立場から、その境地を得るまで暗中摸索していた表現的巧の経験を再び構成し直して、俳句なら俳句のテクニクの修練をすることであり、その手段の追及が言霊父韻の配列の自覚に関係してくることとなる。美的魂の自由飛翔による表現手段の駆使の会得である。その完成体を言霊でチキリヒシニイミの八父韻の配列で表わす。

上述の二条件は俳諧だけでなく芸術活動一般に通用する原則であるが、俳句の場合はその特殊性としてもう一つの原則を考へることができよう。それは五七五計十七文字と心の先天構造である言霊の数十七との一致という点である。「古池や 蛙跳びこむ 水の音」の句が示す光景は、単に古池に蛙が跳びこんでポチャンと音がしたいま・ここの一瞬の現象である。俳句はその句の表現対象が物であれ心であれいま・ここの光景である。俳句を作る人もそれを読む人も俳句は句の中に起こる現象のいま・ここの一点に誘い込んで、その一点を描写するのに十七文字を使う。と同時にその一点を現象たらしめる根本宇宙である十七言霊の活動リズムをも表現する。このことから俳句の第三の原則は「常なるいま・ここを描写しながら、同時に、その現象が生じて来る

元の世界、すなわち永遠の時の流れや無限の宇宙の広さを、またはその感慨を、言外に表現すること」ということができよう。俳句が季語を重んずるのも、宇宙の無限の永遠の営みを表現するための欠くことのできない手段であるからであろう。永遠の時の流れの中のいま、無限の広い宇宙のここ、一点の表現——それが俳句の芸術性である。禅でいう「一期一会」はまた俳句の精神でもあろう。

芭蕉の他に子規の句をもう一つ。

柿食えば 鐘が鳴るなり 法隆寺

私の好きな句の一つである。一点の雲もない青く澄んだ空の下で眼に焼き付くような赤い柿がぶりつく旅人一人。そこに聞こえてくる日本人の心の故郷ともいべき遠い飛鳥あすか仏の法隆寺の鐘の響ひびき。旅人の心は独りはかなくもまた明快である。正岡子規は物のあわれと生の確かさを二つながら知っていた人であつたに違いない。

次いで和歌の話に移ろう。和歌は字余りは別として三十一文字である。和歌の道のことを昔敷島の道といった。「敷島とはやまとの国の別称。崇神天皇及び欽明天皇が大和の国磯城(しき)郡磯城島に宮居されたのに由来する」と辞海に記されている。磯はまた「いそ」と読む。五十いそのことである。敷島の道は五十城の道すなわち五十音霊の道ということであつた。現実に日本の言

葉の原理であり、人間精神の究極の法則であり、そして道德政治の要諦でもあったア、イ、ウ、エ、オ、五十音霊の原理を自覚する修練の手段の一つとして、古代においてこの三十一文字の和歌の道が数えられた。三十一文字を用いて一つの情景を写し出し、その風物や心情の真相にどのくらい迫ることができるか、すなわち言霊アである感情を正確かつ濃やかに表現し得るかを修練すると同時に、その中に大和言葉の原典である五十音霊の原理を隠れた意味内容として折り込んでいくことによって、その言霊の原理そのものをも勉強するのが敷島の道の目的であつた。

例を挙げてみよう。

長き世の遠の眠りの皆目覚め波乗り船の音のよきかな

という古歌がある。この歌驚くべきことに前から読んでも後から読んでも同じである。このことによつて、人間の生命意識というものは現実にはいま・ここ・この一点にのみ存在し、過去と未来は、その「中今」（続日本紀）の一点より見るとき、意識の配列の仕方の相違に過ぎないという生命構造の深奥の法則の一端を暗示している。それはさておき、歌の表面的な意味は「長い暗黒の世の中の遠い時代より続く眠りから人々が目を醒まし、社会全体が（仏教では大勢の人の心の乗物を大乘と呼んでいる）時代の波を心持ちよく乗り切っていく姿はよいものですな」というほどになるであろう。これだけでは国家社会の将来に対する願望の歌ということに留まります。けれどもさらに、この歌の裏には言霊フトマニの原理が折込まれていることに気付く時、事態はいとも間

近なものに思えてくる。

「遠の眠り」とは遠い時代からの眠りの意味であるが、これを「十の音振り」と置き換えると言霊の意味が出て来る。「十の音振り」とは五十音言霊図の横の音の配列、例えば、ア・タ、カ、マ、ハ、ラ、ナ、ヤ、サ・ワとかア・カ、サ、タ、ナ、ハ、マ、ヤ、ラ・ワとかいう父韻の配列のことであり、振りは運用の意味である。音図の横の音の配列は人の心構えの持ち方すなわち発想から結果に到達するまでの心の運び方を表わしている。心の運用は言霊の音の振り方であるから音振りと呼ぶ。言霊の原理が隠没した時代は弱肉強食の覇道の暗黒時代であり、その権力主義の心の構え方がカ、サ、タ、ナ、ハ、マ、ヤ、ラである。この権力思想三千年の歴史の中から、十の音振りである言霊原理が「みなめさめ」すなわち甦り復活するならば、王道の政治の原理タ、カ、マ、ハ、ラ、ナ、ヤ、サの心構えによる恒久平和の世界がこの地球上に戻って来る。まことに「音のよきかな」ということとなる。世界平和を願望する歌の中に、その平和をもたらず唯一の方法をも秘示したものとして、和歌は古代において五十城島の道と呼ばれたわけである。

もう一つ例を付け加えよう。

あはぢしま通ふ千鳥のなくこえに　いくよねざめぬ須磨の関守

これは百人一首にみえる歌である。表面の意味は「須磨の浜の関守男が淡路島にいる恋人のことを思って幾夜もねられぬ」という恋歌ということになる。と同時にこの歌は言霊の原理の重要

な法則を裏に詠み込んでいる。

左図を見よう。古事記神代卷「鳥生み」の章に「淡道あひぢの穂ほの狭別きわの鳥を生みたまひき。次に伊予いよの二名あとなの鳥を生みたまひき……」とある。淡道(路)鳥とは言霊ア、行とワ、行の区域という意味である。アが主体、ワは客体。この主体と客体が感応同交して実相を生み出すのだが、その主と客

図 34

鳥千

ワ	ラ	ヤ	マ	ハ	ナ	タ	サ	カ	ア
ヰ	リ	イ	ミ	ヒ	ニ	チ	シ	キ	イ
ウ	ル	ユ	ム	フ	ヌ	ツ	ス	ク	ウ
エ	レ	エ	メ	ヘ	ネ	テ	セ	ケ	エ
ヲ	ロ	ヨ	モ	ホ	ノ	ト	ソ	コ	オ

とを結ぶ道、言霊学でいう父韻の働きを、古代人は千鳥(みちどり)(道鳥) またはその他の鳥の名で表現した。主体と客体との間に飛ぶ思いの火花を鳥に喩えたわけである。言霊学でいう子音である実相を生み出す先天の母音と半母音と父韻の動きを「あわぢ鳥通う千鳥のなく」と歌い込んだのである。

物事を主と客から判断して実相を生むということとは、また言霊学でいえば言霊イを操って世よの音ねをさます(起こす)ことともなる。「幾夜寝ざめぬ」と「いを繰り合わせて世の実相の音を起こす」とを同時に歌い込んだことである。次に「須磨の関守」のス、マはスの間の意。上図の五十音図の向かって右半分の中心にス、の字がある。左

の中心はユの字である。このことから五十音図右半分を「スの田」または「スの間」という。左半分は「ユの間」または「ユの田」（ユダ）と呼ぶ。すでにお分かりのごとく、ア行に近い方が主体性・精神性を表わし、ワ行に近い方が客体性・物質性を意味している。またスとは静・巢・主として、中心に動かずにあるもの、古代においては政治の上で天皇の座を意味した。かくみてくると、この恋歌は裏に「客観状勢を見極めながら言霊学の法則に従って苦心して政治を運営しておられる天皇」という内容を秘示していることになる。

わずか二つの例では詳しくお分かり頂けないかも知れないが、和歌が言の葉の誠の道・敷島の道として抒情歌としては言霊アの実現に努めながら同時に言霊学の修練（言霊イ）の道でもある時代があったことを示したわけである。このような歌は万葉集から古今集にかけてよく見かけることができるが、新古今集になるとほとんど見られなくなる。文献としてはもちろん口伝としてでも言霊の学問がこの世から完全に隠没されてしまった証拠であろう。近代になって言霊学の存在に気付かれた第一人者は明治天皇であった。天皇の御製の中に数多く言霊のことを詠んだ歌を見出すことができる。

天地も動かすはかり言の葉の誠の道をきはめてしかな

白雲のよそに求むな世の人の誠の道そ敷島の道

聞き知るはいつの世ならむ敷島の大和言葉の高き調しづを

ついでに枕言葉のことに触れておこう。昔の和歌には枕言葉というのがあって、ある事物を歌い出すためにその事物の上に付してその事物を強調する役目をしている。それらの枕言葉の中には国文学者によって「語義不詳」として片付けられているものが相当数存在する。例えば奈良の枕言葉である「あおによし」である。しかし言霊学からみると和歌の枕言葉には確乎とした意味があることが明瞭に理解される。「あおによし」とは、言霊アは芸術宗教の領域であり、オは学問分野のことである。奈良時代は芸術・宗教・学問の華が一度に開いた時代であった。昔はア・オといえはその一音一音の意味が一般に理解されていたのである。

新古今以後和歌の中へ言霊の原理を歌い込むことは完全になくなってしまったけれど、言霊原理の数の理の方は現代まで残っている。

和歌のことを三十一文字ともいふ。言霊五十音を区分すると先天である母音・半母音・父韻と親音を合せて計十七。後天実相音三十二。文字化<sup>みそひとじ</sup>を加えて総合計五十である。和歌の三十一文字は実相子音の数理を意味する。現実の実相音である三十二子音に一つ足りないその一とは和歌を讀む作者自身の心である。この欠如の一があるからこそ、和歌の表現が千變万化・自由無礙である得るのであろう。

以上俳句と和歌について思いついたままを述べてきた。近年俳句や和歌についていろいろな議

論が起こつてきている。けれど長い間この日本に生まれ育つて来た俳句と和歌に何か一本厳粛な筋が通っていない限り伝統とは言えないのではないだろうか。十七文字の俳句はその数が人間精神の先天部分を構成する言霊の数十七と一致する。それゆえ人間精神の空相である先天宇宙が躍動を起し、いま・ここにおいて現象を生み出すその一点の描写から、遡つて元の先天宇宙の時間空間の無限を表現することが眼目であり、和歌三十一文字はその数が後天子音数であることから現実実相の濃やかな抒情・抒情が目的であるといつてよいだろう。

## 宗教について

現在世界には種々数え切れないほど多数の宗教がある。古くからあるものを取りあげてみても日本神道・仏教・儒教・キリスト教・ユダヤ教・マホメット教・ヒンズー教……等々がある。その他いわゆる新興宗教はまさに無数である。そしてそれらの宗教はどれもそれぞれの教理を立て、幸福・平和・秩序を約束し、社会・民衆の中で教勢の拡大に勤めている。一方、二十一世紀を十数年後に迎えようとする今日、ノストラダムスをはじめ種々の予言者が世紀末人類滅亡の不気味な運命を喧伝している。物質的繁栄の裏にひそむこの人類の底知れぬ不安に対して、現存する宗教が果して適切な救済の力を發揮することができるのであろうか。この素朴な、しかも漠然とした大きな不安と疑問を持つのはひとり私だけであらうか。

そこでいま人間精神の究極の原理として説明してきたアイウエオ五十音言霊学の立場から、宗教とか信仰とかいうものをあらためて検討して、宗教や信仰のまさにあるべき姿を探ってみようと思う。

宗教ないし信仰といっても結局のところ神または仏というものに対する人間の態度の問題であ

る。そこで言霊学よりみたこの問題の結論からまず考えてみよう。神仏に対する人間の態度に二つの種類がある。齋く態度と拝む態度である。まず拝む態度であるが、拝むとは「おろがむ」ともい、語源はおろか（愚か）に通じる。不完全で愚かな人間が完全を求め平安を希い欲望の達成を渴望して神仏に頭を下げることである。これに対して齋くとは語源「五作」で、心の中に言霊五母音であるイ、エ、ア、オ、ウ、五次元の自覚を確立し、人間の全性能に精通し、人間の精神が遭遇するあらゆる事態に適切な判断を下す立場に立つことである。この場合ウは欲望界、オは経験知界、アは感情の世界、エは道德界そして最後のイは他の四世界を統轄する言葉の世界のことである。

この人間精神の全領域である五つの段階のすべての自覚を実現することを五作という。古神道ではこの五作の実現体を天之御柱と呼び、神道五部書では「一心の靈台・諸神交通の本基」と説明している。そして現実には神の憑代（神が宿る所）として五寸角、長さ五尺の白木の柱で象徴し、伊勢神宮の本殿の中央床下に御神体としてお祀りしてある。

心の中にこの天之御柱といわれる人間精神全体の真理を言葉の原理として把握することがとりもなおさず神仏の実現である。少くとも五千年ないし八千年の昔、この精神原理は完成され、その法則によって日本の大和言葉が制定されたことは、言霊学を勉強していくうちに疑うことのできない事実として理解されてくる。そしてこの言葉の究極の原理に則って、「世界は一つの言葉であった」と聖書にあるごとく、全世界の統一がなされていた時代が存在していたことは、単なる

神話ではなく全くの歴史的事実であったのである。道德王道の政治の時代が古代に存続していたことは、各宗教の「神代」として比喩的に述べられているが、言霊学によって人間精神の全貌が明らかになる消息を把握することによって、神話は眞実となってくる。その大道の政治が、いまから約三千年前人類文明創造の政策の一大転換によって現在見るがごとき権力闘争の霸道政治に変つたのであった。王道平和の政治の根本原理である言霊学は人々の表面意識から故意に隠没されたのである。その目的の一つが精神文明に対してもう一つの人間の性能である物質文明の発達を促すためであったことは容易に観取される。物質的探求は人間の精神が鼓腹撃壤して満ち足りている時代には進歩しないものである。精神原理の隠没によって神仏の自覚者は過去の物語となり、「齋く」態度はこの世から姿を消した。そして神仏は「おろがむ」ものとしてのみ存在し、各種の宗教が興ることとなる。祈いのるといふ言葉も齋く時代においては言霊の原理（言霊イ）に基いた政治の方針を宣言する、すなわち「イ宣言」という意味から、人間の欲望の達成、不安の救済を神仏に祈願する「おろかもの」の態度に百八十度の変換を余儀なくされたのである。

爾来約三千年が経ち、物質文明は興隆し、今日その華を咲かせており、物質の究極の構造が完全に解明される日もそう遠くないことが予想される。と同時に、物質科学の法則応用の運営が人間精神のコントロールを越えて独走暴走するならば、人類全体の破滅になりかねない事態をも招来した。この時暗黒三千年の間隠没していた第一の人類の文明の鏡であった言霊の原理が、人間

の潜在意識の深層から表面顕在意識へと甦ってきたのである。日本語を制定する原理法則であり、人間の道徳の規範であり、また世界政治の形而上的憲法であったアイウエオ五十音言霊学が、太古にあったごとくそのままに、復元されたのである。

そこでこの甦ってきた五十音言霊の立場から、いま社会に活動している種々の宗教に、それぞれ旧来の習慣マンネリより目覚め新世紀創造に向かって活動邁進されることを希い、簡単素朴な批判とアドバイスを進呈してみたいと思う。

## 仏教へ

仏教とは文字通り仏の教えである。釈迦牟尼仏の教えである。そしてその教えの大半は小乗大乘の経文の中に説かれているということができよう。人間の魂の進化とその自覚の方法について仏教ほど懇切丁寧に説いている宗教はない。いま言霊学の立場からその教えの二、三の点について感じたままを書いてみることにしよう。

先に書いたことだが昆虫は三態の進化をする。幼虫・蛹・成虫の順で、成虫が完成態である。

では人間の魂はどうであろうか。仏教では五態の進化として説明している。衆生・声聞・縁覚・菩薩・仏陀の五段階である。これを簡単に説明すると次のようにいうことができよう。(図35参照)

図 35 人間精神の進化の段階別種々相 (小笠原孝次氏による)

五	イ	仏陀	生命意志	総持	言霊	脾(胃)	土
四	エ	菩薩	実践智	道德実践	至上命令	心(小腸)	火
三	ア	縁覚	感情	芸術	詩歌	肝(胆)	木
二	オ	声聞	経験知	科学	抽象的概念	腎(膀胱)	水
一	ウ	衆生	五官感覚	産業	感覚の直接表現	肺(大腸)	金
次元	母音	五乗	心理内容	職業	使用言語	東洋医学	五行

衆生——欲望の世界に沈み、その欲望の達成に一生を費して疑問を持たぬ生きとし生ける者。言霊ウの次元にうづくまって一生を送る。禅ではこの人達を指してウ字の虫すなわち蛆虫うじむしと呼んでいる。

声聞——説教を聞き経文を読んで理の上で仏法を理解し悟りを開こうとする段階。言霊学でいうオの次元に当り、一般にはウ、次元の欲の世界での行為を経験知として概念化する世界。一般的には物心科学。

縁覚——独覚ともいい、個人としての束縛から離脱し自由の境地にいて自分一人その自由を享樂している人。言霊学では言霊ウとオの次元に起こる現象のよってくる根源の宇宙である言霊アの次元を自覚した境地（この世界が純粹な信仰と芸術の領域である）。この意味からは仏教でいう阿羅漢の言葉が最も近い。小乗教の仏陀、仏陀十号の一。

菩薩——自身は一切の束縛から離れ自由の境地に住しながら、あえて他の苦界に沈んで悩む人々を見捨てず、煩惱より救わんと努力し、その菩薩行によって最高の仏道である阿耨多羅三藐三菩提あのくたらさんみやくさんぼだいを得んと務める段階。言霊学では言霊エの次元。この場合の端的な意味は「選えらぶ」が最も理解し易い。先入観のない自由な境地にいて、ま、こ、こ、でいかになすべきかの選択を遅滞なく決定する心の領域であり、この世界の自覚者にして初めて真の政治家・道徳家たりうる。自分のための決定ではなく、他人ならびに社会や世界のための当為の決定者。

仏陀——菩薩行の完成者であり最高の悟りを得た人。上述の四段階を総持する人。仏十号の

完備者。言靈学でいえば言靈イならびにその展相であり人間創造意志の究極リズムである八父韻の確認者。言靈五十首の自覚運用者であり世界の言葉の総轄者スメラミコト。

以上簡単に魂の五段階の進化について述べてきたが、そのうちの衆生より菩薩までの進化については小乗経典より、般若経・浄土三部経・華嚴経・維摩経・法華経等々の大乘経典によって詳しく説かれている。ところが仏教を説く本尊である仏陀自身については、その悟りは阿耨多羅三藐三菩提と呼ばれ、仏所護念教菩薩法といわれ、「仏の言葉は異なることなし」と書かれ、その他形容詞的には各所にその内容の指示はあつても、仏とは何ぞやというそのものズバリの表示はどこにもみることができない。お釈迦様はいかなる真理を悟られ、それによって無数ともいわれる経典を説かれたのであるか。仏典が説かれた根拠となる真理はいかに。この問に対して仏教信者は次のようにお答えになるに違いない。「小乘大乘すべての仏教典に説かれた教への全部を完成され体現された方が仏といわれるのだ」と。これは比較表現的説明としてはもつともものようにみえるけれど、はたしてそれだけなのであろうか。仏教で説く人間の魂の進化すなわち衆生・声聞・縁覚・菩薩・仏陀の五段階の悟りは決して平面的な進歩ではなく次元的進化なのである。とするならば菩薩の行を十全に完成する時、菩薩はそこで次元的に飛躍して仏陀の次元に入ることとなる。下の四つの次元を総持してしかもその四つの次元とは全く異なる仏陀としての段階に入るわ

けである。その仏陀の次元特有の究極の真理があるはずだ。そうだからこそ仏説に因位の菩薩と果位の菩薩とが区別されるのである。因位の菩薩とは菩薩行によつて人を救済しその功德によつて仏陀にならうと努力する菩薩であり、それに対し果位の菩薩とは一度仏果を得た人（仏）が人類救済のために菩薩の姿で地上においてきた菩薩と説かれている。このことは、菩薩には菩薩段階としての心理構造があるように、仏陀には仏陀段階特有の真理がなければならぬことを示している。それを阿耨多羅三藐三菩提と呼ぶのである。以上のような意味で考えてみると、仏教は仏の教えでありながら仏自体を説いてはいないということが出来る。「釈氏大藏經を説いて末後に乃ち謂く、嘗て一字を説かずと」（碧巖録）とは、実際にはこの消息を指しての言句といった方が正確ということになる。釈迦以後の最高の聖僧といわれる寒山に、究極の真理を求め求めぬいて遂に得ることなく年老いていくことを嘆いた詩があるのももつともなことである。

しかしこのことは仏教者にとつてはまことに重大なことのように思われる。なぜなら仏教は仏を説くことなく、仏教信仰からは仏は生まれることがないということになるからである。そこで私は試みに仏教者に二、三の質問を試みたいと思う。

一、「舍利仏、かくの如きは皆一仏乗の一切種智を得しめんが為の故なり」（法華經方便品）とあるが「一仏乗のみあつて余乗の若しは二、若しは三あることなし」と説かれるその一仏乗の一切種智とはいかなるものなのであるか。魂の進化の最終段階である仏乗の根本智とは具

体的に何なのであるか。

一、法華経提婆達多品に娑竭羅龍王しゃかくらりゅうおうの女むすめ年始めて八歳が摩尼宝珠けじゆ価値三千大千世界を仏たてまつに上に、忽然の間に等正覚を成じて仏になったと説かれている。摩尼は世界語で、キリスト教聖書には「マナ」とあり、「神の口より出づる言葉なり」とも書かれ、わが国の神道では「麻邇」または「布斗麻邇」と呼ばれるものであるが、この「摩尼」とは何なのであるか。

一、観世音菩薩普門品の終りに近く「妙音観世音・梵音海潮音……」とある。観世音菩薩は果位の菩薩であり、仏陀が衆生救済のために菩薩として下生されたのであるから、当然仏乗の次元について語ることができるはずの方であるが、この妙音観世音・梵音海潮音とはいかなる音なのであるか。

右の質問にある語句について種々の経文・経論・仏教哲学書を繙いてみると、縷々難解な概念的説明をみることができ。例えば「妙音とは空と有とを双遮する空智の音、観世音とは空有を双照する中智の音、梵音とは慈・悲・喜・捨の四観をもつて照らす仮智の清浄なる音、海潮音とは潮の時節をたがえざる如く、衆生救済に時を失わずに出す音で共に仮智の音、勝彼世間音とは智の外に音なく、音の外に智なき境冥合し思慮を越えた音」(岩波文庫・法華経・注)とある。これらの語句を理解し得るか否かは別として、この概念による説明が禅でいう「指月の指」であって月そのものでないことだけは確実に理解されることと思う。月はあそこにあるよと示す指と

は、信仰し努力すればいつの日か仏になることができると経文で見聞して教えられる段階すなわち声聞乗の謂である。

先に図表で示したごとく、その人がどの次元に立って話をしているかによって使用する言語に明瞭な相違がある。衆生といわれるウの次元にある人の言葉は感覚の直接の表現のみである。出来事と感じ方の羅列に終始するので、こういう人達が電話でしゃべると何時間にも長くなる。声聞であるオ次元の人は抽象的概念を使う。縁覚として仏教の空である自由を得た人すなわちアの次元の人はその境地を表現するのに偈を用いる。広義には詩と歌である。読経やイスラムのコーランの読唱に節廻し抑揚があるのもそのためである。それは感情の世界なのである。禅の碧巖録なども宗教哲学的書物であると同時に文学書的傾向のあることもうなずかれる。次に菩薩であり言霊エの次元に住む人の言語は至上命令である。「い、ま、こゝであなたの行く道はかくあるべし」である。そして最後に仏乗である次元の言葉がいま問題となつているところなのです。

結論からいおう。その最上乘である仏陀専用の言葉それが言霊なのである。衆生はウ次元、声聞はオ次元、縁覚はア次元……というのも言霊である。衆生である人の心がよって立つ宇宙を称して「ウ」というわけである。仏典の中にも言霊表現を示しているものが多く見かけられる。例えば真言に「阿字本不生」とある。十二因縁を確認して物心の事象即空と知り、広い広い自由の宇宙を知る時、事象がよって生じてくる根元の宇宙を「阿」と名(字)付け、その宇宙はもとも

と存在する実在であつて生まれてくるものでなく(不生)、また消えてなくなるものでもないことを「阿字本不生」と表現したわけである。真言では阿字の他にウ、オ、エ、イの四字も仏教哲学概念で表現しているが、それらはすべて言霊そのものではなく、言霊の抽象概念的説明である。

「仏の言は異なることなし」(法華經)とある。その仏の言葉とは言霊のことである。五十音をもつて人間の精神の究極内容を全部表現し、その配列によつて人間精神の構造とその動きを表現する仏乘第一義の言葉なのである。この消息を理解したうえで先に呈した仏教者への質問を考えて頂く時、すべてが手にとることく明らかになる。一切種智とは五十音言霊そのものであり、摩尼宝珠の摩尼とはキリスト教聖書にある *mana* マナと同義で、神の口より出づる言葉すなわち仏の言葉のことであり、その言葉が円満玲瓏な実相を表わすところから宝の珠と喩えたものであることもうなずけることであろう。梵音とは宇宙の実在音であるアイウエオ五母音のことを指し、海潮音とは主体と客体とを繋ぐ抑揚として満と干または陰と陽とを持った音すなわちチキシヒ(陽)、ニ、ミ、イリ、(陰)の八父韻であることも明瞭である。

このようなことを書くときだめし仏教者は怒つて席を蹴つてたつてしまふかも知れない、それを承知のうえで苦言を呈する次第である。縁覚としてみずからの魂の自由を得た人が、そこであらためて一念発起して煩惱に沈んでいる衆生を救わんとして菩薩の行に入り、幾生にわたつて修行し、その功德によつて成仏の授記を受ける話が法華經その他に書かれている。

我聞く天台山、山中に琪樹有り、永言して之を攀ちんと欲すれども石橋の道を  
曉るなし、此に縁つて悲嘆を生じ、幸居してまさに暮れんとす、今日鏡中を觀  
れば、颯々として鬢髮垂れて素の如し。

中国天台山の聖僧寒山は、精神的な宝の樹といわれる琪樹に登る道が把めないことをこのように悲歎している。大菩薩であった寒山にしてこの悲しみがあつたのである。ところが法華經には八才の竜女が摩尼宝珠を釈迦仏に献り直ちに成仏することが書かれている。幾生もの気の遠くなるほど長い期間の修行と竜女の即座の成仏と……その相違をどう解釈したらよいのか。違いはただひとつ、摩尼があるか否かだけである。

仏の出現がいまほど待望される時はない。と同時にいまほど仏教が仏から遠くなつた時もないようである。空という自己の魂の自由を得た境地は仏教の悟りの終極ではなく、仏への出発点なのである。空なる世界の中から発現して次々に現象を生んでいく人間精神の空相実相の全構造の学である言霊学こそ、人間の、そして同時に仏陀の、精神の真理であることを確めて頂きたい。これが全仏教者に対する私の希望なのである。実際に成仏する道はこれ以外にないからである。

最後に私自身の信仰のことで恐縮ではあるが、仏教信者の方の参考になれば幸いと希い、一、二の体験をお話したいと思う。

それはいまから二十年ほど以前、魂の自由が欲しくて茨城県の鬼怒川の川辺で読経と瞑想の日々を送っていた時のことである。ある晴れた日の午後であった。突然わが身が急に軽くなったように感じたかと思うと、鳩尾<sup>みぞおち</sup>辺りを何かで下から突き上げられるような感覚におそわれ、自分の視点が上方へ上方へと舞いあがって行くのである。変なこともあるものだと思つて自身の体を見ると確かに川辺に坐っている。と同時にもう一つの視点はぐんぐん上空へ上って行く。空は澄んでいた。遙かかなたに鬼怒川が蛇行して流れて行くのが眺められる。和やかな陽の光、川の輝き、素晴らしい大俯瞰の光景である。身体は川の堤に坐りながら、しかも地上を天空遙かから見下している。そしてさらに驚いたことに、その時まで空の色・川の色・草木の緑の色・人家の屋根の色と思つて疑ふことのなかつたその色が、実はすべてその色の光そのもの、透明な光として見えることであつた。物質の色と思つていたものが実はいろいろな色をした透明の光であつたのである。寂光の浄土だとすぐに感じた。この世界は無礙の光明の浄土なのだ。そんな状態が十数分は続いたと記憶する。急にまた元の五感覚の自分に戻つていた。それまで見ることでできた光明の世界が幻であつたかのように感ぜられる。ただ以前と違ふことは、その時以來道や街で会う人々がみんな温かい身内のように思われることであつた。「汝と我と同根、また奇特なり」の禪語が自然口について出てきた。その時から数日の間に、それまで経文や経論の理屈で解つた氣でいた事柄が心の底から理解できるようになつた。それは、瞑想のある時点で、それまで自分自身で

あると思ひ込んでいた我執が、ふっと、霞が消えるごとく眼の鱗が剥がれるごとく、取れたのに違いない。自己の眞の本体は宇宙そのものであることを知らされたのである。宇宙は広い広いものであるからどこにしようがそのいるところが宇宙の中心であるわけだ。宇宙の中心を自覚した眼で見るこの世は、まさに透明な光の交錯する寂光の浄土そのものなのである。浄土三部經の阿彌陀經に「青色青光、黄色黄光、赤色赤光、白色白光、微妙香潔……」と書かれた意味がよく理解できた。そしてこの宇宙こそ「阿字本不生」の宇宙であることを知ったわけである。この体験はその後何度か繰り返されたのであるが、その理解によって仏教經文の教えが嘘でないこと、一つひとつがお釈迦様の体験から出たものであることを確信することができ、同時に「阿字本不生」の確認から、私は初めて言靈学という母音が宇宙の何を表現しているかという言靈学の入口を喜び勇んで入って行くことができたのであった。

空觀を得んとして座禪をしていた時の感想をもう一つ参考に申し上げよう。禪宗無門関の第一趙州狗子に次のごとくある。

趙州和尚因みに僧問う「狗子に還つて佛性有りや也た無しや」州云く「無」。

一人の僧が趙州和尚に向かつて「犬に仏性がありますか、無いですか」と質問したところ、和尚は「無」と答えたという話である。禪の公案には時にその突飛さに驚かされることがある。け

れどもその公案を介して空という広い宇宙を確認してみると、その突飛さゆえに悟ることができ  
る公案の仕組を理解することもできるわけである。

仏教では生きとし生けるものはすべて仏性ありと説いている。だから趙州和尚が答えた「無」  
とは「ない」という意味でないことは明らかである。犬に仏性が「ない」と答えたのではなく、  
質問した僧の、犬に仏性があるかないかなどと考えている修業の態度そのものを「無」(Zōōこと  
言って否定したのである。平たく言えば「この馬鹿野郎」と怒鳴りつけたわけである。このこと  
で分かるように禅でいう無とは有るとかないとかいう無ではなく、修業の心の中にあるものを  
Zōōこと言って否定することである。座禅の目的はまず空の体験・魂の自由の獲得にある。ところが  
人間は本来宇宙から生まれ魂は自由なのである。オギャアとこの世に生まれた赤ん坊の心は純真  
無垢なはずである。赤ちゃんは何をしても罪はない。その本来空であり自由である魂が、大人に  
なるとなぜ不自由を感じ空を求めなければならぬのであろうか。

それは赤ん坊の時の透明な青空の心に雲がかかるためである。雲とは何か。人は生まれて暫く  
すると次第に知識を身につけ習慣をおぼえ、物事に対して意見を持ち希望・信条・信念等を持つ  
ようになる。そしてこれらの後天的に身につけたものによって人格を形成し、その総合体を自我  
と思ひ込む。実はこれらの後天的なもの、知識を身につけるという言葉のように、自分自身  
の身につけた着物なのであって自分自身ではない。にもかかわらず後天的知識の総合体を自分自

身だと思ひ込んでしまふ。また知識の修得はめつたやたらと掻き集めるのではなく必ず正反合の弁証法的に修得していく。その修得の精神構造は三角形△で表現されるごとく常に不完全であり、そのために他の“自我”と必ず衝突する。自我と自我、知識と知識が斉合する時は味方であり、相反する時は敵となる。かくて魂は不自由を感じる。本来自分自身とは宇宙そのものである。それなのにその部分部分に後天的に身につけた知識・習慣……等が俺達こそ主人公だと威張り出した形である。庇を貸して母屋を乗っ取られてしまったのだ。

それゆえ魂の自由を取り返す方法はただひとつ、自我を形成して自分の行動判断の基準となつている知識・習慣・希望・信条等々を一つひとつ点検し、お前は他の人の論説・主張から借りてきた着物であつて自身ではないのだと心の中で否定していくことである。この心の否定の力を「無」といふのである。身につけた知識を否定したからといって一度覚えた知識は影形もなくわすれてしまえるものではない。ただある状況に直面すると自動的に一定の知識の判断に身を委ねて疑問を持つことのなかつたそれまでの態度から脱却することとなる。判断を下すに當つて自分の身につけた知識のうちのどれを採用するかを自由に常に留保している状態が魂の自由ということなのである。例えば共産主義者はマルキシズムを身につけると、その瞬間から心の中で主客の転倒が起こる。自分自身が主人公でありマルクス理論はお客または家来のはずである。ところが共産主義者となると同時に主人公はマルクスであり、本人は使い走りに成り下る。この場合の使

い走りまたは走狗に墮ちた人を禪では傀儡かいらいと呼ぶ。いま流行の守護霊という言葉の立場からいえば、共産主義者の守護霊はマルクスの霊である。霊視能力のある人が見れば、マルクスが赤旗を振ってその人を煽動しているのが見えることであろう。この現象はマルキシズムに限ったことではない。人が一つの信念を身につけると一段と力強く生きることができるように見える。と同時にその人はその「信念」に振廻されて不自由にもなることとなる。

この不自由から脱却して傀儡と成り下った自分を再び主人公の座に戻すためには、身につけた知識はいつ・どこで読んだ誰々の意見であり、借物なのだということを繰返し繰返し自分に言い聞かせ、その知識を母屋から初めに貸した庇まで引き下ってもらうことである。この心の作業を「無」と呼ぶのである。この習慣この信条は父母から受け継いだものと知ったならば、それまで自分を育て護ってくれたことを感謝して、そして同様に借物にあるべき庇の座に退いてもらうことである。この作業を続けることによって、青空を蔽っていた黒い雲は薄れ、ついには透明となり広々とした心の宇宙が見えるようになる。この時見ているものも宇宙であり、見られているものも同じ宇宙である。主客同一となる。これが諸法空相の確認の成就である。この成就には何ら客観的証明を要しない。「啞あし子の夢を得るが如く、只だ自知することを許す」(無門関)なのである。

人間が物心ついて知識を集め自信を強めて行く時代の学問は進歩の学である。これに反して庇

を貸して集められ、やがて母屋を乗っ取った知識を、お前達は主人公ではないと心中に否定し、ついに生まれたままの純粹無垢な空に帰る学問は「退歩の学」といわれている。この、空に帰った時が諸法空相の確認である。空を確認し赤ん坊に帰ったといっても、この赤ちゃんは何も知らない以前の赤ちゃんではなく知識を豊富に持っている。世話をされなければ生きて行けない赤ちゃんではなく、さらに一念發起して以前の自分のごとく煩惱の海や転倒想に沈んでいる大勢の人々を魂の自由な境地に引き上げ、究極には恒久平和な仏国土を莊嚴する能力と使命を持った赤ちゃんである。この使命に一步踏み出した時から諸法実相の本格的修行である菩薩行が始まる。声聞時代の自己の知識という色眼鏡を通して見るのではなく、空なる無色透明の宇宙の眼をもって仏国土莊嚴という仏の慈悲の立場から見るところの物事の実相の確認の修行が始まるのである。この菩薩行の終点に教菩薩法・仏所護念といわれる一切の種智の学であり「我一字不説」と仏に指示されたアイウエオ五十音言霊学が展開している。仏陀の現実的の下生はここにおいて実現されるであろう。法華經の完成である。

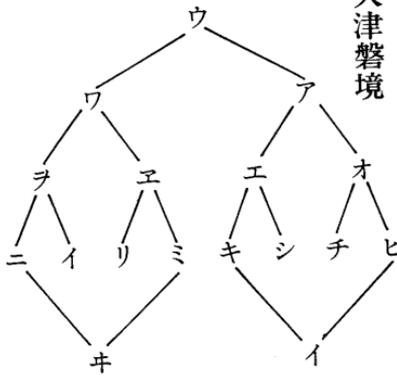
法華經見宝塔品に釈迦牟尼仏が妙法華經を説く時、地より涌出する宝塔より大音声を出し「善哉善哉」とその説法の真理であることを証明する多宝仏のことが説かれている。法華經は諸法実相の修行の教えであるから、それを真理なりと証明する多宝仏とは、仏であり人間である精神の最も中枢の部分すなわち人間精神の先天部分の構造それ自体でなければならない。法華經ではも

つばら比喩物語でしか説かれていない多宝仏の言靈的構造を図示し、仏教者へのアドバイスの最後の餞はなむけとすることしよう。(図36)

この構造を仏教では多宝仏、神道では天津磐境いわかまたは伊耶那岐大神と呪示する。昔の墓陵である前方後円墳の後円はこの精神構造を示す形である。中国の儒教でいうなら天壇社稷の天壇にあたるわけである。

図 36

天津磐境



## キリスト者へ

「元始はじめに神天地つくりを創造つくりたまへり地かたちは定形かたちなく曠空ひなしくして黑暗淵やみわたの面おもてにあり神の靈水おほひの面おもてを覆おほひたり神光いひあれと言いひたまひければ光いひありき神光いひを善いひと観いひたまへり……」(創世記第一章)

世界の宗教書・神話は必ず神の天地創造をもって始まる。聖書では「元始に神天地を創造たまへり」である。信仰者とは神の存在を信じた人であるから、元始に超人格者としての神がいて、何十億年という数えることのできないほど昔に、いま私達の眼に映ずる宇宙や太陽や地球を創造したと解釈するであろう。ここ約二千年の人類の思考パターンからするならば、そうした解釈はいつも当然のように思われる。しかしこの当然の思考と思われる発想の論拠に、聖書の創世記から旧約全体さらに新約の最後にある黙示録に至るまでの論理の解釈に首尾一貫性を欠かせ、信仰の深奥に到ろうとする人に苦悩と混乱をもたらす重大な原因のあることに気付く人は少いように見受けられる。人間精神の根本構造の学である言霊学の立場からいくつかの事柄を指摘してキリスト者の参考に供したいと思う。

聖書冒頭の神の天地創造とは、大昔にあつたであろうところの天文学的・地質学的……な宇宙・太陽系・太陽・地球等の生成のことではなく、常なるいま・ここにおいて現象が起こり人間の精

神がそれを感覚しどう対処したらよいかを決断する日常茶飯の、そして人間の文明創造の最も基本の精神活動の、原理を説いたものである。この精神の深奥の消息であることの認識を離れる時、宗教の記述は時におとぎ話とみられたり、現代科学の原理と相克する破目に陥ったりすることとなる。人間は常にいま、nowhereに生きている。過去とはすでに過ぎ去ったもので記憶として頭の中にあるだけである。未来はまだこないものであつて推理・願望としてやはり頭の中に描かれたものである。にもかかわらず人は過去の出来事に悩まされ未来の想像に忙殺されていま、nowhereを把握することはなかなか困難となつている。そこにすべての精神的葛藤・齟齬の原因がある。聖書特に新約の信仰の大半は実にこのいま、nowhereを把握するためのものなのである。「幸福なるかな、心の貧しき者、天国はその人のものなり」といい、「汝らしるが翻へりて幼児の如くならずば天国に入るを得じ」と書かれる。赤ん坊は成長するにしたがつて知識を覚え習慣が身につつき、種々の願望を生じ理想を胸に抱くようになる。人格の形成です。と同時に自分と他の人格の衝突が起こることともなる。罪の意識が生じ、その罪からの解放、魂の自由を、信仰によつて求めようとする。その魂の自由を求める方法すなわち、翻つて幼児の如くなる。信仰の方法は、あますところなくマタイ伝山上の垂訓に書かれている。この信仰を、聖書にあるごとく、素直に、決して妥協することなく、心中に実践した人が「イエスは十字架につけられ死して三日の後に甦える」という聖書の言葉を自分自身の心の中に実際に証明することができることとなる。

「幸福さいわいなるかな、心の貧しき者。天国はその人のものなり。幸福なるかな悲しむ者、その人は慰められん……」この山上の垂訓にある「幸福なるかな」と祝福されている箇条を心底に忠実にそのもののごとくならうと努力し、人からはいかに思われようと関係なく、自分の心に妥協なく進む時、かえって自我の根底に抜き難い我と欲があることを思い知らされる。信仰への努力と我欲の深さとの相克に身も心も疲れ果てて、自分の信仰と反省と気力をもつてしてはこれ以上どうにもなり得ないことに立ち到った時、人間の魂は死ぬのである。何もする気力もなく希望もなく、唯呼吸をしている肉体だけがある状態となる。精神的な死です。この状態は三日ほど続く。三日目の魂の死んだ耳にふと時計の時刻を告げる音が大きく響いてくる。「ああ、もう日が高くなるな」と思う。「腹が空いたな」と感じる。同時に心の底より迸り出てくる感謝の念が全身を蔽う。かくも我欲が強く、利己的で何の価値もない自分ですら神は恵みを垂れ生かさせてくれるありがたさ。あふれるような安堵感。いままで何の変哲もなく感慨もなく聞いていた時計の音が、いまは何と大きく新鮮に響くことであろう。三日目に口にした御飯の何とおいしくありがたいことであろう。一瞬一瞬が新鮮で生き生きと思える。あらためて聖書の言葉が生きた光と熱のように思い出される。「幸福なるかな、心の貧しき者。天国はその人のものなり……」「迷わぬ九十九匹に勝りて此の一匹を喜ばん。かくの如く此の小さき者の一人の亡ぶるは、天にいます汝の父の御意ごいにあらず」。「最早われ生くるにあらず、キリスト我が内に在りて生くるなり」。

以上の心の経過が十字架につけられ死して三日にして甦ると書かれたことのおのずからの証明である。死んだのは肉体ではない。生まれて以来習い覚えた知識・習慣・性癖・願望・理想によつて形成された自我が死んだのである。新しく生れたのは「もし汝等懺へりて幼児の如くならずば、天国に入るを得じ」の幼児である。この幼児は生れたばかりの幼児ではない。知識・習慣・理想等をすでに身につけた幼児です。自我と違ふところは、自我がその知識・習慣……理想によつて動かされるのに反し、新生の幼児は「内に在る」キリストがその知識・習慣……理想を使つて生きることなのである。「最早われ生くるにあらず、キリスト我が内に在りて生くるなり」の成就がここにある。

私事で恐縮ではあるが、ここで私自身の信仰上の出来事を書き添えてみよう。二十年ほど前になる。その頃は茨城県の筑波山の近くの丘陵の中にいて瞑想にふけていた。その時にはすでに、以前から自負していた私の頭の中にある種々の知識・願望・性質・理想等が実はすべて他説からの借物であり、自分の独創はなにひとつなく、誇るべきなものもないことを思い知らされていました。十一月も末の小春日の日である。失望のどん底の私に胸の底から温かい愛の感触がいつぱいに湧きあふれ、よいにつけ悪しきにつけ瞑想の対象であつた自我意識がスーと消えてしまつたのである。こみ上げてくる安諸感に茫然としていた。けれども夢ではないことに時計を耳にかざしてみるとチクタクとハッキリ聞えて来る。周りを見ると数羽の小鳥が私の膝のすぐ近

くで遊んでいる。私が身を動かしても逃げようとしません。鳴いています。さらにその先、私より約二メートル弱のところに数色の縦縞模様の大きなリスが一匹私の顔をのぞき込むようにいるではないか。まるで「俺より大きな変なリスがいるなあ」といった様子です。私はといえば睫毛にとまった小蠅を追う気も起こらずほのぼのとした気持で「ああ、お前達も生きているんだなあ、僕もここで生きているんだよ」と語りかけたような具合なのである。……こんな時間が数分間続いた。そしていつもの自分にかえていった。小鳥もリスもスツと私の目の前からいなくなつた。小春の日差しが野一ぱいに輝いていました。このことがあつてから「鳥や獣と話をしたセント・フランシス」の説話が嘘ではないことを確信したのである。

「最早われ生くるにあらず」とは *Live nowhere* ということです。生きたころとは知識とか希望とかいう先入観のことである。そしてどこにも生きたくないということこそ、常に *いま・ここ* に生きたことなのである。 *no-where* は *now-here* です。かくて信仰の第一の目的とはいま・ここに生きたことの確認にあるということができよう。「最早われ生くるにあらず」は成就した。次に「キリストわが内にありて生くるなり」も信仰としては了解できる。わが内にキリストがあつて生きたことを信じたことでもできたのである。

ここで考えをもう一步進めてみることにしよう。 *いま・ここ* に一個のみかんがある。人は「これはみかんだ」という。「これはみかんだと信じる」とは言わない。同様な論理でいうならば「わ

が内にありて生きる」と信じたそのキリストとは実際に何なのであろう。イエス・キリストについては聖書の中で種々教えを説き、奇跡を現わし人々を励ました行為が記されている。ならばそれらの教え・奇跡はイエス・キリストのどのような内容から発してくるのであろうか。キリスト者にとってこの「聖域」に質問を投ずることはいけないことなのであろうか。そうではあるまい。なぜならばイエス・キリストの内容に関して、さらに深く示唆する記事が聖書の中に数多く見られるからである。それだけではない。この現代に生きる人間または人類に対して「かくすべし」と決定し命令する「内なるキリスト」の内容を知ることが、キリスト者にとっての義務であると思うからである。予言された「終末」を乗り切る唯一の方法はキリストの再臨であり、その再臨の唯一の現実的方法とはキリストの内容を知ることである。これからキリストの内容に関する聖書の記事を列挙して考えてみたいと思う。

先にお話したように、聖書の初めの神の天地創造とは物理学的・天文学的な記述ではなく、あくまで永遠のいまであるいま・ここに人間が生活し歴史を創造しつつあるその瞬間の精神構造を説いたものであることを心にとめてお考え頂きたい。

「太初はじめに言ことばあり、言は神とと偕ともにあり、言は神なりき。この言は太初に神とともに在り、萬の物よろずこれに由りて成り、成りたる物に一つとして之によらで成りたるはなし。之に生命あり、この生命は人の光なりき……」新約ヨハネ福音書は以上のように冒頭から人間が生命を創っていく根本

構造を説明している。人間が何かをする・考える・言うという行為は、精神的に凝縮してみると頭脳の中に言葉が出ることである。言葉がなければ、「地は定形なく曠空くして黑暗淵の面にあり」（創世記）であつて何も起こらない。起こつたとしても起こらないのと同様である。その何も無い黑暗に何か気配が、人間の創造意志の気配が動く。「神の靈水の面を覆たりき。神光あれと言いたまひければ光ありき」である。そこに創造が、天地の創造が始まる。あらゆる先入観を離れ、何も無い心の宇宙から人間の頭脳内に一つの発想が現われて来る瞬間の消息を一度把む時、「元始に神天地を創造り給えり」「太初に言あり」がいつも壮嚴な生命現象として実感されてくるであろう。人間は常には生活の連続性に押し流されて、一瞬一瞬の自己の生命の創造性の壯嚴さを忘れてしまつてゐる。ただし太初に言ありの言とは嚴密には私達が日常使つてゐる言葉ではない。「汝も知ず汝の先祖等も知らざるところのmanaを汝に食わせたまへり。是人はパン而已にて生る者にあらず。人はエホバの口より出る言によりて生る者なりと汝に知しめんが為なり」（申命記）とあるように、「神の口より出ざる言」である。この言葉に關してもう一つの重要な記事が聖書にある。「全地は一の言語一の音のみなりき。……エホバ降臨りて彼人衆の建る邑と塔とを觀たまへり。エホバ言たまひけるは視よ民は一にして皆一の言語を用ふ。今既に此を為し始めたり。然ば凡て其為んと図維る事は禁止め得られざるべし。去來我等降り彼處にて彼等の言語を淆し互いに言語を通ずることを得ざらしめんと。エホバ遂に彼等を彼處より全地の表面に散したまひければ

彼等邑を建ることを罷たり」 創世記第十一章)

以上あげた「太初に言あり言は神と偕にあり、言は神なりき」の言語ことば、「神光あれと言いたまひければ光あり」の言葉、「全地は一の言語一の音のみなりき」の言葉がどのようなものであるかについて聖書のどこにもその言葉そのものズバリを記した箇所を見つけないことはできない。けれどもその言葉が過去において存在し使用されていた事実は歴然としているのである。もしその言葉の存在と内容を否定してしまうならば、聖書全体の論理は全部崩壊してしまうのである。

この「言は神なり」の言葉とは、いわば言葉の言葉 word of words というべき言葉でありましょう。言葉を成立させている根本の言葉ということである。そこで人間精神の根本構造とその動きの学である言霊学の立場から、キリスト者にいくつかの聖書の解釈を呈することにしよう。その定義を虚心坦懐にキリスト教信仰に従ってお考え頂くならば、いままで聖書の記述のはっきり解釈できなかった部分にいと明快な光明がさし込むことであらう。

「エホバ神エデンの東の方に園を設てその造りし人を其處に置きたまへり……又園の中に生命の樹および善悪を知るの樹を生ぜしめ給へり、河エデンより出て園を潤し彼處より分れて四の源となれり……」(創世記第二章八―十五)

エデンの園について聖書にはこう書いてある。この記述では現実は何のことであるか、全くのおとぎ話的比喻の範囲を出ない。けれどこれに五十音言霊学による人間精神の根本構造図を重ね

て見ると意味は明瞭になってくる。言霊学によって人間精神の根本元素は五十である。これをア、イ、ウ、エ、オ五十音を当てはめて、その精神の構造を表わすと次の上図の如くなる。

図 37

五十音天津菅麻音図  
32子音

ワ	ナ	ヤ	ラ	マ	ハ	サ	カ	タ	ア
ヲ	ノ	ヨ	ロ	モ	ホ	ソ	コ	ト	オ
ウ	ヌ	ユ	ル	ム	フ	ス	ク	ツ	ウ
エ	ネ	エ	レ	メ	ヘ	セ	ケ	テ	エ
キ	ニ	イ	リ	ミ	ヒ	シ	キ	チ	イ

半母音

父韻

母音

次に新約聖書ヨハネ黙示録をみよう。「御使また水晶のごとく透徹れる生命の水の河を我に見せたり。この河は神と羔羊との御座より出でて都の大路の眞中を流る。河の左右に生命の樹ありて十二種の実を結び、その実は月毎に生じ、その樹の葉は諸国の民を醫すなり……」(第二十二章一―一節)

この黙示録の記述は創世記のエデンの園についての内容をさらに補足している。生命の水の河とは実際には何のことなのか。それは本論で述べたように、一点の曇りのない純粹の主観(ア、オ、ウ、エ、イ母音)より流れ出し、純粹の客観(ワ、ヲ、ウ、エ、キ半母音)と結んで現象を創造せんとする生命の流れでなくて何である

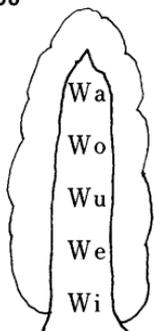
う。この流れに四つある。一は欲望・感覚 Euphrates (言霊ウ)、二に概念知 Hiddkel (言霊オ)、三に感情 Pison (言霊ア)、四に道德智 Gihon (言霊エ)である。そして聖書には第五の流

れであるべき言霊イより、牛に渡る種智・創造意志の父韻チ、キ、シ、ヒ、ミ、リ、イ、ニの記述をみることはない。なぜならこの第五の流れである言霊イの展相父韻（それが純粹主観である母音に働きかけて現象を創造するキツカケとなる創造意志である）の記述をせず、きたるべき降臨の救世主の持ち来る「天に在ます父の名」として、信仰の対象と規定しているからである。「天にいます我らが父よ。願はくは御名の崇められん事を。御国の来らんことを」。御名とは父韻のことなのである。人間生命におけるこの父韻の意義が、各宗教・神話・東洋哲学等に秘められた根本の密意である。この消息を知ってエデンの園といわれる精神の究極構造を図示すると、下図のように描くことができよう。実にエデンの園とは人間精神の根本構造を指示した比喩でありました。

☒ 38

## THE GARDEN OF EDEN

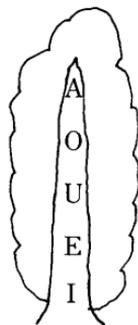
32 leaves of tree of life



The tree of wisdom

Pison ←				ha	sa	ka	ta
Hiddekel ←				ho	so	ko	to
Euphrates ←				hu	su	ku	tu
Gihon ←				he	se	ke	te
N	Y	R	M	H	S	K	T

Father's Name



The tree of life

話を次に進めましょう。「是に於てエホバ神アダムを熟く睡らしめ睡りし時其肋骨の一を取り肉をもて其處を填塞たまへり、エホバ神アダムより取りたる肋骨を以て女を成り之をアダムの所に携れきたりたまへり、アダム言いけるに此こそわが骨の骨わが肉の肉なれば此は男より取りたるものなれば之を女と名くべし」(創世記第二章二一—二四)

右の男と女と記されているのは何のことなのか。肉体を持った男と女とのみ解釈すると単なるおとぎ話の域を最後まで出ないことになる。男とは言葉のこと、女とは文字のことをいうのである。この話は古代の日本語ならびに文字で考えるとさらに明瞭となる。言霊原理から考察すると、言葉の発生の根本原理は八つの父韻の働きを示して  の図で表わされる。またこの図を古代肋骨と呼んだ。人間の肋骨の象形である。この言葉の原理を表わす図形から、その部分をそれぞれ取って造られたのが朝昼夜(アヒル)文字という古代文字であった。この文字はその後朝鮮にわたり、ハングル文字へと進展したのである。次に又黙示録を見よう。「我また聖なる都、新しきエルサレムの、夫のために飾りたる新婦のごとく準備して神の許を出で、天より降るを見たり。また大いなる声の御座より出づるを聞けり。曰く『視よ、神の幕屋、人と偕にあり、神、人と偕に住み、人、神の民となり、神自ら人と偕に在して、かれらの目の涙をことごとく拭い去り給はん。今よりのち死もなく、悲歎も號叫も苦痛もなかるべし。前のもの既に過ぎ去りたればなり。』かくて御座に坐し給ふもの言いたまふ『視よ、われ一切のものを新たにするなり』……」(第二十

一章二一五)「来れ、われ羔羊の妻なる新婦を汝に見せん」(九節)このように記されている新婦とは何を意味するのであろうか。羔羊とは言うまでもなく出現が予定されている救世主のことであろう。しかし救世主が救世主たるためにはある権能が必須となる。その権能が新婦の装いをした聖なる都、新しきエルサレムである。ご存知であろうが、エルサレムの街は碁盤の目のごとく道筋が経緯に通っている。このことから降臨する新エルサレムとは、人間精神の究極構造とその運用法を图示したエデンの園の原理すなわち言霊の原理特にそのうちの日本古神道でいう「天津太祝詞音図」のことでなくてはならない。「神と偕なる」言葉の言葉で現わされた人間精神の全貌を自覚し、運用する人にして初めて救世主たり得るであろう。そうだからこそ「我はアルバなり、オメガなり。始なり。終なり……」とすることができるのである。

以上、イエス・キリストがキリストであるための内容に関する聖書の記述の中のほんの少々を抜き書きして、その言霊学による解釈を提示してきた。その説明は極めて簡単でこれだけでは充分なご理解は得られないかも知れない。けれどもこれらの提案は単なる推理的な理屈からお話しているのではない。マタイ伝の山上の垂訓の信仰を身をもって実践し懺悔し、その果てに「もはや我生くるにあらず」と確認された境地から、あらためてこの書の本文に示した人間精神の全貌の書である言霊の原理をみるならば、これら聖書の最も深奥の真理が、そのまま何の疑問もなく心中にヒシヒシと納得されることであろう。さらにキリスト教の最深の教理を示す幾つかの箇所

をあげておく。それが実際に何を呪示したもののなかをお考え頂きたい。それらのすべてが人間の心の中の存在に關したことであることを離れては、信仰でも真理でもないことになってしまふであらう。

一、「斯神其人を遂出しエデンの園の東にケルビムと自から旋轉る焰の劍を置いて生命の樹を保守りたまふ」(創世記三章二四)

一、「海の水ながれ出でて胎内より涌いでし時誰が戸をもて之を閉じこめたりしや。かの時われ雲をもて之が衣服となし、黒暗をもてこれが襦袢となし、これに我法度を定め関および門を設けて、曰く此までは来るべし、此を越ゆるべからず、汝の高波ここに止まるべし」と(ヨブ記三十八章八―十一)

一、「なんぢ昴宿の鎖索を結び得るや參宿の繫繩を解き得るや……」(同上三十一)

一、「勝を得る者には、我かくれたるマナを与えん、また受くる者の外たれも知らざる新しき名を録したる白き石を与えん」(ヨハネ黙示録二章十七)

私に言靈学を教えてくれた故小笠原孝次氏は、話がキリスト教のことになるといつも次のように言われた。「仏教の禪に公案というのがあります。修行僧に向かつて老僧が質問を投げかけ、その間に対する答によって修行僧がどの程度に禪の奥儀を悟っているかを判断し、またその問答を

契機として修行僧に大死一番の悟りに向かわせませす。この意味からいえばキリスト教の聖書の全体が次のような一つの公案だと言うことができます。すなわち『イエス・キリストが救世主であることを汝一人に於て証明せよ』と。ここに密柑の種があります。この種が密柑の種であることを証明する唯一の方法は、確実にこれが密柑の種であると証明された種を持ってきて比べてみることであります。同様にイエス・キリストが救世主であることを証明する唯一の方法は、信仰に入ったあなた自身が、キリスト教を通じてこの世紀末の現代を救済する救世主として立つことである。それによつて『俺も救世主である。その眼で聖書を読んでも確かにイエスも救世主だったんだなあ』と証明が完成されるでしょう』

羔羊こひじが救世主たるためには、降臨するエルサレムを新婦はなよめとして娶めとらなければならない。エデンの園と称せられる人間精神の全貌を知らねばならない。「我を信ずる者は、我がなす業をなさん。かつ之よりも大なる業おおいをなすべし、われ父に往けばなり。……」(ヨハネ伝十四章十二節)父とは人間根本の創造意志であり、言霊学では父韻である。そこで最後に私は私の師の言葉をあなた方キリスト教者に呈することにしよう。

「イエス・キリストが救世主であることをあなた一人において証明して下さい」

## 漢方医学者と自然農法者へ

近年漢法医学が流行している。西洋医学の薬害が喧伝され、また中国との文物の交流が盛んになってきたためでもあろうか。しかしその漢法医学も完成されたものではないように思われる。そこで精神構造の究極原理である言霊学の立場から漢法医学の原理の面で少々助言を提供してみよう。漢法医学の完成に少しでも役立てば幸いである。

日本語の家(いえ)の語源は五重である。人間の心は五重すなわちウ、オ、ア、エ、イ、五つの次元宇宙の重畳に住んでいる。また生命の家は肉体である。漢法はこれを五臟五腑(六臟六腑)の経絡(けいらく)にとって、その経絡をコントロールする臟腑の名前をもって表わしている。

### 臟 腑

ウ	肺経	——	大腸経
オ	腎経	——	膀胱経
ア	肝経	——	胆経
エ	心経	——	小腸経

イ 脾経——胃経

心包経——三焦経

陰=====陽

この場合五臟（六）を陰、五腑（六）を陽と呼んでいる。陰とは陰より陽へ、天より地に向かうエネルギーであり、陽とは陽より陰へ、すなわち地より天に向かうエネルギーの流れである。天より地に向かうエネルギーは電気であり、地より天に向かうエネルギーは磁気であろうと予見する人もあるが、ここでは天の精気・地の精気というに止めよう。五臟五腑（六臟六腑）を養うためのエネルギーが、天より頭のとっぺんを通り足のつま先までを貫いて地へ、また地より足のつま先を通って頭のとっぺんまで貫いて天へ、流れている。そのエネルギーが五臟六腑の活動によつてさらに増幅拡大されて人間の生命は維持成長していると考えられている。さらに、東洋医学者芦沢勝助氏の文を引用しよう。

「……十二の経絡は、肺臓をめぐる肺経から始まり、順にそれぞれの臓腑を経て、肝臓をめぐる肝経を最後に、肺経にふたたび帰り、全体がつながっているのです。この経絡をエネルギーがうまく流れていれば、健康であるということになります。しかし時には、この循環系にエネルギー

ーがあふれてしまうことがあります。そこでこれを調節するため、十二経のほかにも、さらに八つの経絡が、体を、たてに横にそして斜めに流れているのです。これを奇経八脈と呼んでいます。中でも顔のまん中から胸・腹を通る任脈と、尻から背中・頸・うしろ頭・顔まで走る督脈は、たいへん重要な機能を果しています。いわば、十二の循環系をたえず調節して、臓腑に過不足なくエネルギーを送り込む役割を果しているのが、任脈と督脈というわけです。そしてこの経脈を流れているエネルギーは、気血、あるいは榮衛、経水などと呼ばれています。なぜ気血といふかといひますと、おそらく古代中国の人々は、人間が生きてる間、鼻腔から体内に取りいれるエネルギーを「気」と解釈し、怪我をした時に出る赤い血と合わせて、臓腑のエネルギーになると考えたのでしよう」(人体ツボの研究・23～24頁)

この気血と漢法医学で呼ぶものは単に気や血という五感に触れるものではなく、宇宙・大地より人体を貫通するエネルギーと考える方が妥当です。

禅語に「両頭を截断すれば一劍天に倚つて寒し」といふのがある。本書本文に示したように一劍とは生来天与の人間の判断力・言靈ア、オウ、エイ、五母音の自覚のことであり、この自覚体は天から大地の中心を貫いて立っていることが感ぜられます。これは宗教上の感覚のことですが、生命の本源を探究する場合、漢法の気血と称する生命エネルギーはやはり人体に凝集しながら天地を貫いていると考えた方が正確でありましよう。

また漢法ではこの気血の十二経絡を流れるエネルギーの調節作用として任脈と督脈をあげてはいるものの、実際の治療上ではただ五臓六腑の「相生相克」の原理の他にははっきりした治療原理を示していないのが実状のようです。そこに漢法医学の治療の不充分な箇所が発見されるでしょう。十二の経絡を流れる上と下からの、すなわち陰陽のエネルギーの調和が破れる時、五臓六腑に病気が出るのですから、その調和を回復する治療法を完成するためには、調節作用を担う奇経八脈、特に任脈・督脈の機能に関する法則を発見確認することが漢法医学完成の要諦であることは明らかであろう。

そこで言霊原理の登場です。

初めに書きましたように五臓五腑はアイウエオ五母音です。これに働きかけ、コントロールして現象を起こす根本生命意志はキシチニヒミイリの八父韻です。奇経八脈といわれる調節機能の根本はこの八つの父韻でなければなりません。中国の易経はこの八父韻を乾兌離震巽坎艮坤の八卦の哲理概念で表わしました。そして易は実際には算木をもってし、漢法医学では医師の経験と「感」の習熟に頼るより他はなかったのです。いま、五母音に次いで八父韻という言葉の原理を導入することによって、漢法医学の治療に確平とした規範ができあがることとなります。漢法医はこの規範に則って修煉し、治療することができましよう。

仏教に薬師如来があります。この如来は、既に仏陀としての資格を持ち仏陀の規範をすべて修

得しており、その規範に則って人の病を癒し世の中の混乱を療す如来、すなわち果位の菩薩です。仏陀としての資格を持たず、仏陀を目指して永劫の修業に励む菩薩は因位の菩薩といえます。因位の菩薩にとつては絶えざる経験の積み重ねが唯一のよりどころですが、果位の菩薩には永劫不變の人間の心の鏡を所有しています。漢法医学も五音の十二経絡に次いで、八父韻の奇絡八脈の原理を確立することによって、人間の健康を百パーセント規定する医学の法則をうち立てることができることになりました。漢法医学者の研究への参考となり得れば幸甚です。

さらに自然農法者にも一言申し述べましょう。近年自然食提供のための自然農法がもてはやされるようになってきました。まことにけっこうなことではありますが、自然農法と称する農耕で獲れた農産物はおおかたみてくれが悪く、商品価値が低く、減産し、自然食品店での価格は少なくとも何割か高いという欠点があるように思われます。それは一般の農法が使用する化学肥料・殺虫剤・消毒剤・除草剤等の人体への悪影響を除去することのみに力点がおかれ、それ以外のことが等閑に付されているからであります。筆者が約三十年前茨城県の鬼怒川の畔で数年間自然農法を実際に研究した経験と、前の漢法医学の項で述べたように、農作物にそそがれる、眼には見えないが確実に存在することが予見される、天からと地からの生命エネルギーという立場から、自然農法の研究者に一つのアドバイスを呈することにします。

現在の自然農法と称するものは、一般の化学的農法から化学肥料・除草剤・殺虫剤・消毒剤の使用を中止した以外、あまり工夫はみられない。わずかに化学肥料の代りに、草葉等の堆肥または自然酵母等の使用にいくらかの工夫がみられるだけのようである。これでは「放ったらかし農」の域を出ない。自然農法と呼ぶ以上、作物を育てる自然に関するあらゆる法則を探究して、作物が自然から与えられるエネルギーの吸収に支障のないようにし、作物がその種のもつ性能一ぱいのところまで生育し収穫が上るように人間が工夫して始めて自然農法ということができる。

それでは作物を育成する大自然とはどのようなものであろうか。

(一)、漢法医学の項で書いたように、一つの作物を通して生命エネルギーともいわれるべき、天から大地に流れるエネルギーと、大地から天に向かって流れるエネルギーがある。これは現在ではまだ確認ができてはいないが、人によつては天からのものはある種の電気であり、地からのものはある種の磁気であろうと予測している。筆者が自然農法を研究していた時、このエネルギーの存在を肯定しないではいられないような現象を幾度か経験した。

(二)、いまのところ計測できるものとしては、大気中からの太陽の光と、熱・空気・大地からの種々の養分・水分等が考えられる。

以上(一)に述べた天と地よりの二種類の生命エネルギーが、作物の種子・根・幹・枝・葉・花等の中で(二)に述べた種々の要素との結合によつて増幅拡大され、作物を成長させると考えられる。こ

れが作物を育くむ自然の摂理である。自然農法とは、作物とそれを育くむ環境とがこの自然の摂理に順応するよう工夫することである。決して現在の科学農法から金肥・殺虫剤・除草剤等々を差し引くだけの消極的考え方であってはならない。

それならば大自然の力を充分に發揮させ得るいかなる方法が考えられるか。

自然農法を初めて実行する場合、開墾した全くの更地であるより既存の化学農法を行っていた田畑であることが多い。そこで自然農法を始める前に一つの問題がある。化学肥料を毎年田畑に与えていると土地は必ず酸性化する。その酸性を中和させるために農耕の前に石灰を撒く。その中和の結果塩ができる。土地は、手起こしであろうがトラクターで起こそうが、特別な作物以外ではその耕やす深さはせいぜい十五センチ内外であろう。とすると中和してできた塩は、その、常に耕されないところに次第に堆積して、耕土の下に数センチの厚さの固い層を作る。この層は自然の循環においては決して発生しないものであるから、(一)にあげた上下からの生命エネルギーの交流をさえぎり、(二)に述べた供給、特に水分の下層からの毛管現象を邪魔することによって作物の日照の害を増大させてしまう。科学農法にあつては、この塩の固い層は耕地を一種の水槽の中の水耕栽培と同様の状態にすることによって肥料、その他の薬剤の流出を防ぐことになるかも知れないが、大自然の力を増幅させることによって作物を育てようとする自然農法にとつては、この塩の層は有害無益である。この層は取り除くかまたは砕いて土の下の方へ埋込んでしま

う必要がある。

ここで細々とした法則を述べるより私が実行し成功した一例を示す方がご理解が早いかもしれない。(図39参照)

もちろんこれは一例であって研究者はそれぞれの工夫をして頂きたい。(時は昭和二十七年、所は茨城県下館市、鬼怒川に近い既存火山灰土耕地) 自然の力がどのくらいあるかを試すために少々極端な方法を試みた。まず既存の表土(耕土)表面より約十五センチメートルを一畝(三十坪)にわたって取り除け外に出した。次に表に出て来た塩で固くなった数種の層を砕きつつ約深さ一メートルの土を完全に天地にひっくり返した。この作業は秋の収穫が大体終えた十一月下旬の頃である。初めに既存耕土十五センチメートルを他に取り除けたのは、その下の土を一メートルほど天地すると今まで作物を育てることになじんでいない全く新しい土が表面に浮んで来るため、自然農法初年度の収穫量が極度に減少するのを防ぐ目的であった。天地した深土の上に取りのけておいた既存耕土を乗せ、その耕土の中に

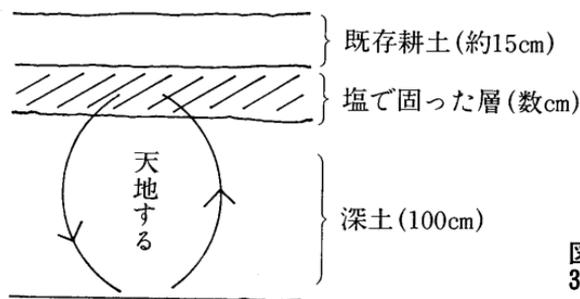


図 39

まだ残留しているであろうままに施した肥料分を風化・分解させるために、一月、二月の厳寒中にその表土だけを二、三度細かく耕やしながらか天地をくり返した。凍ったり太陽の熱で融かしたりを繰り返させたわけである。

春、粒つぶを選んで里芋を一坪一個の割で植えた。化学肥料はもちろん堆肥も一切使用しないため、初めのうちは寂しかった畑も梅雨明け頃には驚くほどの成長を遂げた。里芋の背丈二メートル以上、葉の長さ一メートル以上、茎の直径地上二、三十センチメートルのところで三十〜三十五センチメートルとなった。人間が立ったまま茂った葉の下を歩けるほどである。葉は傘の代用に充分である。この間二回ほど根元に廻りの土を寄せかけて二、三十センチメートルほど高くした。秋となり収穫の時期を迎え驚きはさらに倍加した。廻りを掘り引き抜いた根元に親芋、子芋、孫芋ときれいに三重の輪を作り、子芋、孫芋とも大人の握り拳大の大きな里芋であった。一坪一株、一畝三十株すべてに一株につき二十五 kilogram から三十二 kilogram の芋がとれた。四人家族であったら里芋一ヶで間に合った。庖丁を入れる時は固いが、煮るとすぐ柔くなり、しかも煮たための芋のぬるが全然出なかった。「一度食べたなら忘れられない味」と頷うなづけた人々から喜ばれたものである。

以上の里芋の他に、自然農法を研究した約五年の間に米・麦・芋類・大豆・野菜全般・お茶の木・ある種の果樹等について実験し成功、失敗双方を経験した。しかし失敗は後から考えて見れ

ば笑話と片付けられるほど、農の初歩も知らないための失敗のみであり、その事例以外は大体初期の成果を収めることができた。一定面積当り収量もどの作物をとつてもその当時の一般農家の収量を上廻るものであった。と同時にどの作物も「自然の味とはかくも素晴らしいものか」と感嘆されるほどのおいしさを経験することができた。

筆者が自然農法研究に従事した期間はわずか五年ほどでしかない。その後筆者の心境に変化があり、大自然の生命エネルギーの探究が農耕から人間精神の方へ転換したために、自然農法の実験を詳しくデータを添えて報告できないことは遺憾である。またその研究の行われた頃は、現在のようにまだ徹底した科学的機械農業が進んではおらず、また薬害等も大規模には起こっていない時であったから、筆者の実験も一地方の変り者の好奇的遊戯ぐらいにしか受けとめられなかった。それゆえ研究の熱心な後継者を得ることもできなかった。けれどもそのわずかではあったが着実な経験を振り返って今後の日本農業の将来に次のような助言を確信をもって与えることができる。

一、現代の農家は贅沢すぎるほどの農業機械と農薬による徹底的人工農法によって三十年前と比べれば各作物とも相当量の増収を謳歌している。と同時にその管理農法の土地養分の収奪による荒廃化、人体への悪影響が警告されてもいる。今後さらに水耕栽培にみられるように人工徹底管理農法は推進されるであろう。これは時の趨勢でやむをえないかも知れぬ。またこれも人類の

一つの経験である。しかしこれを推進する指導者は、その研究心の裏に作物を育てる、眼に見えぬ生命エネルギーが存在することを常に心に留めておいて頂きたいと思う。完全管理農法がその実在する生命エネルギーをも確認し順応する方法を見出した時、始めて、急増する世界人口に対応し、さらに人類の健康を保証し得る農業の実現となることであろう。

一、自然農法者はその作る農作物について、既存の農法と収獲量・鮮度・味覚・価格などすべてにわたって競争し得る自然農法を研究確立して頂きたい。眼に見える自然と眼に見えぬ自然のエネルギーを心に留めて、育てる個々の作物について土地作り・栽培法を探究していけば実現は必至である。消費者の嫌棄害心に甘える消極的自然農法者は、心機一転、大自然の持つ想像もできぬほどの大きなエネルギーの存在に目覚めて欲しいものである。

終りに筆者の自然農法の経験から気がついた事を二、三付け加えておこう。

一、荒地を開墾して自然農法を始める時は、その土地・作物に相応して自然の堆肥を表土に混じった方が初年度の成績はよくなる。さて堆肥は作る作物となるべく同種類の草木の葉・草茎の枯れたものを原料としたものが最も効果があるように思われた。田には藁堆肥、畑には草堆肥である。この場合以前日本で使用した下肥は必要としない。下肥の使用は土を固くする。

二、里芋栽培では極端に手のかかる土作りの例をあげたけれど作物によって土作りは工夫さるべきことである。ただ有金肥農法と違ふところは、いちどその作物に適した土を作ってしまうと、

翌年からはもう再び深耕の必要はないことである。土を固める原因が大方消えてしまったためである。特に旱魃には驚くほど耐久力を増すことを知った。土の深層からの水の毛管現象がスムーズになるためと思われる。

三、最近市販のお茶は、急須で立てる場合、二回がよいところで、三回はもう出涸らしである。栽培始めから自然農法でできたお茶は少くとも五回は味の変らぬお茶を立てることができた。腰の強いお茶の葉が収穫された。

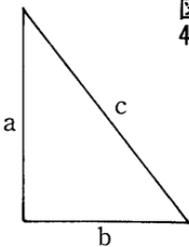
四、作物を育てる土作りを工夫すると、病虫害に対して信じられないほどの抵抗力を持つ作物が育つことをしばしば経験した。この事実の中に研究者は大自然の靈妙さを認識することだろう。

### ピタゴラスの定理

数学にピタゴラスの定理というのがある、直角三角形の直角を狭む二辺の各二乗の和は斜線の二乗に等しいという。ピタゴラスは紀元前五八二年ギリシャ・サモス島で生まれたと伝えられている。この定理にちなんだ言霊の原理についてお話ししよう。

人間の思考に二つの方向がある。一つは二つ以上の現象を観察して

図 40



その共通点を探し、概念的に共通する理論原点をつきとめようとする方法で、これを帰納という。後天より先天へ帰ることである。主に西洋思想がこれを代表する。それに対し先験的な原理をすでに自明なものとして、それより後天的な種々の現象を必然的に決定する方法であり、これは演繹と呼ばれる。主に東洋思想に代表される。それならなぜこのような東洋・西洋という大きな思考構造の二大別が生じてきたかという、それぞれの人々が使用する言葉そのものの構造に由来するのである。いまは東西のそれぞれの言語構造の説明は後の機会に譲り、帰納・演繹の思考の精神構造を言霊原理の立場から説明しよう。

まず、帰納であるが、ここに一つの現象がある(正)、次にそれと異なるもう一つの現象が起る(反)、この異なる二つの現象を総合する立場を法則概念的に求めるにはいかに考えるべきか(合)という場合、正反合の弁証法的思考が考えられる。この思考方法はどこまでいっても正反合の△三角構造をとる。一つの現象に精神面(形而上)と物質面(形而下)の二面があるから帰納思考を図形で表わすと△の形而上と▽の形而下の合体として☆のカゴメの図形となる。正反合の三数またはそれを形而上・形而下にとった六数は帰納思考の基本的数構造である。

次に演繹である。この思考法の数理構造は東洋思想の易の基本概念が最もよく表現している。その図表を示すと次のごとくなる。下図はその典拠となった言霊の原理図。(図41、42)

易ではこの構造を「易に太極有り。是れ両儀を生じ、両儀四象を生じ、四象八卦を生ず」とい

図41 大極

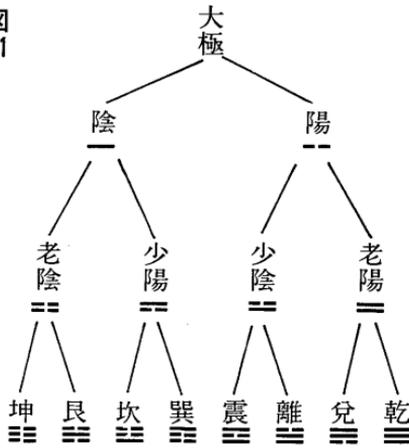
図42

下は総合。

考れば四数）と同意義である。父韻とは原理篇で述べたように何も無い空（母音）に働きかけて現象を生む原律である。これを図形で表わすと

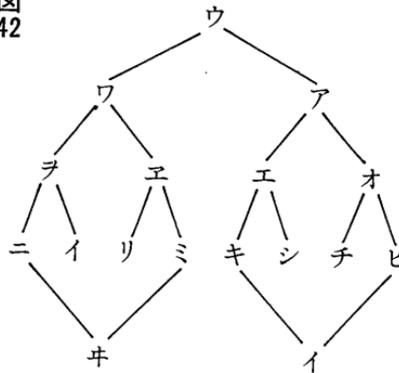
下は総合。

図41



(兩儀) (四象) (八卦)

図42



三と四、六と八はそれのみでは基本数を異にして統合されることがない。西洋はその思想の赴くまま現象のみを追いかけ科学を発展させたが、その独走から精神的荒廃を余儀なくされた。文明の黄昏である。一方東洋は根本原理精神への沈潜に数千年を経過し、貧困のどん底にあえいできた。両者はその立場の統合を望みながらいまだ成功してはいない。強行すればそれは片方が他方への屈服となる。現代までの世界の歴史状況がそれをよく物語っている。

現在世界人類の生存の危機状況を現出した精神と物質両文化の全くの跛行状態も、もとをただせばこの東西両思想が統合できないことが大きな原因である。

それならこれら帰納と演繹の二つの思考の全過程を完全に包含して統合する立場はないものなのだろうか。否、ある。それがア、イ、ウ、エ、オ五十音霊の原理の立場である。人間精神の理想完成図は言霊母音が経にア、イ、エ、オ、ウ（五音）、緯にア、タ、カ、マ、ハ、ラ、ナ、ヤ、サ、ワ（十音）が列ぶ。この五十音を上下陰陽にとると、図43のごとく百音図ができる。これを日本神道で百敷の大宮というところの言霊に則った政治の実行規範である。この数理は $10 \times 10 \parallel 10^2 \parallel 100$ である。

ところで帰納思考の図形  の数理六の実行態として陰陽・自他の組み合わせを考えると  $6 \times 6 \parallel 6^2 \parallel 36$  となる。同様に演繹思考の図形の数理八の実行程は  $8 \times 8 \parallel 8^2 \parallel 64$  となる。易でいう六十四卦である。

すると次のごとき等式が成立する。

図 43

ワ	サ	ヤ	ナ	ラ	ハ	マ	カ	タ	ア
ヰ									イ
ヱ									エ
ヲ									オ
ウ									ウ
ウ									ウ
ヲ									オ
ヱ									エ
ヰ									イ
ワ									ア

る思考パターンであることが明白となる。人間の心の運びは数によって表わされる。特に言霊の動きを数で表わす時、これを数霊と呼ぶ。人間精神の活動を言霊原理で整理する時、その論理の正当性を示すのに数霊の計算が適用できるのである。言霊オと言霊エとの次元の現象は生命の創

すなわち数理の上で帰納と演繹の二思考構造をとともに生かしながらそれらを統合できるのが言霊の原理であることが、これで証明されたこととなる。なぜこのような証明が可能となるのであろうか。帰納と演繹の思考パターンは、それら自体のみでは決して互いに相容れることはない。しかし人間精神の最も深い所にある創造意志言霊イの立場から見ると、これら二つの思考の先天構造がそれぞれ解明されてくる。帰納も演繹も共に言霊の動きとして捉えるならば、帰納は言霊オ次元活動であり、演繹は言霊エ次元のものとして、人間の創造活動を二分す

$$6^2 + 8^2 = 6 \times 6 + 8 \times 8 = 36 + 64 = 100 = 10^2$$

造意志言靈イによって創造され統轄されている。この論理の數靈的証明が  $6^2 \times 8^2 \parallel 10^2$  なのである。

過去三千年の間、互いに融和することなく、それぞれの分野に固執し続けた東洋と西洋の文化思想が、言靈原理の復活によって初めて統合の可能な立場を示されたのである。

言靈原理は紀元前少くとも数千年の昔に発見されていたはずである。「初め世界は一つの言葉なりき」。ピタゴラスのいた二千六百年ほど前のギリシャのサモス島にも当然流布されていたに違いない。とすればピタゴラスは当時自明の理である  $6^2 + 8^2 \parallel 10^2$  なる言靈の数理を、物質の面に応用してみても、それを幾何学の定理として発表したのではなからうか。精神現象と物質現象は究極には互いに裏と表なのである。

(言靈学随想終了)

## あとがき

最近言霊の話を知りたいと若い人達が訪ねて来るようになった。自分の心を満たしてくれるものを求めて各種の宗教・霊能者・心理学・哲学・食養等に魂の遍歴を重ねてきた人達である。自我と世界人類の問題を一つのこととして考えようと悩む人間の心の深奥のニーズに正面から必要にして充分に応え得るのは言霊の立場を措いて他にはない。若い魂はそのことを敏感に感じとるのであろう。この本はそれら話を聞きに来る人達のためのテキストとして書かれたものである。

言霊は各民族に伝わる神話の実態であり、言葉の言葉として人間の主観・客観の現象を根底において創造する生命意志の原理であるから、これを哲学的・心理学的に概念説明を盡くそうとするならば、いかほどの巻数の書物を要することであらうか。しかしどれほど懇切詳細な解説が与えられようと、それが指月の指であつて月そのものではないことに変わりはない。なぜなら言霊とは人生のいま・ここに人間の歴史を創造している原動力の実在であるからである。だからこの原理を、この世紀末的時代を生きる人間の精神の糧とするためには、この言霊理論に接した読者自

身が自己の心の内面に深く分け入り、心の奥にいきいきと脈うつ生命の要素である言霊そのものを自身自覚して頂く以外に方法はない。とはいえ人間は自覚すると否とにかかわらず、言霊によって生き言霊において生きるのであるから、言霊を自覚することは人間を最も平凡に生きることであるとも言えることができる。真理は常に日常の生活の中にある。この意味で言霊を勉強したい方は著者との一問一答の中に活路を見出して頂きたい。

(昭和六十一年二月三日記す)

### 言霊の会既刊書紹介

コトタマ学入門	言霊の会刊	一八〇〇円(送料三一〇円)
古事記と言霊	言霊の会刊	三二〇〇円(送料二四〇円)

## 言 霊

昭和六十二年十月二十日 第一刷発行  
平成 五年八月二日 第二刷発行  
平成十二年六月八日 第三刷発行

頒 価 一、六〇〇円(送料二四〇円)

著 者 島 田 正 路

発行所 言 霊 の 会

郵便番号 一〇四一〇〇五四

住 所 東京都中央区勝どき五丁目二一〇九

電話番号 〇三三三五三一六一二二

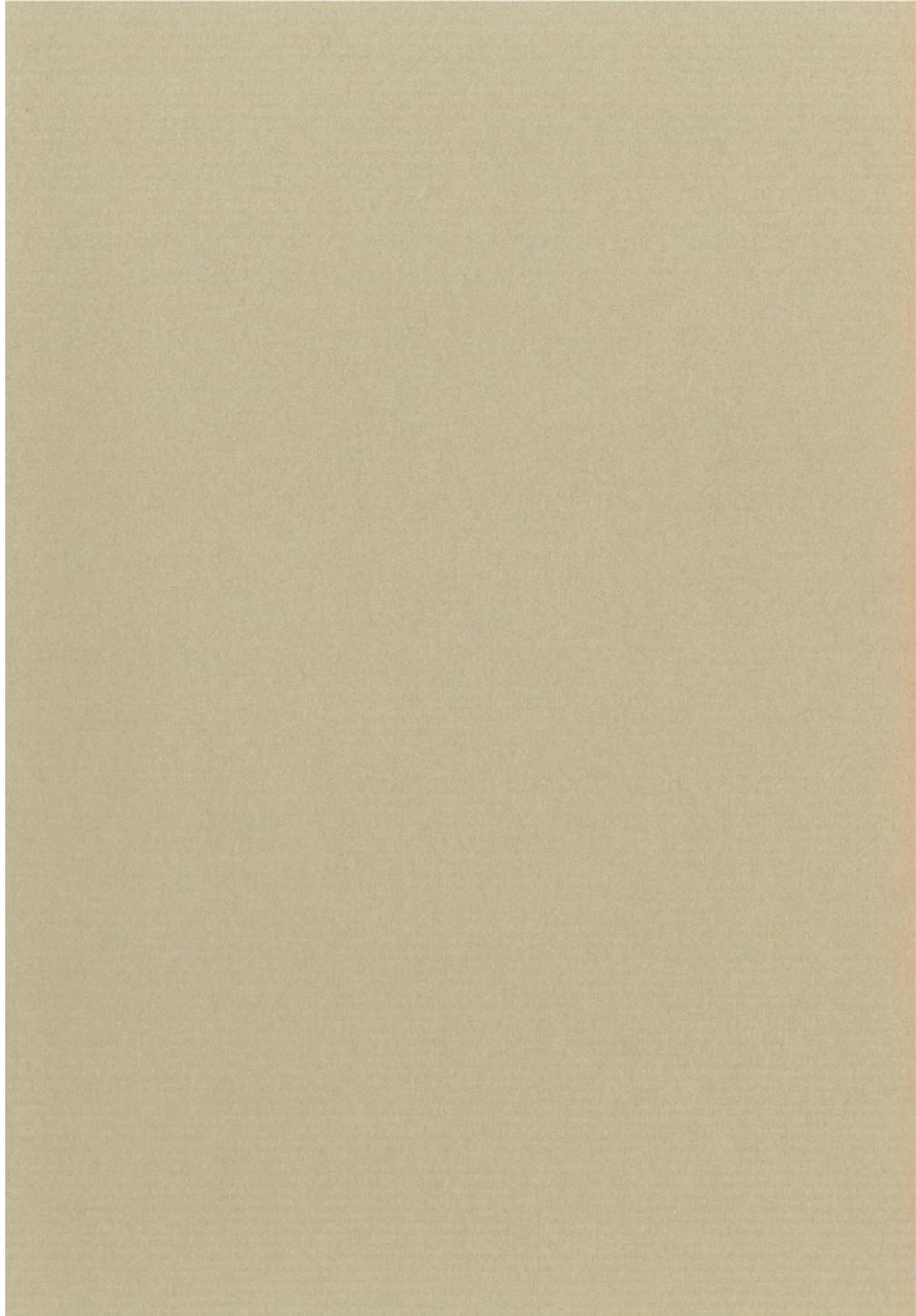
〇三三三五三一八七二五(談話室)

郵便振替 〇〇一二〇一三六五三九五四

言霊の会

印刷所 四葉印刷株式会社





頒価1,600円  
(送料240円)